

女子力は、神をも屠る物理破壊力

麻婆牛乳

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ありえた世界、望んだ世界

上手くいかない事なんて数え切れない程多いけど
勝ち取りたいからこそソレを乗り越えてみせる

そんな事を考える少女が、神に相対する物語

目 次

身を固めるなら、目標はしっかりとね！

異質な少女

始まり、旅立ちはいつだつて

正体、選ぶ道筋

雛鳥の産声

自分らしく、でいこう

手を抜かざる事、獅子の如し

必然と偶然は相反しない

ハイ・ソサエティ・ファミリー

素晴らしい世界

宙を飛び交う重戦車

尾ヒレどころか手足まで

『親切』の在り方は

言われ無き悪名

新型とは戦い方に非ず

ミッショynom『蒼穹の月』

『ロッソ』

ブローケン・アロー

巡り巡る奸策

然ればこそ、懷疑は去らぬ

再誕せよ 再起せよ 再臨せよ

馬車馬なんてもんじやない

やる気の無い休息

無手、されど淀みなく

少女が纏うもの

1本！

あの子とあたし

みんなにひみつのわるだくみ

266

255 244

身を固めるなら、目標はしつかりとね！

異質な少女

少女は1人、照明の切れ掛けた部屋のソファに横たわっていた。

開いた目はくすんだ赤い瞳。

髪は腰にまで掛かる程伸びており、手入れがされていない為外側に撥ねた部分が良く見つかる。

「…………」

無表情のまま天井を見る少女の傍らには1人の男性。

不機嫌そうに、手にしたクリップボードに何やら書き込んでいる様子。

「後は採血だ、注射は大丈夫か？」

「はい、問題ありません」

少女は簡潔に答えた。

が、何故か男性は更に機嫌を悪くした様だ。

用意をしていた注射針を消毒した部分に刺し入れる。

「チツ……何故奴の子が……」

「…………」

少女にはその態度を受ける理由に心当たりがあつた。

しかし少女は表情を変えず、目を閉じるだけに留めた。

「このガーゼで5分間は押さえておけ、揉むなよ」

「はい、有難う御座います」

チツ、という舌打ちと共に男性は部屋から少女を出る様に促す。

少女は一礼して足早に部屋を出た。

「やだなあ……」

少女はガーゼを捨て、簡素なパイプ椅子に頭を抱えていた。

先程の無表情とはうつて変わつて自己嫌悪に陥つた表情が見える。

「もう最悪……」で生きていかないといけないのに……」

彼女は孤立していた。

ここから門出だと、本氣で物事に取り組もうと自発的に動き出したのに。

ひとしきり頭を抱えた後、重い足取りのままエントランスへと向かつた。

「…………ん？」

少女がエントランスに足を踏み入れた所、異常な点に気が付いた。

まず先程の男性だ

私の検査をしていた男性が奥の方で事務員の男女数人と書類と電話対応に追われているのが見えた。

次に若い女性が物々しい機器を携えながら、先程少女が検査されていた部屋へ駆け込んでいた。

その手には『神機』――

この世界の人類の希望を携えた女性は、額に汗を滲ませながら消えて行つた。

「何かあつたのかな……？」

と、先程の男性が電話をしながらこちらの方へ歩いてきた。

電話を肩と耳で挟みながらクリップボードに何かを書き込み、少女の前で止まつた。

「…………はい……恐らくはその影響でしょう……」

「…………？」

少女は軽く首を傾げた。

どうやら私に用がある様だが立て込んでいる最中なのだから後にした方が良いのに、と思いながら固まっていた。

「はい……はい……ではまた後程」

「……何か御用でしようか」

男性は電話を切り、顔を少女に向けた。

その顔は無表情……かと思いきや、微かに恐怖を感じさせる引き攣った表情を見せていた。

「……つ、着いて来てくれ」

「……え？」

男性は答えを聞くより先に早足でどこかに電話を掛けながら歩き始める。

呆気に取られたが、頭を振つて走つて男性の後に着いて行く。

「……暫く事後処理で帰れそうもないな……」

「あの、もしかして……慌ただしくなつたのは私のせいなのでしょうか……？」

「……君は何も知らなくていい……」

焦り、困惑、恐怖

男性の仕草を見るだけでそれだけの感情が読み取れる。

知らなくてもいい、とはいえ〈適性試験〉を受けてここが〈これから働く職場〉になる為、知りたくなるものだが……

少女は無言を貫く事を決めた刹那、男性は立ち止まる。

「あのつきあたりの部屋に入れ、ではこれで」

「……はい？」

疑問符を浮かべる少女に見向きもせず、男性は今通った道を引き返していった。

少女は説明を求める意図をぐつと堪え、奥の部屋へ歩いて行き扉をノックをしてみたが、扉の向こうから反応は無かつた。

「失礼します……」

「はい、はい、たつた今こちらに……ええ……もうですか？」

こちらも電話中だつた。

部屋の内装や電話中の男性の服装からしてかなり偉い人なのだろうという事が感じ取れる。

「ええ、すぐ伝えます……はい……宜しく御願いします」

少女が部屋に入った事を確認した男性は電話を置き、少女に言い放つた。

「よう、そフエンリルへ、私が君の働くイタリア支部代表の……と言いたかつたのだがね……」

「は、はい？」

男性は自己紹介をしようかという所で申し訳無さそうな顔を向けて少女に語り掛けた。

「君の情報はこここの書類にある……【エレナ・コルテーゼ】14歳……合っているね？」

「はい、そうです」

「君の父【テオ・コルテーゼ】もイタリア支部出身……だからここで働く事してくれたのだろうけど……」

頭を搔きながら男性は言い放った。

「君は今日から極東支部に所属になつた」

「……聞いているかい？」

「……あつ、はい」

「いやまあ無理もないんだけど……」

ドカツと椅子に座り直した支部長は呆けていた少女、エレナに近くに寄る様促した。

「説明が……必要だよね？」

コクリ、とエレナは頷く。

なんといつても、情報が少なすぎる上に不安を搔き立てる事柄ばかり起こっているのだ。

「君にはゴッドイーターとしての適性試験を受けて貰ったんだけど……その……なんだね、特殊な事例が起こってね」

この言葉にエレナは顔を顰めた。

「私は……ゴッドイーターになれないのでしょうか……」

エレナにはゴッドイーターになりたい理由があつたのだが、暗い表情を向けて支部長に問い合わせた。

「正直な話、分からぬ……君の血液検査の結果、今迄のゴッドイーターラには無かつた反応がね……」

そう言いながら支部長は2枚の写真を取り出した。

「ゴッドイーター達は偏食因子という物を体内に取り込む関係上、事前にある程度検査をする訳なんだけど……これが検査前の君の血液ね？」

そう言いつつ写真をこちらに見せると、写真の中には試験管に入った赤い血液が見受けられた。

と、支部長はもう一つの写真をこちらに見せた。

「これが検査後の写真だ」

エレナは啞然とした。

写真に映し出されていたのは先程採血を行つた部屋全体だつたのだが、試験管の下部は碎け、机やパイプ椅子、床までもが黒い布の様な物に覆われ、それぞれが溶けた様に原形を保つていなかつた。

「……余りにも特殊な結果だつたから各支部に前例が無いのか聞いてみた所、極東支部に居る研究者の権威が食いついて来てどうしても君を極東へ招待したいと言つてきたんだ」

突拍子もないが、願つてもいなかつた話だつた。

〈ある〉理由からエレナはこの支部で嫌われている為、仕事はしたいが職場で孤立するというリスクを回避出来るという利点が大きいのである。

更に数点、異動として有利な条件があつた。

「勿論形式上は引き抜きだから物資援助して貰えて此方も大助かり、君もいくらかの援助が受けられるだろう」

「私が孤児だから動きやすい、という理由もあるのでしょうか？」

「……否定はしないがこうして私が推すのは極東支部、日本だからという点が大きいね」

エレナはイタリア人であったのだが、母親が日本人かつ父親は日伊のハーフであり、血統上はクオーターカット日本語を話すことが出来たのである。

つまり、今から日本語の訓練をする必要が無い上に極東に溶け込みやすいという利点があつたのだ。

「……と言いつつすまない、極東の権限は相当上位にあるからこちらに決定権は無いんだ……行つてくれるかい？」

「ええええ……」

思わず情けない声が出た。

「エレナ・コルテーゼ」の長い長い物語は、なんとも締まらない始まり方を迎えたのである。

始まり、旅立ちはいつだつて

エレナは貧困の最中命からがらこの世界を生き延びてきた。

両親を失ったのは10歳の時、それも目の前で〈アラガミ〉に捕食されたのである。

その時点でき延びられたのは良かつたものの、完全にフェンリルの配給のみでの生活を送ってきたのである。

それでも同じ様な境遇の者達と励まし合い、職を持つ者の手伝いをし、廃品等を拾い集めて金銭を得たりしていた。

それが今ではどうだろうか。

「オレンジジュースで宜しいですか？」

「あつはい」

飛行機に乗せられ、まるでいい所のお嬢様の様に扱われているではないか。

人生とはどう転ぶか分からぬ物である。

「ケツ、ガキが……良い身分じやあないかよ」

隣から陰口が聞こえるが、自分自身の状況を鑑みれば至極当然の評価である事位は理解していた。

乗客はこの男性しか居ないプライベート機だったのだが、エレナを乗せる為だけに出発を遅らせていた様なのだ。

「いやホント、めんなさい、こんな事になるなんてアタシも思つても

いなかつたんです」

「フン、立場を弁えているならいいさ……」

軽い愛想笑いをしながら男性の方を向くエレナ。

スーツを着こなした男性は葉巻をふかしながら考え方をしているようだつた。

その葉巻のラベルは白く、金色の文字が目を引く父も吸っていた物と同じ物であり――

「ダビドフ……」

思わず、その銘柄を口に出していた。

男性は相当驚いた様な表情をエレナに見せた。

「そのトシで葉巻が分かるのか？」

「父が……吸っていたんです」

そこからの会話はよく弾んだ。

男性はフェンリルに出資しているとある財閥の創設者であり、今乗っている飛行機も彼の私物である事。

たまたま極東に用事があり、飛行機を出そうとした時に極東支部からエレナをついでに乗せるよう依頼があつた事。

後は大体彼の軌跡ばかり聞かされたが、エレナは機嫌を損ねない様気を付けて相打ちを入れたりした。

そして、最後にエレナがどうしてこの飛行機に乗せられたのかを根掘り葉掘り聞かれた。

「自分でも分かつてないのか？」

「そうなの、その件も含めて極東支部に異動になつたんだけど……」

「そりやあ心配なのは分かるがな……」

初対面の印象の悪さは何処へやら、男性は親密に相談に乗つてくれた。

父が葉巻を吸っていた、というだけでこの関係が築けたのだから感謝してもしきれない。

と、添乗員の女性が声を掛けってきた。

「あと5分程で到着となります」

「おう、もうそんな時間か」

随分と上機嫌になつた男性は懐に手を入れ、財布とチューーブの様な物を取り出したかと思えば、財布から2枚の紙幣を抜き取りチューーブと共にエレナに差し出した。

「あんな態度をとつて悪かつたな、お詫びと餞別にコレを持つていけ」

半ば強引に押し付けられたのは高額紙幣のフェンリルクレジットを2枚とチューーブに入った葉巻だつた。

流石に悪いと言おうとしたエレナを遮り、男性は語り出した。

「お前のお陰で手を出すプロジェクトに目処が立つたよ……そしてその葉巻はこの縁の架け橋となつたモノだ、お守りに持つておけ」「しかし、コレは結構な額ですけど……」

「ハツハツハツ！ なあにそんなモン、減つた内に入らんよ！」

豪快に笑つた男性は立ち上がり、壁面に掛けてあつた外套を羽織りながらエレナに問うた。

「最後だ、名前を教えてくれ」

「……エレナ、エレナ・コルテーゼです」

「親切か、さぞや良い家庭に恵まれていたのだろうな」

くくつ、と男性はのどを鳴らして立ち去つて行く。
エレナは急いで立ち上がり、深々と頭を下げた。

「ありがとうございました!!」

「ああ、君の将来に祝福あれ!!!」

2人はこれから出会う事も無いのだろう。

しかし、清々しい気持ちで2人は別れる事が出来た。

「あー……」

その清々しさも、外に出た時にはもう無くなっていた。

土砂降りの雨は5m先の視界まで遮り、どうにも陰鬱な気持ちで

いっぱいになる。

どうにかこうにか、飛行場のエントランスまで辿り着いた時には全
身が雨で濡れてしまっていた。

エントランスを見渡してみると、黒い戦闘服のような物を着た男性
が近寄つて來た。

「あー……日本語、わかる?」

この声の掛け方からして、この男性が迎えの人物なのだろう。

久し振りに聞いた日本語に、エレナは答えた。

「話せるで、貴方が迎えの人なん？」

男性はゼラチンの分量を間違えたゼリーの様に固まつた。

数分後、またもやエレナは空の上に居た。

それもその筈、今度はヘリコプターで移動しているからであつた。

「しつかし驚いたぜ嬢ちゃん！日本語を話せるどころか関西弁混じりとはねえ！」

「母さんが関西人やつたからなー、自然とこうなつたんよー」

雨は未だに収まる気配は無く視界も最悪なままだが、ヘリコプターは何の問題も無く飛んでいた。

パイロットの腕が良いのか、搭載している機器が高性能なのか。

「そうそう、俺の名は笠原敦へかさはらあつし〉だ……これからも会う事になるかも知れねえから宜しくなー！アンタの事は聞いてるぜエレ

ナちゃん！」

「その割にアタシが日本語話せる事は聞いてなかつたんやな」「ハハハツ！聞くの忘れてたんだよ！」

非常に抜けた人だが、この人とは良い友達になれそうだな……などとぼんやり考えていた。

と、何やらパイロットに通信が入つたようだ。

「こちらホーネット……はい了解、1名……彼ね、了解！エレナちゃん、ちょっと寄り道するよ！」

瞬間、ヘリコプターが大きく傾き進路を変えた。
どうやら誰かを回収に向かう様だ。

「極東支部はちーとばかり個性的な面々が多いが腕は確かだ！今の内に良い印象を持たせておけば良い事あるかもよ！」

「アツシもかなり個性的やと思うよ？」

「ハツハハ！嬉しい事言つてくれるね！」

ああ、確かにこの人は個性的だ。

睨まれてる、さつき回収されて正面に座つてゐる人にめつちや睨まれてる

「……おいホーネット、コイツは誰だ？」

「ちーとばかし前に回収を頼まれた子だ！ほら、自己紹介してやんな！」

突然の振りに戸惑うエレナ。

正面に居る男性は成人して間もない程の年齢だろうか、中々にガッシリとした体に浅黒い肌をしており、青いフード付きのコートを羽織っていた。

「あ、アタシはエレナ・コレティーです、本日付でイタリア支部から極東支部に転属になりました……よ、宜しくお願ひします」

エレナは気圧されながらも一通りの自己紹介を終えたが、その男性の眉間にシワが増えるばかりであつた。

「その年齢で腕輪も無しに転属だと……？」

尤もな疑問であつた。

エレナは体つきも中身も年相応な14歳であり、ゴッドイーターとして働いている証拠の腕輪は無く、かといってスタッフとして働くには若すぎるのである。

「隠し事をしても無駄だ、全部話せ」

「おいおいソーマ君、そんなに問い合わせなくともいいじゃないか」

「黙れ」

エレナを睨む男性、ソーマはピシャリと敷に言い放った。

対するエレナはあれやこれやと色々考えては睨むソーマからどう逃れようと必死に言葉を出そうと悩み、絞り出す様に一言だけ発した。

「アタシにもよくわからないんや……」

ソーマはそんなあやふやな言葉に耳を貸しつつ、エレナの顔を睨み続けた。

エレナは泣きそうになりながら、何もかも諦めた表情でソーマからの返答を待つた。

「そ
うか」

ソーマから出た言葉はそれだけだつた。

エレナの答えに満足したのかは分からないが、ソーマはもうエレナを睨むことは無く、目を閉じて背を壁に預けた。

その様子を見たエレナは助かつたと言わんばかりに天を仰ぎ、大きく深呼吸を繰り返した。

「大目に見てやつてくれエレナちゃん、ソーマは昔つからこんな調子でよお！」

「黙れと言つた筈だホーネット」

「そいつあ無理な話だ！ 黙つて操縦してられないタチだというのは知つてるだろう！」

フン、と鼻を鳴らしてソーマはそこから黙り込んでしまった。

「はいお二人さん、そろそろ到着だぜ！」

精神を削るような問答を繰り返してからどれ程経ったのだろう。外に顔を向けたエレナの目に飛び込んできたのはイタリア支部よりも数段大きな防護壁に囲まれた無数の建物だった。

「ようこそ極東支部へ！此処がエレナちゃんがコレから生活する場所さ！」

「わあ…………すつぐくおつきい…………」

「ん？今の台詞…………ちょっと恥ずかしそうにもう一回言つてみてくれない？」

エレナは敷の頭を思い切りはたいた。

ヘリコプターが着陸するや否や、ソーマは手に神機を携え早々に地上に降り立った。

エレナもそこまで多くもない手荷物をまとめ、ヘリコプターから降りた。

「じゃーなエレナちゃん！俺は燃料補給が終わり次第直ぐに行かなきゃならんからここでお別れだ！」

「なんや、えらい忙しいんやね」

「ヘリの輸送はゴッティーター達にとつての生命線だからな……そこでソーマ君、1つ頼まれてくれないか？」

「……ああ？」

鬱陶しげに振り返るソーマをよそに、敦は手を合わせて言った。

「頼む、エレナちゃんを博士の所へ連れて行つて欲しいんだ……どうせこれから向かうんだろう？」

頭を下げて頼み込む敦。

ソーマは特に顔色を変えず――

「着いてこい」

とだけエレナに言い、極東支部内へ入つていった。

顔を上げて申し訳なさそうに手を振る敦に頭を下げ、エレナはソーマを小走りで追い掛けた。

雨は未だ衰える事無く、まるで雨雲もエレナに着いてきたかの様に極東を濡らした。

正体、選ぶ道筋

「はいはーい、いつものメンテナンスだけで大丈夫かな？」

「頼む」

あたしは今、ソーマさんに連れられて神機がたくさん置いてある場所に来た。

ソーマさんは顔がオイル塗れになつている女の人に神機を預けている所だつた。

「ちなみにその女の子はどうしたの？」

「知らん」

「……ふーん」

相変わらずといった感じだろうか、ソーマさんは不機嫌な様子のままそう答え、エレベーターらしき場所へ向かつていった。

あたしは女人に頭を下げ、ソーマさんをまた追いかけた。

「乗れ」

「は、はい……」

あたし達を乗せたエレベーターはゆっくりと高度を変えていく。

「……あの、ソーマさん」

「……何だ」

「もし、あたしみたいな見ず知らずの人間のせいで迷惑をお掛けしていたら御免なさい」

完全に気後れしていたあたしは、意を決してソーマさんに声を掛けみてみた。

当たり障り無く、不快にさせない様言葉を選んだつもりではある。

「……特に迷惑ではない……そのトシでそんな気遣いが出来るなら、お前は俺よりよっぽど上等な人間だ」

返ってきた言葉は、思っていたよりも優しかった。

かなり自虐的な所を見ると、ソーマさんはこれまで壮絶な生活を送ってきたのだろうか。

と、間髪入れずにある階層でエレベーターは停止した。エレベーターを降り、ソーマさんに続いて短い通路の奥にある部屋に入った。

「帰投した、あと客だ」

そう声を掛けられたおびただしい量のケーブルが繋がれた机の前で作業していた男性は、突然立ち上がってソーマさんに目もくれずあたしに向かつて小走りで近寄つて來た。

「待つっていたよ！ エレナ・コルテーゼ君！」

少し変わった眼鏡を掛けた男性はあたしの顔に激突する勢いで顔を近付けてきた。

ローブ……の様な服を着ていて糸目の男性は、何と言つたら良いのか……

「胡散臭い」

「初対面でその感想かい？」

「的確な観察眼だ」

「ソーマ君も辛辣過ぎるとと思うよ?」

男性は話を切るように咳払いをした後、ソーマさんにクリップボードを渡した。

「いつも通りに頼むよ」
「…………」

クリップボードを無言で受け取ったソーマさんは近くのソファに腰を下ろして鉛筆で何かを書き始めた。

それを見届けて、男性はあたしに話しかけた。

「さて……私はペイラー・神、この支部で博士と呼ばれているよ。早速だけど、君は何故此処に連れて来られたのか分かるかい?」
「…………うーん、さっぱりです」

ペイラーと名乗った博士はそんな答えに対し、何故か嬉しそうに頷いた。

「知らない筈だよ、君は人類史上初の……」

ゴッドイーターチルドレンなんだ」

あたしは首を傾げた。

ゴッドイーターチルドレン?

簡単に言えばゴッドイーターの子供ということだけど、それがそんなにおかしい事なのか？

「ゴッドイーターチルドレンだと？」

首を傾げていたあたしの横から声がした。

クリップボードから目を離し、博士の方を見ていたソーマさんの声だつた。

博士は大きく頷いて口を開いた。

「そう、彼女こそが初めてのゴッドイーターの子供なのさ！各支部にその子供達がゴッドイーターになる試験を受けたがっていたら、直ぐに報告する様に書類を回してたんだけどね……」

きつと回したのが7年も前だったのがいけなかつたのだろうねと、博士は1人呟いていた。

「ともかくエレナ君を呼んだのは、これから増えてくるであろうゴッドイーターチルドレン達の先駆けとして、私の研究に協力して貰いたいからなのさ！」

ようやく合点がいった。

あたしがイタリア支部での適性検査で起こつた類を見ない結果は、父がゴッドイーターだつた事が原因だつたのだ。

それなら博士が行う研究は他のゴッドイーターチルドレンの道標

だと理解し、快諾し——

「待て」

ようとして、ソーマさんから待つたが掛かった。

「まさかとは思うが、コイツを実験台のモルモットにする魂胆じやねえだろうな……？」

ソーマさんはいつの間にか立ち上がっていた。

感情が薄いのか表情は大きく変わらないものの、明らかにソーマさんは怒っていた。

博士は眼鏡の位置を調節しながら言った。

「それはないよ、確かに実験台という形を取つてしまえば成果は早いし上手く事が運べばゴッドイーターとして直ぐに動けるかもしれない……けどそれは上手く行つた場合の話で、折角ゴッドイーターになりたいと望んでくれてるんだから安全かつ確実に研究を進めようと思つて いる所さ」

博士はそう言つてソーマさんの方を向き、まだ説明が必要かい?とでも言うように余裕の笑みを浮かべていた。

ソーマさんはソファに座り直し、

「なら、いい」

と言ひクリップボードにまた何かを書き始めた。

「……博士」

「ん? 何か質問かい?」

そんなやりとりを聞いていたあたしは、ある点に關して考えていた。

「その研究つて、どれくらいの時間が掛かりますか？」

「ふむ、そうだねえ……研究の進み次第にもよるだろうけど、数年は掛かるだろうね」

数年――

それはつまり研究の間、あたしはここで特に動きもせずに研究が上手く進む様に祈るしか無い。

――それでは駄目、駄目なんだ――

そんな考えが浮かんでは募り、焦燥感とも言うべき感情が入り乱れる。

博士の答えから5秒も経たない内に、あたしは一つの決断を下した。

「あたしを――実験台にして下さい」

カラーン、という音が隣から聞こえた。

鉛筆を落としたソーマさんが目を見開いて此方を見ている。

博士は表情こそ変わらないものの、口が半開きになつていて驚いている事が分かる。

「テメエ……！」

急に立ち止まつたソーマさんはあたしの胸倉を掴み、壁に押し付けて怒りを露わにした。

「ソーマ君！あまり乱暴な事は——」「黙れ……」

博士の静止を振り切り、ソーマさんはあたしを睨みつけ静かに語り掛けってきた。

「どういう了見だ……！安全で確実な方法が有ると言われただろうが……テメエは死に急ぎたいだけの自殺志願者か……！」

胸倉を掴んでいた腕に力を込められ、壁に擦り付けられたあたしの体が浮いていく。

苦しい、怖い、しかし逃げる気は毛頭無い。

ソーマさんは優しいんだ、あたしが間違つた道を進もうとしているから……それを正そうしてくれているだけなんだ。
だから、あたしはソーマさんの腕を握った。

「御免なさい、ソーマさん……」

「……謝るなんら、最初から言うんじやねえ」

胸倉を掴む手の力が抜け、足が地面に着いた。

しかし、あたしはまだソーマさんの腕を離さない。

「……離せ」

「……ソーマさん、あたしは……」

キツ、とソーマさんの顔を見つめた。

「……あたしが安全な選択肢を選んだら、私以外のゴッディーターチルドレン達は、研究が完成するまで震えて過ごす事になつてしまふんです……！」

ソーマさんの腕を強く握り、涙を零しながら声を絞り出した。

「あたしは死ぬのは怖いけど、皆が死ぬのはもつと怖いんです……っ！」

ソーマさんの腕を離した。

ソーマさんはあたしの顔を見つめ、あたしもソーマさんの顔を涙を流しながら見つめ返した。

「…………そうか…………」

ソーマさんは目を閉じ、ソファへと引き返した。
流れの涙を拭い、博士に頭を下げた。

「お願ひします……！」

今のやり取りを見た博士自身はどう思つているのだろうか。

研究を早期に完成させる事が出来るかも知れない嬉しさか、それとも研究が上手くいかなかつた場合にどうするかという焦りか。額に手を当て俯いたまま、博士は口を開いた。

「……すまない、こればかりは私の一存では決めかねる問題なんだ」

あたしは顔を上げ、博士の顔色を窺う。

どうやらあまり悩んでいない様子を見る限り、研究の方はそれなりに自信は有るようだつた。

「ヨハンに聞いてみよう……ああ、ヨハンというのは此処の支部長をしている友人だ」

と言い、あたしが入ってきた部屋の扉に手を掛けた。

「着いて来たまえ」

そう言つて、博士は部屋を出て行つた。
あたしも扉の前まで歩いて行き、

「ソーマさん、有難う御座いました……」

ソファに座り、腕を組んで前を向いたまま何も言わないソーマさんにお礼を言つてから部屋を出た。

ソーマさんは何も言わず、こちらに顔を向ける事は無かつた。

そうしてあたしは、博士と一緒にエレベーターに乗つていた。

先程のやり取りで暗い表情のあたしを見かねたのか、博士が声を掛けってきた。

「ソーマ君はね、君とは違う形の特殊な人生を送つてきているんだ」

顔を上げたあたしを見て、博士は続けた。

「私がソーマ君の立場だったとしても、同じ様な反応をしていたと思うよ……尤も」

苦く、微笑むような表情が向けられる。

「女の子の涙には、敵わなかつたんだろうね」

その言葉は、随分と心が落ち着く呪文だつた。

「博士って、結構口マンチストやね」

「そりだらうともさ……といふか、君は関西弁を喋るのか」

ちよつぴりいたずらつ子のように舌を出して、博士を困らせるあたしだつた。

「ヨハン、入るよ」

また別の階層、違う部屋に博士の後ろを追つて入ったあたしは部屋を見渡した。

イタリア支部とは違い豪華では無いものの、落ち着いた雰囲気が見てとれる。

部屋の中には大人の男性と女性が1人ずつ。

「早いな、その子が件の子か？」

「そうだよ、流石支部長だけあつて手回しが早いじゃないか」

男性はあたしを射抜く様に見つめた。

少しだじろいだが、軽く頭を下げてぐつと堪えた。

「しかし何故此処に連れて來た？その件に関しては君に一任すると
言つておいた筈だが？」

「それはそうなんだけどね……彼女は〈D案〉を希望しているから相談
に來たんだよ」

男性は博士の言葉を聞き届け、微かにではあるが目が大きく開いた。

「……席を外してくれるか？」

「はい」

女性は簡潔に答え、手に持つた資料を抱えて部屋を出て行つた。
あたしの事を奇怪そうな目で見てから。

男性は机に肘を掛け、あたしに目を向けた。

「ヨハネス・フォン・シックザール……極東支部の支部長をしている」

この男性も感情は薄そなうだが、あたしの事を観察するように目を向けてくる。

「〈D案〉……君がこの案を希望すると言うのなら止めはしない、此方としても嬉しい誤算だ……が、この案は安全上の問題は〈理論上〉クリアしているだけの突貫工事とも言える研究だ」

少し、肩の力が抜けた。

博士が軽く頷いている所を見れば、この研究で死ぬことはないのだろう。

「つまり君の体にどのような悪影響を及ぼし、どのような結果すら得られるかは全くの未知数……そのリスクを理解した上で希望するのかね？」

是非も無い。

支部長はこのリスクをしつかりと説明してくれたし、そこに私が不都合に思う事は特に見当たらない。

「この先の、皆の助けになるのならば」

雛鳥の産声

そこからあたしの日々は嵐の如く進んだ。

細かなメディカルチェックから始まり、粘膜採取や電流による脊椎反射や細胞の動きの観察、果ては薬物投与による経過観察を繰り返し、数日間眠れなくなる事もあった。

その間、博士一人であたしに声を掛けてくれながら疲れた顔を見せながらも研究を行っていた。

「いいね……これだけのデータがあれば……」

博士は疲れてはいたものの、それを上回るように顔を輝かせて嬉しそうな声を出していた。

「エレナ君、体調に異変は無いかい？」

「大丈、夫……やよ……」

博士に比べると、あたしはかなり消耗していた。

ただラボのベッドに横たわってはいたが、疲れが残るのみで気持ち悪さや体の痛みなどは無い。

「疲れている所申し訳ないけど、このまま採血をさせて貰うからね」「うん……お願い……」

博士はいくつもの注射痕の残る左腕をアルコール消毒し、注射器の針を刺し入れる。

「……よく、頑張ったね」「……えへへ……」

1ヶ月程は経っていたのだろうけど、あたしがこうして耐えられたのは、博士が優しい言葉を掛けてくれたお陰なのだろうと常々思つてゐる。

その事を数日前に博士に告げたら

「メンタル面の安定は、実験にも良い影響が出る事がデータとして出しているからね」

と言われた。

照れ隠しじやないのかと博士をからかつたりしている内に、あたしは博士に敬語を使わなくなつたし、博士も悪くは思っていない様だ。

「さあ、今日はこのまま眠りたまえ
「……博士も……程々に……ね……」

最後に何とか言葉を紡ぎ出し、あたしは意識を何処かへと放り投げた。

「さあ、最後の仕上げだ」
「……うん」

あの血液採取の後、5日間食事と睡眠をしつかり取りながら体力を回復したあたしは大きな期待を抱いて博士の前に立っていた。
どうとう、この時がやつてきたのだ。

「エレナ君用に用意した偏食因子……P53に別の偏食因子を使い、ほんの少し改良を加えた」

机に置いてある黒いカプセルに目をやる。

「技術上……机上の理論ではあるけど、全ての問題点はクリア出来ている……」

「……後は、あたし次第やね」

博士は神妙な面持ちであたしを見つめた。

「エレナ君、当初に言つた通りこの偏食因子を使つた場合の人体への影響は未知数……これだけのデータが得られたら後1年あれば、起ころであろう副作用と解決法まできっと見つかる」

「それでも、今やるのかい？」

「…………」

目の前には、神機の置いてある天板の様な物まで付いている変わった台がある。

どうとう、どうとうあたしは此処へ来たんだ。

『久し振りだね、エレナ・コルテーゼ』

あたししか居ない部屋に響く声。

奥の壁の上にあるガラス張りの部屋に立つ人影を見て、その人物の名前を思い出す。

「ヨハネス……支部長」

『正直、驚いている……まさか1ヶ月という短期間で〈D案〉を完了間近まで持つて行くとはね』

その言動の割には、無表情過ぎる気もするが。

『さあ、深呼吸したまえ……今回は特例でペイラード直々に君のサポートを行う』

「……はい」

何かしらのモニターで遮られていたが、その奥に博士は居るのだろう。

博士が居てくれるのなら何も心配は無いと、神機の置かれた台まで歩を進める。

『自分のタイミングで始めるといい』

待ち望んだ——適合試験

目を閉じて2回の深呼吸
目を開けて神機を見る

黒く、あたしが持つには余りに大きな機械
持ち手を見る

ここだ、此処に手を置けば良い
集中力とは裏腹に弾む鼓動

覚悟は——出来た

ガシャン!!!

台が降り、あたしの手は挟まれた
別段痛みは無い、が——

熱い——

熱い熱い熱い熱い熱い——

体が、全身が熱い
脈動するのが分かる、筋肉
軋むように、形を変えようとする骨
ハツと息を吐くと、寒い訳でも無いのに、白い煙が口から、溢れ出
す

視界が歪む

立ち眩みか、貧血に近い何かに目を閉じる

考えていた程では無い
これ位なら、耐えられる

『――おめでとう
君がこの支部初の新型ゴッドマイターだ』

声が聞こえ、目を開ける。

台はいつの間にか上がつており、腕輪が填めらていた事が分かつた。

神機を持ち上げると、先程までの先入観が嘘のように簡単に持ち上
がつた。

『気分は悪くないかね？』
「……多分、大丈夫です」

微かにまだ、白い煙が口から出る。
体もまだ、熱い。

『直ぐにペイラーを向かわせる、共にラボへ戻りメディカルチエックを受けたまえ……君には、期待している』

視界も、完全には戻っていない。

よろめきながら扉にたどり着き、部屋を出た。

「エレナ君！大丈夫かい!?」

部屋を出て、直ぐに聞こえてきた声は早足で駆けつけてくれた博士のものだつた。

「博士……大丈夫……歩ける……」

「……兎に角、ラボへ行こう」

まだ足取りは危ういが、不思議と適合試験を受ける前よりも体は軽かつた。

「水だよ、飲みなさい」

「うん……」

ラボに到着したあたしはいつも寝ていたベッドに腰掛けて、博士から水の入ったガラス製のコップを受け取つた。

刹那――

パリン、小気味の良い音を立て、コップはあたしの手の中で砕け散った。

「あ、ごめん……」

「いや大丈夫だ、怪我は無いかい？」

「……大丈夫」

掌を見たが、ガラスで手を切つてはいない。

なんだかおかしい、そんなに力は入れていなかつた筈なのに。

と、今度は金属製のコップを手渡された。

「これなら、大丈夫だろう？」

「あ、ありがとう」

ぐいっと水を一気飲みする。

適合試験の件で軽い脱水症状になつていたようで、渴いた喉に水がよく染み渡り、熱さが落ち着き体が更に軽くなるのを感じる。

「あんがと博士、落ち着いたよ」

「…………」

博士は難しい顔をしたままだつた。

「何か、おかしい所はあるかい？」

パツと見たところ問題ないと判断した博士は問診に切り替えた様だ。

「体が、凄く軽いよ」

「それはゴッディーラーなら皆、始めに感じる事だろうね」

あたしはハツとして、腕輪を見た。

そうか……あたしは——

「ゴッディーラーに、なれたんやね」

思わず、笑みを零した。

博士はそんなあたしを見て、安堵したのか

「研究は、大成功だね」

とだけ口にした。

とはいえたまでも安心は出来ないと、博士は軽い検査を始めることにした。

「基本的なデータを取り直すよ、まずは身長から測ろうか」

なんともレトロな身長計に背中を合わせ、測定してみると148.3cm

やつぱりあたしは背が低いなあ、と心の中で思いつつ前と何も変わっていないことを確認し、次は体重を測る。

「準備は出来たよ、乗ったまえ」

「はーい」

あたしは軽い足取りで体重計に飛び乗った。

その瞬間――

「?」

博士の目が開いたのを見て、ビビった。

博士は眼鏡を取り、置いてあつた眼鏡拭きで擦つた後にもう一度確認、あたしに降りるよう促し体重計をリセットしてから乗り直し、再度確認。

こちら側には結果が見えないタイプの体重計なので、何がおかしいのか分からぬ。

眉間に深い皺が寄つてゐる。

「……エレナ君、1ヶ月前の体重は？」

「えつと……確か44・2kgやよ……？」

何かおかしかつたのだろうか……確かに体が異様に軽いように感じるが、もしかしてあたしの体から何かが無くなつたとかだろうか……

博士は立ち上がつて私に告げた。

「落ち着いて聞いて欲しい……」

「う、うん……」

「今の君の体重は――138・4kgだよ」

自分らしく、でいこう

1時間後――

不調から完全に回復したあたしは、博士から極東支部内の自由行動を許可された。

何を隠そう、この1ヶ月間は博士のラボラトリ内で缶詰状態、支部内を出歩いた事など無かつたのだ……博士、監禁罪だよ？

尤も、情報統制やあたし自身の為等々色々な理由がある事位は理解できているつもりである。

「何処へ行こうかねー」

とはいえ、いざ自由行動と言われてもあては無いのが現状である。後々考えればいいかと、ロビーの方へと向かう事にしてみた。

「……はえー……」

ロビーに到着したあたしは辺りを見渡す。

1ヶ月前にも確かに来たのだが、ほぼ素通りしただけでじっくりと見てはいなかつた。

カウンターの様な場所に立つ女性の人や、ニュースを大きく映し出しているモニター、そして色んな物を床に置いて座り込んでいるおじさん。

……いや、最後のは何かおかしいでしょ

「おじさん、何してんの？」

話し掛けたみると、博士に負けず劣らずな胡散臭い眼鏡を掛けた顔をこちらに向かってた。

「よう嬢ちゃん、新入りかい？」

「あ、うん」

「じゃあ説明してやろう……俺はよろず屋、君達が任務で使う消耗品や装備を整える素材、あと衣類まで取り揃えているのさ……これから長い付き合いになると思うから宜しくな！」

あら、思つたよりかなり人が良い。
この人見た目で絶対ソンしてる人だ。

「でもこんな所でそんな事やつてて、変な目で見られたりせーへん?
「まーな、でももう慣れたもんだ……折角だから、消耗品でも見て行く
か?」

カバツとスーツケースを開けたおじさんに勧められて、中身を覗いてみる。

何やら液体や錠剤やらが大量に詰まっている。

「特に回復錠は大事だ。君達の仕事は常に危険と隣り合わせなんだから、不慮の事故に備えて沢山持つておく事をお勧めするね
「おひとつおいくら?」

「50F_cだ」

あらとつても良心的。

まあ、ゴッドイーターとしての割引サービスみたいな物もあるのかと思いつつ、財布を覗いてみると全部で21,200F_c入つてた。
20,000は飛行機でスーツの男性に頂いたお金、1,000は

極東支部からの新人用支給金、200は元々のあたしが持っていたお金だった。

「10個ちょーだい」

「毎度！」

またくるねーと手を振り、薬をポケットに仕舞つて振り返ると、カウンターの女性と目が合う。

特に立て込んでる様子も無いので、思い切つて話し掛けてみる事にした。

「ちょっとといいでですか？」

「はい……あれ、新人さんでしようか？」

あたしの腕輪を見て、カウンターの女性は和やかに話し掛けてきた。

「はい、エレナ・コルテーゼといいます」

「エレナさんですね、私は極東支部オペレーターの竹田ヒバリといいます、データを照合しますので少々お待ち下さい」

と、前にあるモニターに何かを打ち込み始める。

この人も中々美人だなあとぼんやり考えて待つてみる事数秒間。

「ああ、ありました……エレナ・コルテーゼ14歳、新型ゴッドイーター……新型!?」

大声を上げて口に手を当てるヒバリさん。

その声に釣られたか新型という単語に釣られたか、上のラウンジから数人が顔を出した。

そして直ぐに顔を引っ込めたかと思えば

「オイオイオイ聞いたかよ」

「どうどうアナグラにも新型が……」

「今之内にお近付きになつた方がいいんじやねーの？」

などといった声が聞こえてくる。

「あの、ヒバリさん」

「……す、すみません！何でしよう!?」

明らかに明らかにテンパつているヒバリさんに問い合わせてみた。

「新型つて、何？」

あたしはヒバリさんに教えられて、よく分からぬ場所に立つて居る。

ガチヤンガチャンと忙しく、色んな人が忙しそうに部屋をあちこち動き回っていた。

「あつーこつちこつち——！」

そうしてあたしを呼んでくれている人は、何処かで見覚えがあつた

…

「キミ、新型になつたんだつてね！」

近寄ると、手袋を脱いであたしの手を掴んで嬉しそうに振り回した。

そうだ思い出した、確かこの人はソーマさんが神機を預けていた人だ。

「私は楠リツカ、神機の事ならお任せ！」

「あ、ありがとうございます、エレナといいます……宜しくお願ひします」

「敬語なんていーのいーの堅苦しい！」

パツとあたしの手を離し、リツカはニコニコしながら顔を近付けてきた。

オイルで汚れてるけど、この人も大概美人だ。

「はーい、敬語使わんよー」「オッケー！」

近くにあるパイプ椅子に座る様勧められる。

腰を掛けるとリツカはクリップボードを手に、あたしに色々な説明を始めた。

「神機には大きく分けて旧型、新型があるんだけど、旧型神機は剣形態と銃形態のどちらかに決まってるんだよ」

「へー」

「そこで登場したのが新型神機！」

とつてもテンションの高いリツカは嬉々として説明をしてくる。説明好きなのか神機が好きなのか、ともかくリツカの説明に真剣に耳を向けた。

「新型神機の特徴はなんと言つても剣形態や銃形態にフレキシブルな

チエンジが可能という所！」

おおーと拍手してみると、リツカは更に気を良くした様で踏ん返り返つた。

「で、こちらが完成した新型神機になります」

「料理番組かいな」

適度なツツコミを入れつつ神機に目をやると、チエーンソーの様な剣に妙な方向を向いた多連装の銃口が見て取れる。

「一番の問題点は細かい調整が必要かつ、纖細で適合する人がほんの一握りしか居ない点くらいかな……これからエレナちゃんの使う神機だよ」

あたしの、神機。
手に取り、持ち上げると……

「……なんか、軽ない？」

「いや、それでも新型としては標準的な重さだよ……刀身、銃身、装甲はカスタマイズ可能だから色々試してみると良いかもね」

神機をポンポンと浮かせたりしながら、大体フォーク位の重さかなあと考えてみた。

筋力が上がっているのは承知の上だが、こうして実みるとかなり違和感がある。

「いやでもおかしいな……新型神機は旧型に比べて重量がかさむから、エレナちゃんが持つにはこれでも重い筈なんだけど……」

「そーお？」

心当たりはある、あるのだが口止めされている。

適当にはぐらかしながらこの神機をどうしようかと考えてみる。

ひとしきりリツカに調整をお願いした後、あたしはロビーへと戻つてきた。

あたしの招集連絡がリツカに届いたからだ。

ヒバリさんの隣を会釈しながら通り過ぎると、近くのソファアに誰かが居るのが見えた。

ガムを噛みながら足をばたつかせ、モニターを見ている黄色い服を着た男の子。

「チャラそう」

「……本人の前では言わないで下さいね」

ヒバリさんに厳重注意された。

んんつと咳払いを1つ、男の子の隣に座つた。

「ねえ、ガム食べる？」

男の子は気さくに話し掛けてきた。

こちらが何かを言う前にポケットをゴソゴソと探つたりしている。

「あ、切れてた……今食べてるのが最後だつたみたい、ごめんごめん」「いや切れたらその時に気付くやろ」

「まーまーそう言うなつて……アンタも適合者なの？俺より年下っぽいけど」

男の子はあたしの顔を覗き込む。

「そうちやよ、1ヶ月前くらいから此処に居たけど会うのは初めてやね……よろしくねー」

「え、マジ？俺の方が後輩かよー……」

少し肩を落とした男の子を見て苦笑い……していたら何時の間にか、女性が正面に立っていた。

その目は、射抜く様に鋭い眼光だった。

「立て」

「……えつ？」

「バカッ！」

間の抜けた男の子に罵声を浴びせつつ、腕を掴んで立ち上がらせる。

直感……というか見た目で分かる、この女性は怒らせると怖い人なのだと。

「……お前に免じて叱責は無しにしよう

「ありがとうございます！」

「えつ……えつ？」

頭を下げるあたしと女性を交互に見る男の子。

女性は顔をしかめつつも、男の子に言つた。

「藤木コウタ、準備が出来たので今からメディカルチェックを始める。
直ぐにラボラトリのペイラード博士の所へ行け」

「え？ ラボラトリ？」

「さつさと行け！」

男の子、藤木コウタは跳ねるように体を震わせ、エレベーターの方へと走つていった。

女性はこちらに目を向けた。

「エレナ・コルテーゼ、お前にはまず訓練を受けて貰うつもりだつたが、神機のメンテナンスが終了していないので先に自室を案内しよう」

「はい、お願ひします！」

「……良い返事だ」

少し、目つきが優しくなった女性は踵を返し歩き出し、あたしはその後ろを着いていった。

「1ついいか？」

「あっ、はい」

エレベーターで移動中、女性に話しかけられる。

しかし、この女性の背中や横が紐で留めてあるだけの丸出しに近い服、なんとも言えぬセクシーさがにじみ出ている。

……なんかあたし、思考がおっさんっぽい。

「1ヶ月間、お前は外に出た記録は無く、それなのに私はお前を見てい

ない……

「あー……」

思い出した、この女性は最初に支部長室に居た、あたしに奇怪な目を向けた女性。

というか、ゴットイーターでもない人の外出記録まで付けられてい るのか。

「博士の研究に協力していました」

「……ペイラー博士の？」

「はい、もし知りたければ博士に直接聞いてみた方が早いかもしませんね」

「……だ」

所謂、新人区画と呼ばれる階層。

その扉の前で、女性はこちらを向いた。

「お前の荷物は鞄1つだけだつた様だから、既に部屋の中に運んである。基本的にお前の好きに使つても良いが、あまり汚し過ぎないようにな」

そうしてエレベーターの方へと歩く女性。

「私の名前は雨宮ツバキ、また1時間後に迎えに来るから待機してい る様に」

それだけ言い残して、ツバキさんは姿を消した。

部屋に入るとベッドが1つに簡易的なキッキン、後ターミナルが目を引く。

大きなソファの上に置かれたボストンバッグが私の荷物の全てだ。腰を掛けて上を向く。

「1時間ね……」

ターミナルでもいじつて、時間を潰そうか。

手を抜かざる事、獅子の如し

1時間半後、あたしは何もやる事が無くなつた為、身体能力を調べようと部屋で出来る筋力トレーニングをしていた。

腕立て伏せ……余裕過ぎる、千回や万回でも休憩を挟まずに出来そうだ。

逆立ち……問題なく出来る、腕や体を震わせる事も無くビシツと決まる素晴らしいバランス。

腹筋……最早、誰かに引っ張られる様に力を使わず体を起こす事が出来る。

ならば……

「入るぞ！」

「えつあつ！ちょっと待つてっ！」

プシュツ、と音が鳴り響く扉。

その向こうからツバキさんがあたしを見て、眉間の皺を増やしていった。

「……何をしているんだ」

「いやつ、あは、あははは……」

あたしは逆立ちをしていた。

それも只の逆立ちでは無く、片手……それも指2本のみを使用した

逆立ちである。

その体勢のまま手首のスナップを効かせ、半回転して着地してみせる。

「ゴッドイーターって凄いですね……こんな事を疲れも無しに出来るなんて……」

「ゴッドイーターでも出来ないぞ普通……」

ツバキさんは目頭を押さえて唸る。

あたしは申し訳なく思い、深々と頭を下げた。

「まあいい、これから昼食後訓練を行う」

「はいっ」

「1ヶ月分の食券を与える、無くしたら支給されなくなるから大事にする様に」

そう言つて渡されたのは紙の束。

というか無くしたら絶食確定ですか。

「昼食を終え次第神機を受け取り訓練所へ来るよう、以上だ」

バツ、と敬礼するあたしをよそにツバキさんは立ち去っていく。

取り敢えずあたしは食券を1枚取り出し、財布も部屋に置いて鍵を掛けてから部屋を出た。

「お、あんたも昼食か」

「ああ、確かコータやつけ?」

それなりに人が居る食堂で塩茹でされたでつかいトウモロコシにかじりついていたあたしの隣にコーダ、藤木コウタが座る。ゴツディーターになれても食事事情は厳しい物なんだなあ、と囁み締める。

「あんたエレナつて言うんだってな、挨拶が遅れたけど宜しくな

「名前、誰から聞いたん?」

「博士だよ、あんたは俺の同期で期待の大型新人だって一人で盛り上がっていたよ」

うん、期待の大型新人つておかしいよね……等と談笑しながらトウモロコシを平らげ、コーダより先に立ち上がる。

「ほな、あたしは先に訓練行つてくるで

「おう、頑張れよ!」

互いに手を振り、食器を片付けてメンテナンス部へ歩き出した。

「待つてたよ!」

リツカが腕を振りながらあたしを呼ぶ。

傍らには、先程よりもかなりゴツくなつた神機が置かれていた。

「頼まれた通り、剣と銃は重量級のバスターとブラストに装甲もタワーシールドに変えておいたよ……でも、持てる?」「どれどれ……」

神機を試しに持ち上げてみると、その見た目とは裏腹に簡単に持ち上がる。

というか、完全にあたしの身長を余裕で超える大きさなのにこんなに簡単に持ち上るのは違和感しか無い。

「何で、簡単に持ち上げるの……？」

「…………」

表情を固めるリツカに無言で返す。

正直な所、フォーケが肉厚になつただけ……という感想を述べたかつたが、喉元で抑える。

「…………あんがと、これからも宜しくね」
「…………う、うん」

自分の身長よりは大きな神機を担いで出て行くあたしは、呆然とするリツカの目にはどう映つていたのだろうか……

『……随分と体格に合わない物を持つているな』
「……ごめんなさい」
『まあ、扱えるのなら問題は無い』

訓練所はそんなに広くは無く、少し高台が見受けられる程度だつた。

上方にあるガラス張りの部屋からツバキさんが見下ろしている。

『まずはウォーミングアップだ、移動や神機を振り回して慣れておけ』
「はい」

神機を担ぎ走つてみると、適合試験以前よりもかなりのスピードが出る上に疲れも無い。

次に部屋のすみに移動し、踏ん張つて向かい側にジャンプしてみる。

と――

「へぶう!!!」

『?』

ビターン！という音と共に、あたしは向かい側の壁に激突した。
思わず、神機を途中で取り落とす。

『大丈夫か!?』

「あだだだだ……大丈夫れす……」

顔をおさえ、神機を拾つて立ち上がる。

ジャンプ力が明らかにおかしい、立ち幅跳びの世界記録がこわれる。

『身体能力にタフネス……異常だ……』

「しかし軽いなー神機つて」

『しかも重量級の神機を枝を振る様に……』

ツバキさんが驚きの連続を繰り返しているが、出来る物は仕方ないのだ、うん。

と――

『今から訓練用のダミーアラガミを出す……剣か銃、好きな方で倒せ』

部屋の中央、その床から何かが生まれ出てきた。

――ダミーアラガミ――

『取り敢えず初めてのアラガミ戦だ、動きは止めてあるから安心しろ』
「はっ、はい……」

少し、身がこわばる。

何度も、アラガミを目にはしてきたが逃げることしか出来ない相手
だった。

しかし今度は、狩る番なのだ。

「……行くでッ！」

天井の高い部屋を見上げて踏ん張り、跳ぶ。
最高点に到達し、神機を振りかぶる。

「ハアアアアアアアッ!!」

「どうしたから、こいつはお前に任せる」

「ええ……」

数分後、あたしは神機を持ったままツバキさんの後ろで縮こまつて俯いていた。

話し終わつたツバキさんはあたしの肩に手を置き、あくまでも優しく

「お前のせいじゃない」

と言つて去つて行つた。

取り残されたのはあたしと、黒髪の男性。

「……あーなんだ、雨宮リンドウだ、宜しく」

「……エレナ・コルテーゼです……」

位置はロビー、ヒバリさんの後ろに当たるラウンジの様な場所だ。リンドウさんは頭を搔きながらあたしを見た。

「さつきのは本当に、お前が？」

「……（）迷惑をお掛けしました……」

数分前、訓練所に居たあたしはダミーアラガミを粉碎した……文字通り、粉碎である。

それだけに飽き足らず、神機を叩き付けた衝撃が訓練所を揺るがし、頑丈な訓練所は無事だつたのだが、ツバキさんの居た部屋のガラスを振動だけで碎き、極東支部全体を揺らした。

その振動から地震か、アラガミの襲撃かと支部の人達が慌てふため

き、場内放送で何でも無いと放送され鎮静化させたりした。

そんな威力を叩き出した神機だが、全く壊れた気配は無く新品同様である……リツカすごい。

「あー氣にするな、知っているのは俺と姉上だけだから、な？」

ポンポンと頭を叩かれる。

その優しさが涙腺にくる。

「兎も角、お前は俺の第1部隊に配属された……訓練の続きを兼ねて、一緒に出撃しようか」

こくり、と頭を下げるヒンドウさんはビバリさんの所へ歩いて行つた。

「よーエレナちゃん！久し振りだな！」

「おー、アツシやん久し振りー」

「なんだ、知ってるのか？」

ヘリポートで出会つたのは、此処へ連れて来てくれたヘリパイロットの敦だつた。

「さあ乗つた乗つた、直ぐに出発だ！」

「おう、宜しく頼むわ」

「よろしくなー」

乗り込むと、数秒後には空の上。

やはり、敦は中々の熟練バイロットなのか。
あたしも随分と気分が晴れてきた。

「どうどうエレナちゃんまでゴッディーターになつたかー、大物になれよ！」

「ははは、ある種もう大物にはなつてるな」

「言わんといてリンドウさん……」

そんなやりとりをしている内にも、ヘリはぐんぐんと速度を増している。

「心の準備は大丈夫か？ 今回の目的地は近いからあつという間に到着するぞ」

「はい、随分リラックス出来ました」

「おーこりや確かに大物の風格だ、あつという間に追い抜かれるかもなあ」

「冗談は休み休み行つて下さいよリンドウさん！ アンタを追い抜くな
ら、オリンピック全種目で金メダル総ナメにする方がよっぽど簡単だ
だあ！」

3人の大爆笑がヘリ内に響き渡る。

良かった……この職場なら、あたしは上手くやっていけるだろう。

「命令は3つ、死ぬな、死にそうになつたら逃げろ、そんで隠れろ、運が良ければ不意を突いてぶつ殺せ、だ」

「リンドウさん、4つになつてんよ」

「んあ？あーまあいいさ、とりあえず死ぬな、それさえ守れば後は万事どうにでもなる」

大雑把な命令だが、理に適つてはいる。

「初出撃の新人に出す命令やないよね？」

「いーんだよ、自分で考える事も大事だ」

前に広がるのは建物が幾つか見える場所。贖罪の街、というらしい。

「今のところ、此処に居るのははぐれたオウガテイルが1体だけだ。危なくなつたらケツは持つてやるが、倒すのはお前がメインだ」

「りょーかい、隊長殿」

「最後まで、油断はするなよ」

最後の真剣な一言に頷いて返し、神機を構える。
広くは無い街だが、まずは捜索から始める。

「……居た」

リンドウさんの声に足を止め、見渡すと広場のあたし達の位置から対角線上に白い何かが居る。

あれが、オウガテイル。

「好きにやつてみな、俺は後ろについている」

「了解」

距離はおおよそ50mといった所か……此方には気付いていないが、キヨロキヨロと辺りを見渡しているのが見える。

奇襲は難しいか……だが一気に距離さえ詰められるなら、避けられる前に刃は届く筈。

「力は……これ位かな」

「……？」

不思議そうにあたしを見るリンドウさんをよそに、脚に力を調節して込める。

「——行くで！」

ドンツという音と共にあたしはオウガテイルに向かつて跳ぶ。距離感が心配だが、飛び越えたらその時だ。

そう思っていたが——

「……え？」

オウガテイルがこっちを向いた。

まさか、跳んだ時の音でバレたのか!?

「エレナ、下がれ!!」

いやいや無茶言わないでリンドウさん、あたし空中で高速移動中だよ？

躊躇つたが覚悟を決める、このまま振り抜く！

ドオン！という破壊音が響く。

オウガテイルは、仕留めていない……目測が少しづれてしまつた様だ。

「……まだやつ！」

バスターを地面から抜き、全力の横薙ぎを動きを止めて目を丸くしているオウガテイルに見舞う。

すると……

オウガテイルの上半分が消え、消えた半分は遠くにあつた街の壁に張り付いていた。

必然と偶然は相反しない

「今のは流石に、無茶が過ぎたな」

「ゞ、ごめんなさい……」

あたしは、街に新しく出来たクレーターの中でリンドウさんに頭を下げていた。

引き攣つた笑顔を見せながらオウガテイルだつたものに近付いていくリンドウさんは、どことなく背中が煤けていた。

「ほら、死体が消える前に捕食だ」

「捕食？」

「これだ、これ」

そう言つてリンドウさんは自分の神機を見せる。

ああ、そういえば倒したアラガミは捕食形態で捕食するのが基本だつたつけ……

とにかく、さつさと捕食して帰ろう、体は大丈夫だけど今日は謝り過ぎて精神的に疲れた……

「……今日はついてないな」

「……なんかもう、ホントごめんなさい」

手早くオウガテイルを捕食したあたし達は、迎えのヘリを待つていたのだが……突然のゲリラ豪雨に見舞われた。

「記念すべき初陣でこの雨か……」

「その……あたし、濡れやすい体质でして」

「……すまん」

何故かあたしに謝ったリンゴウさんは前かがみになつていた……
なんで？

濡れやすいというのは今回に限つた話ではないのだが、毎年の誕生日や極東支部に来た時、昔は只の水溜まりでコケて全身ずぶ濡れになつた事すらある。

つまるところ、あたしは水難体质なのだ。

「俺は少し用事を思い出した、今すぐ風呂に入つて飯を食つたら明日に備えろ、以上！」

「えつ、あつはい」

支部に到着し、適当な指示を受けて一緒にエレベーターに乗つていったリンゴウさんと別れた。

帰り道のリンゴウさん、なんだか歩き方がおかしかつたけど……足でも捻つたのかな？

「おーエレナ……つてどうした？ 何でそんなにズぶ濡れになつてんだ？」

「あつ、コーダ……」

あたしの部屋の隣からコーダが出て來た。

なるほど、ほぼ同期だつた事を考えると部屋が隣になつていても不思議ではないか。

「任務帰りなんやけど、途中で大雨がな……」

「うわあ……早く風呂入つて来いよ。その後一緒に夜飯食いに行こうぜ！」

「うん……そうしよか」

さつさとお風呂に入つて暖まろう……そこまで寒くないけど、濡れた服が気持ち悪い。

……ご飯、またトウモロコシじゃないよね？

「あら貴女が例の新人……どうしたの？」

「もうトウモロコシは勘弁です」

次の日、グロッキーなわたしは午前中の任務に現地集合で随伴してくれる女性と落ち合つた。

この人もまた美人……というかその露出おかしいよ！・トンでもないセクシーな体だし！

「それに比べ、あたしは……」

「あの、大丈夫？ 任務出来る？」

「大丈夫、大丈夫です」

最後の言葉は、どちらかと言えば〈絶壁〉の自分に言い聞かせる様に呟いた。

そうだ、体つきがなんだ……あたしは皆を笑顔にする為に集中すればいいんだ！

「今回の任務はオウガテイルが数体、で良かつたですね？」

「そうよ、ちょっと調子悪いみたいだからしつかり援護するけど、私は遠距離専門だから前衛は宜しく頼むわね」

はーい、と返事をしてアラガミが居るであろう方向を見る。

嘆きの平原、と呼ばれているらしい。

嘆きの平原……平原……ああ駄目だ、思考がループする前に出撃し

よう——

「おかしいわ貴女」

「直球過ぎません?」

結論から言つて、オウガテイルが4体居た。

30m程離れたオウガテイルを今度は外さず1発で粉碎、残りの3体が気付くが、突如〈消滅〉した仲間を見て動きを止めた。

その内の近くに居たオウガテイルを捕食形態の神機に呑えさせ、他の2体のオウガテイルにぶん投げて纏めて転ばせた所に女性の射撃で一網打尽。

結果、力技でスマートに終わつた。

「どうか何? アラガミを投げて他のアラガミをコケさせるとか聞いたこと無いわよ?」

「いや、あたし新人だから型にハマつた戦いとか出来ないですしちゃ……」
「……の体格でよくやるわね……」

何度も言うが、わたしは身長が低いし体つきも寸胴だ……決してや
けになつた訳では無い。

……チクショウ。

「そ、ういえ、トウモロコシが嫌だと言つてたけど……まさか食券だけで食事してる?」

「え? そうですけど……」

「お金を出せば、別の食事も出来るのよ?」

なんと、知らなかつた。

なんでも、食券だけの場合は必要最低限の食事しか出来ず、食券+お金で食事をするのが極東支部での常識らしい。

「じゃあ、入隊祝いに今日のお昼ご飯はお姉さんが作つてあげよつか?」

「え?! いや、悪いですよ!」

「いーのいーの、若い内はお姉さんにうんと甘えておきなさい、ね?」

ああ駄目だ、このままではプロポーションだけでなく、性格の面でも完敗だ。

「それに午後はソーマとエリックが同じ任務に就くから元気を付けておかないとね!」

「え——」

ソーマ、ソーマさん?

まさか、あの人も第1部隊だったのか!?

「ん? どうしたの?」

「ああいえ、ソーマさんとは面識があつて……」

「……ねえ、もしかしてリンドウからウチの部隊のメンバー聞いてな

いの?」

第1部隊のメンバー?そんな事は何も聞いていないし、言つてもいなかつた筈だが……

小首を傾げるあたしを見て、女性は頭を抱えた。

「御免なさい……リンクドウは強いし頼れるんだけど、どうにも適当なのよね……」

「あー確かに」

「もう把握されてた!?」

と、ここでヘリのローター音が聞こえて来た。

予定よりかなり早く終わつたせいで随分と待たされてしまつたが、まあ仕方ないだろう。

「続きはご飯を食べながらにしましようか」

「ゴチになりますっ!」

「うふふ、気が早いわよ」

今日は、雨が降る事は無さそうだ。

「はい、お待たせ」
「うわあ……すつごい……」

お皿に盛り付けられてれたのはカルボナーラ。
パスタが食べられるなんて、何年ぶりだろうか。

「イタリア出身つて聞いていたからね、お口に合うかどうかは分から
ないけど……」

「絶対いいお嫁さんになれますよ……」

「あら、嬉しい事言つてくれるわね」

コレがまた、拝みたくなる位美味しい……よし、あたしも手料理覚
えてご馳走しなきや。

「じゃあ食べながらだけど第1部隊のメンバーを教えてあげるわ……
私は橘サクヤ、宜しくね」

「え、エレナです！嫁に来て下さい!!」

「100年早いっ！」

軽くデコピンされた。

「リンドウが隊長で26歳、極東支部の……いえ、ゴッドイーター最強
とまで言われているわ」

「ゴッドイーター最強？」

「ええ、彼に敵う人は居ないほど凄いのよ」

「そうだったのか……ならあの態度は余裕の現れといった所だらう
か。」

「そしてソーマ、彼は最年少の12歳でゴッドイーターになつて、7年
間アラガミを狩つている凄腕なの。ただ、一人で抱え込む事が多いか
らそれが問題かな……」

「……やっぱりですか……」

ソーマさんは初対面のイメージで何となく分かつてはいたが、他人
をあまり寄せ付けない態度を取つているのだろう。

「そして最後にエリックだけど……彼は一……まあ説明しなくてもいいかな」

「え？ それ酷くないですか？」

「だつて彼、何も言わなくても自分から全部話しちやうもの」

どんな人だろう……逆に気になる。

「……ご馳走様でした！」

「はい、お粗末様でした」

そう言つて皿を片付けるサクヤさん。
あたしは驚いて思わず口を開いた。

「いやいやいや！ 片付けくらいやりますよ！」

「いいのいいの、これだけ綺麗に食べててくれたのだもの。私がお礼を
言いたい位よ」

なにこの聖人、涙が出て来る。

「そうそう、第1部隊は特に個性的だけど……年齢は関係なく敬語を使つたりしないわ。早く信頼されたいならそれを覚えておくといいかもね」

「そうなんですか？」

「ええ、エリックは17歳だけどリンドウにタメ口で話しているから
ね……リンドウが堅苦しいのが嫌い、という理由も大きいけどね」

リンドウさん、確かに26歳だったよね……あたし、12歳も離れて
るじゃないか。

「さあ、次は鉄塔の森での任務よ。あの2人は対照的だけど、どちらも

根はいい人だから気楽に行つてらっしゃい

「はい！ありがとうございました！」

勢い良く頭を下げる、部屋を出て行く。

確か、次の任務も現地集合だったかな……

ヘリを降りて歩く事数分、鉄塔の森と呼ばれる場所に辿り着いた。が、見渡すと気分がどんどん落ち込む。

「水場あるやん……」

と、崖下に2人の人影が見えた。

今回はオウガテイル複数にコクーンメイデンというアラガミが複数の大乱戦という事で、神機を銃形態に切り替えてから降りていく。

「おまたせしましたー」

「…………」

ソーマさんから露骨に顔を逸らされた……もしかして嫌われちゃったのかな……？

と思っていたら、もう1人の方が手を振りながらこちらに向かって走ってきた。多分彼がエリックだ。

「お、君が例の新人クンかい？」

燃える様な赤い髪を搔き上げ、世話しない手の動きを見せながら男性は語り始めた。

「噂は聞いているよ……僕はエリック、エリック・デアリフオーゲルヴァイデ。君もせいぜい僕を見習つて、人類のため華麗に戦ってくれたまえよ」

口を開けてエリックさんの前口上とも取れる声を聞き終わり、同時に笑いが込み上げてくる。

サクヤさん、説明しなかつたのは正解だつたのかもね、と心の中で呟いた。

刹那――

「エリック、上だ！」

ソーマさんの叫び声が響く。

動搖しながら即座に神機を構えると、エリックさんが落ちてきた何かに組み伏せられる。

――オウガテイル――

大きく口を開け、エリックさんの頭に食らい付こうとしていた。

「う、うわああああああつ!!」

エリックさんとわたしの叫び声が、重なつて鉄塔の森に響き渡つ

た。

オウガテイルは、遅れて駆けつけたソーマさんが切り裂いた事で倒れた。

あたしは、へたり込む。

目の前には……

肩を抑えてうずくまる、エリックさんが居た。

「大丈夫か……!?」

「う、うう……僕は、助かつたのか？」

あたしは、その時心の底から見せたソーマさんの安堵の表情を忘れることは無いだろう。

「……油断するからだ」

直ぐに表情を戻したソーマさんは懐から無線を取り出し、帰投用のヘリコプターを呼んだ。

あたしはなんとか立ち上がり、エリックさんを壁際にもたれかけさせて肩を見てみた。

「これは、外れていますね……」

「……脱臼、かい……」

オウガテイルがエリックさんを襲つた時、あたしは無意識に神機のトリガーを引いていた。

偶然にも銃形態だつた神機に装填されていたのはモルターパーで、オウガテイルをよろけさせるには十分な威力を持つており、その隙にソーマさんが切り裂いてトドメを刺したのだ。

しかし、そのモルターパーの衝撃をモロに受けたエリックさんは地面に叩き付けられ、肩を脱臼してしまつていた。

「ごめんなさい、もつとちゃんとした対応を取つていればこんな事には……」

「エレナ」

名前を呼ばれ、振り向いてみると無線連絡が終わつたソーマさんが神機を担いでいた。

「ヘリが到達するまでに任務を終わらせる、着いて来い」

「で、でもエリックさんが……」

「大丈夫……片腕が使えるなら、華麗な僕には援護する位訳ないさ」

左手で神機を持ち立ち上がるエリックさん

凄い精神力だ、肩が外れた上でまだ援護するつもりだなんて……。

そう思っていたが、ソーマさんは

「邪魔だ、ここで待つていろ」

そう言い放つて、一人で歩いて行つた。

「……ははは、相変わらず手厳しい……エレナだつたね？僕には構わず行つてくれ

「……速攻で帰つてきますから、何かあつたら信号弾を使って下さいね？」

再びエリックさんをもたれかけさせて神機を剣形態に切り替え、近場で戦闘を始めていたソーマさんの元へ飛んだ。

ハイ・ソサエティ・ファミリー

カローラを思い出す。

日本では人参という名前の野菜だが、土に埋まつたアレを抜く時は中々に爽快だ。

何故そんな事を思い出したかというと――

「どつせええええい!!!」

地面から生えたコクーンメイデンを捕食形態の神機で引っこ抜き、そのまま捕食する。

これを抜く時の感覚が、どうにもカローラを土から抜く時に似ているのだ。

「…………」

「これで全部やなあ」

しかめつ面のソーマさんは残つたアラガミの死骸を全て捕食し、溜め息を吐いた。

「戦い方が出鱈目過ぎる、堅実にやれ」

「あ、すみませんソーマさん……」

ペコペコと頭を下げるど、ソーマさんは目を閉じて2回目の溜め息を吐く。

「……ソーマでいい」

「……え?」

「呼び捨てでいいと言つたんだ、調子が狂う」

目を開けてあたしを見ている。

落ち着いて見ると、ソーマさん……いや、ソーマって……

「すつごいイケメンやよな」
「…………」

完全に呆れられた。

顔を背け、あたしを置いて歩いて行つた。

「あ、待つてやソーマ！」

「相手が小型だからって、ちょっと早すぎやしないかい？」

「その小型に殺されそうになつたお前が言うと妙な説得力があるな」

「君は遠慮という言葉を覚えた方がいいね」

帰投準備を終えたエリックさんは、ソーマとの会話を弾ませながら歩き出した。

横並びに歩いていたが、エリックさんの前では口数の多いソーマを見て目を丸くした。

「……エレナ、ありがとう」
「え？」

唐突に顔を向けられ、感謝される。

「君が居なかつたら僕はきっと死んでいた、感謝してもしきれないよ」「でも……」

だらんとしたエリックさんの右腕を見て、あたしは泣きそうになりながら俯いた。

しかし、エリックさんは首を横に振った。

「これ位どうつてことは無い、命があるだけ儲けものだよ。君はもつと僕を見習つて自信を持つて行動してくれたまえよ！」

「お前はもう少し消極的になれ」

「言うようになつたじやないかソーマ」

ソーマはふん、とそっぽを向いた。

確かにソーマの言う事は尤もかもしれないが、今のあたしにはエリックさんの言葉が有難い。

「ありがとうございます、エリックさん」

「おいおい水臭い、僕達は盟友じゃないか！もつと踏み込んでくれてもいいのだよ？」

嗚呼、この人は確かにクセがあるけど……間違いない、とつても良い人だ。

「よろしくうな、エリック！」

「応とも、お礼は必ずするからね！」

あたし達は軽い足取りで帰路についた。

「は、恥ずかしいから見ないでくれたまえ」「いやいや、居ない物と思つてやー」

エリックを病室に連れて行つたあたしとソーマは、今まさに外れた肩を戻そうとしている看護師さんの後ろに居た。

「はいっ行きますよー……ふんつ」「あつひい!?

そんな情け無い言葉を聞いてあたしは大爆笑、ソーマも思わず笑みを零していた。

「ひ、酷いじやないか君達……」

「だつて、だつて、あはつあはははつ!!」

「君笑い過ぎだよ!?」

がつくりと頑垂れるエリック。

「はい、今日は安静にしていれば明日から任務に出られますよ」「そ、そうかい？ ありがとう」

それだけを言つて看護師さんは出て行つた。
こんな職場だ、やはり忙しいのだろうか……と思つていると、入れ替わりで誰かが入つてきた。

「エリックは無事か!?」「あ、ああ……」

黒いスーツを着た着た壯年の男性が、息を切らせて病室に飛び込んで来た。

誰だろう……と思っていたら遅れて小さな女の子も入ってきた。

「お兄ちゃん！大丈夫！」

「エ、エリナまで……」

あたしよりも更に小さな女の子は、目に涙を浮かばせながら駆け込んで来た。

成る程、この2人はエリックの身内か。

「心配は無用、この通り。ピンピンしているよ！華麗な僕には万が一、なんて言葉も無いのさ！」

「ああ、良かつた……！」

女の子は涙を流しながらエリックに抱きついた。

エリックはポケットからいくらかのお金を出し、エリナにそつと差し出した。

「でも今日は盟友達に助けて貰ったからね、お礼も兼ねて外にある自動販売機でジュースを買っててくれるかい？エリナの分も忘れずにね」

「うん！」

エリナはお金を受け取り、部屋を出て行つた。
途端に、エリックの表情は固くなつた。

「……やはり、本当は危なかつたのか？」

「……正直な所、この2人が居なければ僕はここに居なかつただろうね」

男性は悲痛な面持ちで俯く。

「やはり、お前はゴッディーターになるべきでは無かつたのだ。極東支部は優秀な人材も多い、今からでも掛け合つて辞めてしまうのが……」

「いいや僕は辞めないよ」

びしやりと言ひ放つたエリックの瞳は、確固たる意志が宿つていた。

「言つただろう？僕はエリナを護る為に何もかもを捨てて此処へ、極東支部に2年も掛けて転属したんだ。それを今更辞めるだなんて、僕はそんな移り気な男じやないんだよ」

そう迷い無く言つてのけたエリックの横顔は、とても男らしく格好良かつた。

と、エリナが帰つてきた。

「お、お兄ちゃん、これ、重い！」

「おつとつと……君達、助けてあげてくれ」

言われるまでもなく、あたしとソーマはエリナから缶ジュースを取りつて1つ頂いた。

あたしはリンゴ、ソーマはブドウジュースだ。

あたしはソーマの袖口を引っ張る。

「戻ろう」

「ああ」

お大事にね、とエリックに手を上げて病室を後にしたあたし達は、家族の会話を背に受けながらエレベーターに向かつた。

プルタブがカシツと鳴った音が聞こえて隣を見ると、ソーマは既にジュースを口にしていた。

「ブドウ、好きなん?」

「ああ」

普段無口な彼のグイツとジュースをあおる姿は、中々に意外な光景だった。

「お、今日はエレナが一緒か!」

「あら、次はコータが一緒なんやね」

ソーマと別れ、ロビーに居たあたしに声を掛けてきたのはコータだつた。

新人2人で行く任務、いつも以上に気を付けなければいけないな……等と考えながらヒバリさんの所へ一緒に歩いていく。

「ヒバリさん、俺達の今回の任務は?」

「こんばんはコウタさん、少々お待ちを……コンゴウの討伐がアサインされていますね」

コンゴウ?聞いたことが無い。

コータに目を向けても首を横に振るばかり。

「詳しくはターミナルに載っていますので、出撃前に見ておくといい

ですよ。コンゴウは個体数も多いので、慣れればこの先かなり楽になると思われますね」

「へえー、ポピュラーなアラガミなんだな」

「何やそのめっちゃ嫌なポピュラー」

そんなこんな言いつつ、ターミナルを少しだけ覗いてからあたし達は神機を取りに行つた。

「ねえエレナ、神機の刀身にひずみが出ているんだけど、絶対無茶な使い方してたでしょ」

「ははは、一体どれの事を指して言つてるのか……心当たりが多過ぎる」

「ぶつわよ」

スパナを振り上げながら静かな怒りを見せるリツカに、あたしはひれ伏して叫んだ。

「ごめんなさい！力加減が出来なくて毎回叩き付けたりしました啊！」

「まあ、今回は対策案があるから許してあげるけど……次やつたらその首、ねじ切るからね？」

リツカ様はこちらを見ながらニコニコと笑つてはいたが……その表情は例えることの出来ない恐怖をあたしの心の奥底に刻み込んだ。

「で、対策案というのはコレのことだよ」

「あれ？これはあたしの神機？」

バスターの剣部分が無くなつたが、代わりに鈍器の様な物を取り付けてあるあたしの神機。

コレはなんだろう、確か剣はショート・ロング・バスターの3種類しか無かつた筈だ。

「これはブーストハンマー、最近開発中の神機。パーツのプロトタイプなんだけど、正式に実装するには実戦でのデータを取らないといけないんだ」

「なるほど、これを使って戦うだけであたしは新しい武器、更にデータも取れて一石二鳥つて訳やねー」

「……エレナって本当に14歳？」

「リツカも大概失礼やな」

ハンマー……只力を振り回すだけのあたしに合う武器としてこれまで以上の物は無い。

持つてみると、バスターとは重心が違う為か幾分か重く感じる。

「……なんでバットみたいに軽く持ち上げるか、もう聞かないよ」「……うん、あんがと」

コーダが先に待つてゐる、急いで向かおう。

素晴らしい世界

「うわ、寒いな……」

へりから降りたコーダは、体を震わせながらあたしの前を歩いていた。

鎮魂の廃寺——そう呼ばれるこの地の雪景色は、あたしの心を奪つていた。

「雪……綺麗……」

あたしの知つている雪はベタつき、これまた全身を濡らすには充分な水分を含んでいた。

しかしこの雪は粒が細かく、月明かりと静けさで神秘的な雰囲気が漂う。

「さーさー、任務をパ・パツと終わらせて暖かい部屋へ帰ろうぜ！」

「あたし、そんなに寒くないんやけどな」

「ええ……氷点下だぞ……？」

コーダが薄着過ぎるせいだとは思うが。

かく言うあたしも、長袖一枚にスカートだからあまり変わらないと言えば変わらない。

「俺は遠距離型だからエレナが先行してくれよ、横と後ろは俺が見る

からさ」

「おつけー、んじや行こつかね」

ブーストハンマーを構え、前を見る。

雪の微かな音以外は聞こえない、しんと静まつた廃寺を足音を立てる
ないよう駆けだした。

「居たぞエレナ、アレだ」

「凄い色してるね」

数分後、コータがターゲットを見つけた。
座り込んで何か食事でもしている様だが……

「あいつ、コツチ見てないか？」

「うん、ガン見やな」

少なくとも70mは離れていただろうか。

それでも此方を見て、腕を振り上げ咆哮を上げる姿が見えた。

「この距離で気配を感じ取ったのか!?」

「いやいやあたし達の声が聞こえたんやろ、コンゴウって聴覚凄いら
しいし」

「そうだつたのか……」

「……コータ、ちゃんとターミナルでアラガミの特徴見たの？」

そうこうしている内に、コンゴウは此方に向かつてどんどんと近付
いてくる。

「コータは右! あたしは左から回つて挾撃! 射線上に入らないよう気
を付けるから、どんどん好きに撃つちやつて!」

「応つ！」

コータの返事を合図にあたしは左へ飛んだ。

ブーストハンマーを起動、周囲を震わす音と共にエンジン部分に火が灯る。

「うお……空中でこれは……！」

上手く神機を持つ場所を変えてスライスする様に軌道を修正、ブースターの火を緩める。

「行くでえええ！！」

大声を張り上げブースター全開。

コータの銃撃に目を向けていたコンゴウも、ブースターの爆音に驚き此方を向いた。

その顔目掛けて、渾身のフルスイングを放つ。

「——浅い……！」

ズザザーっと雪に跡を付けながら滑る。

コンゴウは顔の右半分がひしやげ、苦しそうに呻いていた。

「チャンスやコーダー！置み掛けるで！」

「お、おうつ！」

何故か惚けていたコーダは銃撃を再開、あたしも銃形態に切り替えモルターバルトを射出する。

お互い射線を気を付けながらの銃撃は、確実にコンゴウの体力を削り取る。

「……あれ？」

突然、あたしの神機から弾が出なくなる。
これは……弾切れか。

「う、うわあ！」

突如弱まつた銃撃を好機と見たのか、コンゴウはコーダに高速で回転しながら襲い掛かる。

突然の攻勢に怯んだコーダは、雪に足を取られ尻もちをついて転んだ。

「コーダー！」

切り替えが終了した神機にブーストを噴かせて有り得ない軌道を描きコーダの前に着地、即座にタワーシールドを展開。

間髪を入れずに回転しながらコンゴウが到達、装甲が軋み火花が散る。

「ゞ、ごめん！」

コーダは跳ねるように立ち上がりつてコンゴウに銃撃を再開、コンゴウの回転の勢いが弱まる。

「よしつ……！」

装甲に力を込め、押し返す。

コーダの銃撃により弱まつていくコンゴウの回転では、もうあたしを押す程の力はない。

「でやあっ!!」

足に力を込めてコンゴウを弾き飛ばす。

あたしは真上へ飛び、コンゴウは後ろに吹き飛ぶ。

「決めろ、エレナ！」

「オッケー！」

腕や足にアサルトの銃撃を受け、上手く受け身を取れないコンゴウを眼下に捉える。

神機から響き渡る爆音が、自身の落下と共に一筋の炎を生み出す。

「「イエーイツ!!」

パンとハイタツチの音が響く。

雪はおろか、地面にまでめり込んだコンゴウはピクリともせず絶命していた。

「つてか、アラガミの突進を食い止めた上に押し返すとか、どんな怪力

してんだ

「んー、コーダの頭を握り潰せる位？」

「……笑えない」

縮み上がったコーダを尻目に無線を取り出すと、帰投のヘリを呼ぶ為に通信を入れる。

「もしもーしひバリさん？」

『はい、帰投ですね……少々ヘリが遠方なので、30分ほどお待ち下さい』

「いーよいーよ、こっちはゆっくりしてるからさ……って事でコーダ、30分掛かるってさ」

「マジかよ！こんなクソ寒い中30分も待たされるのかよ！」

「それは厚着してこなかつたのが悪いやろ」

ギヤーギヤー騒ぎ立てるコーダに冷ややかな視線を送り、無線を仕舞つて缶詰を2個取り出す。

「雪もやんだし、焚き火でもしてコレ暖めて食いながら待とうや」

「お、準備がいいな」

「但し、高くつくでー？」

イタズラな笑みを浮かべながらあたしはコーダと枝を拾い集める。

「雪なのに濡れてないもんだな」

「パウダースノーやからね、この辺の雪は水分があんまり含まれてないんよ」

「へえー、物知りだな」

20本程集まつただろうか、缶詰を少しだけ開けて枝の傍に置き着火。

よく使用したライターだが、そろそろガスが切れてしまうかもれない。

「何から今まで準備が良いんだな」

「まあねー……あたし孤児だったから、こうして暖を取る事が多かつたんだ」

孤児になつたのは10歳からなんだけどね、と苦笑いすると、コータは真剣な表情を見せた。

「辛かつたんだな」

「いーや、そうでも無いよ。あたしの周りにはもつと小さな孤児も居たし、そんな子達と集まって何とか生活は出来てた」

燃える火を見つめ、あたしは続ける。

「あたしの父さんと母さんはアラガミに殺された……恨みはあるけど、悲惨な生活を送つてる周りの子達を見ると仇討ちをしようつて気にはならんかつたんや」

ほんのりと温まつた缶詰を拾い上げる。

野菜スープの缶詰、冷えた体には丁度良い筈だ。

「だからあたしはゴッディーターになつたんや、寂しい思いをする人達が居なくなるように、ね」

「それが願いなんだな」

缶詰の蓋を開け、コーラに差し出す。

「うん、だつてあたしは親切やからね」
〔コレテーゼ〕

「今日はありがとうな、俺もエレナの夢が叶うように一緒に頑張るよ」「うん、ありがとうコーダ」

日付を跨ぐか、という時間帯にあたしとコーダは自室の前で別れた。

部屋に戻り、ソファに座つて一息ついた。

と――

「エレナ、入つてもいいか?」

「ん? はいはいー?」

誰かが扉の外から呼ぶ声がする。

返事をすると、入ってきたのはリンドウさんだ。

「よう、今日は大活躍だつたらしいじゃないか」

「あはは……あんまり実感は無いんやけどね」

そう言つて頬を搔くと、リンドウさんは隣に座つて語り掛けた。

「戦績つてのはそんなもんだ。失つた時は立ち直れない程落ち込む癖に、失わずに済んだ時は気にも掛けないからな」

「そう……かもね」

そう言いながら微笑むリンドウさんの胸ポケットに、煙草が入つて
いるのが見えた。

「煙草、吸いたい？」

「いや、流石にお前の前では吸わないさ」

「いいんやよ、イタリアは愛煙家が多いから寧ろ落ち着くんやで」

そう言つて笑つてみせると、リンドウさんは苦笑いしながら煙草に火をつける。

一度だけ煙を吹かして、あたしを見た。

「俺はエリックを助けてくれたお礼が言いたかったのさ。あいつは第1部隊のムードメーカーでな、もしも居なくなつたらと思うと、な」「ああ、そういう事やつたんやね」

素直に感謝を受け取る。

寂しい思いをさせなくて済んだ、と思うと嬉しくてたまらない

「でもリンドウさん、感謝するのは早いよ？」

「ん? 何故だ?」

ソファから立ち上がり、リンドウさんに向き直る。

「あたしはまだまだ、この世界の皆を助けるつもりでいるからね」

ふふっと笑いながら言うと、リンドウさんも笑みを浮かべながら煙を吐き出した。

宙を飛び交う重戦車

目を開けてベッドから飛び起きううーんと1つ、大きな背伸び。鏡を見ると、やっぱりあたしの髪は跳ねまくつてまるでハリネズミみたいだ。

シャワーを浴びても直らないくせつ毛を見つつ、バッグに入れてある箱から髪留めを取り出す。

無くしたら大変だと仕舞つておいた、父からの最初で最後のプレゼント……ルビーの髪留めで前髪を上げ、軽くストレッチ。

「さあ、今日も頑張るかな」

まだ任務が無いことを確認したあたしは射撃訓練場に来ていた。昨日の弾切れを反省し、撃てる弾数の把握等を行う為である。

「モルター弾、3発しか撃てないんや……」

確認して驚く、あまりにも装弾数が少ない。

これなら威力を上げて1発のみ撃てる弾の方が使い易いのに、等々考えた所で後ろから声が掛かる。

「いい心掛けじゃないか」

「あ、エリック」

髪を掻き上げてエリックが訓練場にやつてきた。

「いや何、ブラスト使いの先輩として華麗な僕の力が必要かと思つてねえ」

「あつはい」

昨日の今日だが、絶好調な彼の仕草を眺めながら問題点を話してみた。

兎に角装弾数の少なさがネックだ、旧型のブラスト使いともなれば、戦場で何も出来ない事が多いのではないか。

「ふむ、それは確かに僕達の1番の問題点とも言えるね……だが安心したまえ！恐らく君はブラストの機能を知らないだけだ！」

そう言うと、あたしの神機を指差した。

「ここのレバーを引きたまえ、オラクルリザーブという機能が使えるよ」

「オラクル……リザーブ？」

「そう、予備タンクに今のオラクルが入り、また溜められるという訳だよ」

成る程、分かり易い説明だと思いながらレバーを引くと、液体の入った瓶を差し出される。

「そしてこれがOアンプル、コレを飲めばオラクルがチャージされすぐには弾が撃てる。ちょっと高めの消耗品だが……ま、僕には些細な問題さ」

「なるほど、便利やねー……つてコレ、穴が開いてないけどどうやって飲むの？」

「アンプルはこの窪んだ部分を折つて飲むのさ、なんでも外気に曝し

てはいけないらしくてね」

勉強になる、アンプルといえば大抵医療目的で使用する物だから知らなかつた。

また後でようす屋に行こう。

「後は1番大事な部分、バレットエディットだ。自分のやりたい事に合わせて調整する事で、用途に応じた弾が撃てるようになるんだよ」「何1つ知らなくて大ショック」

弾を調整だつて？

銃はそんな事まで可能なのか……と驚愕しつつも、すぐに弄ることを決意する。

「後は実戦で磨くと良い、そうすれば君は華麗な僕のように活躍できる筈や！」

「正直期待してなかつたけど、めっちゃ為になつたわ……あんがとさ

ん」「要らない言葉が聞こえた気がするが気にはしない、僕は華麗だからね！」

高笑いを残して、エリックは去つて行つた。

腕前や言動は兎も角、あのメンタルの強さはあたしも見習わなくては……

「じゃ、早速バレットエディットつてのを試してみよつかなー」

妙にハマリ込んでしまつたあたしが射撃訓練場を出たのはそれから1時間後だつた。

成果は得られ、後は実戦あるのみと言つた所だが

「うーん、今の所エレナさんに紹介出来る任務はありませんね」

とヒバリさんに告げられる。

新兵だし仕方ない、他の人の任務に相乗りでもするかな……等と考えていると男の人が歩いてきた。

「おつと新型じゃないか、どうした？」

「へつ？」

「誰だろう、初対面の筈だけど……」

「この方は第2部隊、防衛班隊長の大森タツミさんです……丁度良かつた、顔合わせも兼ねて一緒に出撃されてはどうでしょうか？」

「ええの？ あたしまだ新兵やよ？」

「ハツハツハツ、どこも人手不足だから俺達は大歓迎さ。お前の腕前も見ておきたいしな」

極東支部は本当に気さくな人ばかりだ、馴染みやすくて嬉しいが親切過ぎて申し訳なくなる。

頭を下げ、同行を願い出た。

「おいおい畏まんなつて、頼むのはむしろ俺達なんだから気軽に行こうぜ」

「ソレ皆に言われてる氣がする」「アナグラで敬語を使う奴は滅多に居ないからな、精々支部長やツバキさんに対して使うくらいじやないか？」

それは現場第一主義特有の連帯感から来る物だろうか……それなら言葉遣いも気にしないのだろう。

「じゃあ、今日は宜しくね?」

「おう、任された! じゃあヒバリちゃん、今日の俺達の任務とその後一緒に食事する予定を……」

「今日は居住区周辺でグボロ・グボロと小型のアラガミを討伐して頂きます、後業務がありますので一緒の食事は難しいかと……」

ああ、タツミさん一目で分かるくらいに肩を落としてやる気無きてる。

「という事で今回の任務に一緒に締させて頂きます、よろしゅうなー」

「ああ、宜しく」

「宜しくお願ひします!」

第2部隊の他の2人と顔を合わせたあたしは居住区を抜け、徒歩で目的地へ移動しながら自己紹介をしていた。

ブレンダンさんという硬派そうな人と、カノンさんという明るい女性は優しく接してくれた。

「で、タツミは相変わらずか」

「あれ、いつもなん?」

「タ、タツミさん! ファイトですよ!」

「下手な同情はよしてくれ……」

遅れてついてくるタツミさんの肩に手を置く。

「いつか彼女も振り向いてくれるよ」

「……すまん、ありがとう」

「で、こんな感じに10歳近く年下のあたしに慰められる気分はどう？」

「死にたい」

「あまり苛めないでやつてくれ、こんなのでも俺達の隊長なんだ」

「こんなのつてお前……」

そんな限りなく苛めに近い様な会話を繰り返していると、卵の様な物が浮いているのが見えた。

瞬間、ブレンダンさんが身構える。

「タツミ、ザイゴートだ」

「居たか、よーしカノンはザイゴートを頼む」

「お任せ下さい！」

そう言うや否や、カノンさんはザイゴートに向かつて突っ走つて行つた。

ターミナルで見たことがある、ザイゴートは弱いが他のアラガミを呼び寄せる性質があるとか。

「あたし達は寄つてきたアラガミに対処?」

「ご明察、新人と聞いていたが戦術という物を分かつてるじゃないか……ブレンダンは向こうを頼む、エレナは遊撃だ」

「分かった」

「りょーかい」

その言葉を合図に、カノンさんを挟るようにタツミさんとブレンダ

ンさんが動き出す。

あたしはカノンさんについて行き、2人の方を交互に見ながら銃形態の神機のレバーを引く。

タツミさんの方にはオウガテイルが数体、慣れた手つきで捌いており、ブレンダンさんの方には何も来ていない様だ。

よし、とオラクルリザーブを完了させてタツミさんの方へ向かつた。

「援護するよー！」

「おう……ってストップ!!!」

あたしは既にトリガーを引いていた為タツミさんの制止が間に合わず、弾丸は射出された。

オウガテイルが爆音と共に活動を停止した。

「お前もブラスト使うのか！」

「大丈夫、巻き込まない様に注意するー！」

「お、おう……」

従来のモルター弾と違い、重力の影響を受けない遠方まで届く爆発弾、ブラストの射程の短さを補う為に作つたのだ。

何故か青い顔色のタツミさんに疑問を感じつつ、神機を剣形態に切り替えブーストを吹かす。

「つてやあああ!!」

距離を詰めてハンマーを叩き付けると、メシャツと嫌な音を立ててオウガテイルの頭が砕け散る。

ソレを見届ける前に更に近くのオウガテイルに横殴りを仕掛けると、綺麗な放物線を描いた。

「お前、何か……凄いな」
「語彙力無さ過ぎやん？」

頭の無くなつたオウガテイルを踏みつけて残りを睨むと、心なしか怯えているように見えた。

アラガミも怖がつたりするものなのかな……なんて事を考えていると、突然通信が入つた。

『グボロ・グボロが来た、援護頼む』

『アハハッ！纏めて吹き飛ばしてあげるわ！』

討伐対象がブレンダンさんの方に現れた様だ。

目を向けてみると、増えたザイゴートを吹つ飛ばしているカノンさんの向こう側に不格好なアラガミが居るのが見えた。

それにもしても、ブレンダンさんの通信の後に割り込んできた人は誰なんだろう。

もしかして増援の人かな？等と思いながら神機に火を入れる。

「タツミさん、先に行つたつて」

「おう、ここは頼むわ」

その声を聞き取り、オウガテイルを1体潰した。

残りの1体はフルスイングで体が千切れ飛び、赤黒い液体を飛ばして頭部だけがその場に残る。

「さて……」

おおよそ目的地まで90mといった所か、カノンさんはもう終わりそうだ。

脚に力を込めて踏ん張る。

「3……2……1……！」

空気を振るわせて跳ぶと、タツミさんがこつちを向いて啞然としているのが見えた。

そんなにあたしはおかしいのだろうか……と考えている間にも飛距離はぐんぐんと伸びていき、高度が最高点に達した。

その瞬間――

「あだーっ!?」

ドカンという音と共に体が真上に舞い上がった。

混乱していると、視界に活動を停止したザイゴートが一緒に飛んでいるのが見え、下から――

「射線に出て来るのが悪いのよ、マヌケ！」

そんなカノンさんの罵声が聞こえた。

カノンさんの射線入つてしまつたか……というかカノンさん、性格変わつてない？

何となく、タツミさんがブラストを恐れる訳が分かつたような気がする。

「エレナッ！」

タツミさんの声で我に返る。

そうだ、カノンさんの性格なんて考えている場合では無かつた。

「ぬおおおつ！」

ブーストを再度解放して姿勢制御、前を見据える。

グボロ・グボロがブレンダンさんと対峙して膠着状態にあるのが見

えた。

即刻決断を下し、ブーストを全開！

「いくでええええええええ！」

かなりの高度となつたが問題ない、多少のズレならブーストで力バー出来る。

目標は斜め下、グボロ・グボロのド真ん中に向けて全力の振り下ろし！

鈍い音を響かせた後、あたしはぐにやりと背ビレがひん曲がり、喚き立てるグボロ・グボロの背に立つていた。

一撃では倒せなかつたが、ここはあのバレットを試すチャンスか……と銃形態に切り換えて叫んだ。

「ブレンダンさん、離れて！」

呆けた表情をしていたブレンダンさんが飛び退いたのを確認し、銃口を背に当てる。

深呼吸を一つ、トリガーに指を掛ける。

「……終わり……！」

あたしはまたもや宙を舞つていた。

視界に入つたグボロ・グボロは四散しており、離れたところから呆然としている3人が見える。

「……ああ……」

力を抜き、流れに身を任せる。

爆発弾や放射弾を詰められるだけ詰めて全て零距離から発生させるバレットは、グボロ・グボロはおろか反動と爆風で体重が3桁あるあたしの身体でさえ吹っ飛ばした。

全身の痛みを感じながら、あたしの〈着弾〉地点となるであろう湖を見て、心に誓つた。

「このバレット、もう使わん」

尾ヒレどころか手足まで

突然ではあるが、あたしは女の子だ。

いくら強がつた所でそれ以上でもそれ以下でもなく、一喜一憂すれば恥じらいだつて大いにある。

「見ていいから！な！落ち込むなつて！」

「そ、そうだ。俺達は爆風位しか見ていない」

やめて、あたしをそんな目で見ないで。

「その……ごめんなさい！」

カノンさんから思い切り頭を下げられたあたしは顔も向けず、大きな布を身に纏いトボトボと歩いていた。

先の爆発で元々あまり丈夫とは言え無かつたあたしの服は大きく裂け、下着まで御臨終。

「もう大丈夫……でもタツミさん、ブレンダンさん」

近くに落ちていた空のスチール缶を拾い上げ、疑問符を付けたような表情を見せる2人の方を向いた。

「他言はしないように」

メキイ、と音を立てたスチール缶は掌に消え、開くとゴルフボール大になつた鉄くずが出来上がつた。

背を向けて歩き出すと、後ろから話し声が聞こえる。

「恐ろしく、強い子だな……」

「ああ、物理的な意味でな」

「お2人共、結構冷静ですね」

兎も角、極東支部へ水を滴らせながら帰還したあたしはすれ違う人達をフリーズさせつつ、自室へ飛び込みターミナルの前に来た。素肌はあまり見えていない筈だが、下着もまともに着けていない状態では落ち着かない。

「服と下着を発注して……嘘、服届くのにこんなに掛かつちゃうの？」

ターミナルに映し出されたのは3日後の文字。

これはいけない、頼れるのは彼女だけかと思い立ち、すぐに連絡を取つた。

『はい、どうなされましたか？』

すぐに応じてくれたのはヒバリさん。

現状という名の惨状を全て話し、どうすれば良いのかすぐに聞いてみた。

『成る程、そういう理由でしたらフェンリル制服なら直ぐにご用意出来ますよ』

「本当？」

『はい、但し少々のお金は頂きます』

願つてもいない話だつた。

すぐさまアーカイブから3着発注を掛ける。

「ありがとー助かつたよ！」

『準備が出来次第直ぐにお持ちしますのでお待ちくださいね』

見えないヒバリ神に感謝しつつ、身に着けていた布を脱いでシャワー室に飛び込んだ。

すぐに悲劇が襲い掛かる事も知らずに――

「あつエレナさん！お急がせてしまい申し訳ありません！」

「い、いやイインダヨ」

赤いエンリル制式服を纏ったエレナの動きは妙にぎこちなかつた。

シャワーを浴び終わり届けられた制服を着ようと思つた所でヒバリから任務同行、出来るだけ急いでという知らせが届き快諾。

しかし、無線連絡が終了した後である重大な事実に気付いたのである。

（下着の発注忘れてた……）

人類史上初（？）ノーブラ十ノーパンでアラガミを捕食しに行く新人ゴッディーターの誕生である。

制服がホットパンツだったので強行出来たが、もしもスカートなら

悶絶死待つた無し。

「あちらの3名が今回の同行者です」

「ふむ」

奇抜、と思つた。

余りにも短絡的であるが、眼前の3人を見て浮かんだイメージはコレがピツタリだつた。

「チャラ s」

「言わせませんよ」

につこりとエレナに微笑むヒバリさん、その背後に映るは鬼か蛇か。

まあこればかりはあたしが悪い、うん。

「お待たせしました」

「……………」

「……………」

何故か男性2人に睨まれる。

思わず後ずさりしそうになるが、グッと堪える。

「あの……」

「いらっしゃい、この2人は気にしてないで……大体タツミのせいだけど元からこんな感じだから」

眼帯を付けた女性はにこやかに手を伸ばす。

「ジーナよ、こっちがカレルでそっちがシユン」

「あ、ご丁寧にどうも……エレナです」

ヘコヘコと頭を下げながらジーナさんと握手を交わす、恐そうに見えたけど良い人だ……

「おい新型、空を飛べると聞いたが本当か？」

「俺はグボロ・グボロを一撃で仕留めたって聞いたぞ、マジか？ マジなのか？」

突然口を開いたかと思えば質問攻め。

成る程、タツミさんのせいつてさつきの任務での話を聞いたからなのか。

つてかカレルさん目つき悪っ！

「えっと……空を飛んだ訳じやありません、ジャンプしただけです。あと、グボロ・グボロは一撃じやなくて二撃です……粉々になつちやいましたけど」

「…………？」

綺麗に2人並んで首を傾げる。

口で説明するというのは案外難しい、こつちまで首を傾げてううんと唸つてしまつた。

「まあいいじゃない、どうせ戦闘になれば嫌でも分かるのでしょうか？」「ええ……まあそうですね」

ジーナさんからの助け船、ナイスです。

2人も欣然としないながらも了承した様だ。

「さあ行きましょう……早く撃ちたいわ」

あたしはギョッとしてジーナさんを見た。

鋭い目つきに少し口元を歪ませた笑み、さつきまで良い人だと思つていただけに悪魔の形相に見えてしまつた。

そうしてあたし達を置いてロビーを出て行つた。

「……あの……」

「……アイツはああいう奴だ、慣れろ」

正直、慣れるまで半年は掛かりそうです。

「ねえねえエレナ、素材は回収してる？」

「素材？」

リツカの所へ神機を取りに来たあたしはまたもや首を傾げる事になつた。

「形が残つてるアラガミならある程度は」

「形が残つてるつて……いやいやそうじやなくて任務の場所に落ちてる鉄とかオイルとかだよ」

はて、と首を傾げるとリツカはスパンをクルクルと器用に回転させながら口を開ける。

「神機の強化にはアラガミの素材だけじゃなくて、鋼材とかも必要になつてね」

「ほうほう」

「まあその……任務のついでに拾つてきてよ、素材が溜まつたらこの神機も強化してあげるからさ」

「おつけー」

拾える物は拾つておけと、それだけで神機が強くなるなら有難いことこの上ない。

リツカから神機を受け取り、その場を後にした。

「今日は何を狩るんです?」

「シユウだ」

ヘリから降り、トコトコと歩きながらそんな話をしていた。

シユウ、確かに翼型で遠隔攻撃も出来るアラガミだったとターミナルで見た情報を思い返す。

「さあ、着いたわよ」

海の近い、割と落ちたら洒落にならなそうな場所——愚者の空母である。

「んじや接敵は早いはずだから作戦決めるぞー、新型が囮で俺は闇討ちな」

「阿呆、新人に囮やらせるバカが何処にいる」「んなつ」

突如男2人のいがみ合いが始まる。

いや、あたしは凹でも構わないんだけど――

「前！避けて！」

突如叫ぶジーナさん。

目前には火球が飛んできていた。

「うおつ!?」

「チイツ」

飛びのくシユンとカレルさん。

当のあたしは神機に火を入れて構えた。

「何を――」

ポンッ！と大きな音と立てて火球が爆ぜる。

飛来した火球はブーストハンマーの一振りで搔き消えてしまつた。

「成る程、こんな攻撃するんやねえ」

ガキン、とアスファルトに神機を叩き付けて正面を見据える。

なんか後ろからの視線が妙にイタイが、今は目の前のアラガミに集中。

「練り直す時間は無いからシユンの作戦通りで行くで、分かつた？」

「分かつたわ」

「……あいよ」

「――」

振り返らなかつたけど、シユンの今の顔を少し見てみたくもあつた
……残念無念。

そうして前から走つてきたアラガミ、シユウは一定の距離で止まり
挑発するかのようにあたしを手招きしている。

「へえ……結構知能とか高そうやね」

「飛び上がつたら滑空して突撃してくるから、気を付けてね」

「おつけー、さあ行くで！」

掛け声と共に前へダツシユ、突然の攻勢に慌てたシユウが掌に再度
火球を作り出した。

狙いは勿論あたし。

「てやあ！」

火球をよく引き付けてから軽く飛んで回避。
シユウはあたしを見上げて下がろうとした――

「フン」

が、足にカレルさんの銃撃を受けて動けない。
すかさず翼であたしを叩き落とそうとする――

「そこね」

が、これもジーナさんの狙い撃ちで弾かれた。
狙うは無防備になつたシユウの頭！

「どつせい!!」

メキイ、と嫌な音を立てて潰れるシユウの頭。

そのままあたしはシユウを蹴つて飛び退いた。

「ナイスアシスト」

「畳み掛けろ、チャンスだ」

「ええ、やるなら今ね」

「——」

あの、シユン？ 生きてる？

シユウは少しの間頭を押さえ、こっちに中身が出てる頭を向ける

……イタそう。

しかしブーストしていない一撃では少々威力不足だつたようだ、あたしはハンマーに点火した。
と——

「飛ぶぞ！」

カレルさんの声、シユウは飛び上がって翼を広げていた。

アレが突進攻撃か。

「防げ！」

その声に反応して咄嗟に装甲を展開、腰を落として身構える。間髪入れずに入る衝撃。

「……は？」

そんな気の抜けたカレルさんの声を聞きながらあたしは踏ん張る、ズザザザザーっと後ずさりながらシユウと装甲を隔てた力比べだ。

「いや防げとは言つたがな!?」

「受け流す気は全く無さそうね」

目の前の光景に思わず観客に変わった後衛+最初から観客のシユン。

既にシユウは失速し、信じられないという様な顔（？）をして地面にうつ伏せになつて落ちた。

「あたしの……」

起き上がろうとしたシユウ、しかし既にそこにあたしは居ない。高度おおよそ50m、十分だ。

「勝ちやアアアアアア!!!」

ブーストを吹かした高速の急降下、シユウが気付いた時にはもう遅い。

背中に叩きつけられたハンマーは地面にまで衝撃が伝わり、アスファルトは広範囲に渡つてヒビが入つていく。

「あっ、ヤバ」

異常に気付き、ほぼ死にながらも痙攣しているシユウを神機に咥えさせ、直ぐに飛び退いた。

「よく分かつた、タツミが言つてた事に何一つ間違ひは無かつた」「まあ、アレは空を飛んだつて錯覚するわよね」

シユウをずるずると引き摺りながら戻つてくるあたしを見ながらジーナさんとカレルさんがなんか言つてたが気にしない。

後は愚者の空母なんだけど、広場の一部は先程の衝撃で崩落して穴が開いてしました。

あたし悪くないモン、元々ガタガタだつたアスファルトが脆いんだモン。

「捕食するー?」

「いい、お前にやる」

「ええ、私達あまり何もしなかつたしね」

「ホント!? ありがと!」

嬉々として神機にシユウを丸呑みさせようとするが、中々入つていかない。

流石に大きすぎたかな?

「コイツはきっといい稼ぎ頭になるだろう、今恩を売つておいて損はしない」

「あら、あつきり譲つたのはそういう事なのね」

「……お、ま、え、ら、なああ!!」

さつきまで開いた口が塞がらなかつたシユンが、けたたましい声で叫んだ。

「明らかにおかしいだろ!! シユウの火球は消し飛ばすわ一撃で頭を結合崩壊させるわ、突進は受け止めて力勝ちするわ唐突に滅茶苦茶な高さまで飛び上がるわ、しかも地形まで変えやがつた!!」

「ちやんと見てたんやね」

「てめえホントに人間かよ!?」

「騒ぐな、鬱陶しい」

「お前らもなんでそんなに冷静なんだよ!!」

ギャアギャアと騒ぎ立てるシュン。

それを尻目に無線を取り出すカレルさん。

「帰るぞ」

「へり到着まで素材回収してもええかな?」

「あまり離れないようにな」

「無視すんなああ!!」

そんなこんなで帰路につくあたし達。

第三部隊は中々に個性的でしたよ、本当に。

「下着を着けてないのは趣味かしら?」

ジーナさんにはバレてしましました。

「

アレから数日後、色々と避けられてる気がする。

任務はそつなくこなし、財布の中もかなり潤ってきたのは良いこと
なのだが……

「おつちやーん、〇アンプル5個ちょうどいい」

「はいよ、全部で1,000F cedar……これからも懇意にしてくれる事を願つてケースも付けておくよ」

「おつとありがと、太つ腹やねえ」

「はつはつはつ、褒めても何も出ないぞー。ああ後これデトックス錠とアンチリーグ剤、あとこの体力増強剤も試供品として……」

「いやめつちや出て来どるがな」

ようず屋のおつちやんから消耗品を購入し、エントランスを出てラボラトリに向かう。

サカキ博士のメディカルチェックの時間だ。

「うわっ！す、すいません……」「…………」

エレベーターから出た所で職員の人が飛び退いて道を開けた。明らかに恐れられている……

「やあ、気分はどうだい？」

「体の方はすこぶる好調なんやけどな……皆あたしを避けてて少しざるーな気分や」

あたしの体について何が起こっているのか知っている博士だけが一番の支えだ。

「ううむ……こればかりは難しいか……」「やよなあ……」

「僕で良ければ話し相手にはなれるからね、それで今は我慢してくれるかい？」

「うん……ありがと博士……」

少しほは気分が晴れたか、という所で突如ラボラトリのドアが開く。

「入るぞ」

「おや、早かつたね」

「特に何も起こらず、いつも通りだ」

ドサリと荷物が置かれる。

入ってきたのはソーマだつた。

「あ、ソーマ……」

「……ん？」

少し気落ちしたままの顔をソーマに向ける。

「どうした、おっさんに変な事をされたのか？」

「いいやしてないしてない、何もしていないよ」

「いやいや、ちょっとね……」

尚も気分は晴れないが、心配して貰えるのは嬉しい物だった。

「エレナ君は少しばかり特殊だらう？」

「少し? アレがか?」

「まあ……その件で人と距離を置かれてしまって悩んでしまつている
んだ」

ソーマはフツと鼻を鳴らし。

「下らん」

そう吐き捨てた。

また気分を落としてしまい、頭を下に向ける。

「勘違いするな、お前を詰つた訳じゃ無い」

そう言つてソーマはあたしの頭に手を置いた。

「言いたい奴には言わせておけ、どうせ言つてる内にどうでも良くなつてくる。お前のやりたい事をやつて好きに振る舞え、それが普通なんだと思わせてやつたらいいんだ」

あたしは顔を上げてキヨトンとした。
博士も口を開けて驚いていた。

「……なんだ？」

「いやあ、君もそんなことを言うようになつたんだねえ、どこで習つた
んだい？」

「五月蠅い、只の経験談だ」

ソーマはそっぽを向いてしまつた。
あたしはクスクスと笑つて

「ありがと、ソーマ」

そう言つて頭を下げた。

「戦場で足手纏いになつたら困るだけだ、深い意味は無いから気にす
るな」

「そう?……でも、ありがと」

「フン」

そうしてソーマは博士からファイルと鉛筆を受け取り、ソファに

座つた。

「さあ、少し予定がズレたがメデイカルチェックを始めようか、そこのベッドに横になりたまえ」

「はーい」

「目覚めた時には自分の自室だ、最近頑張っていた様だから今日はゆっくりと休むと良い」

あたしは目を閉じた。

程なくして、ゆつたりと眠気が襲い掛かってくる。

カタカタと博士がモニターを操作する音を聞きながら眠りに落ちていった。

「そうだソーマ君、コレを渡しておこう——」

『親切』の在り方は
言われ無き悪名

「ん~……」

むくりとベッドから起き上がるあたくしエレナ、確か14歳でゴッドイーターやつてます。

さあさあ本日もお仕事お仕事、疲れも中々感じないこの体はとつても便利です。

「ん……?」

時計を見遺ると時刻はお昼……

「……アアアアアアア
!!??」

完全に寝過ごした！早く着替えてエントランスに行かないと！

「よお、まあ座れよ」

「ああああああリンドウさん！この度は大寝坊してしまい誠に申し訳なきゆ、なく存じ上げまして候ウウウウ！」

「ちよ、落ち着け落ち着け……別にお前は寝坊なんてしていなから

さ

「……へ？」

リンドウさんの一言で一気に冷静になるあたし。

とりあえず、エントランスのソファに腰掛けて深呼吸を繰り返した。

「ほら、まあ飲めよ」

「え？ いやあたしあ酒は……」

「ジューsだよ、只のリンゴジューsだ」

「あっ、頂きます」

渡されたコップを受け取る、流石にもう力加減を誤つて割つたりはしない。

リンドウさんは自分のグラスにウイスキーを注ぎ、ポケットから端末を取り出した。

「サカキのおっさんから聞いてるからさ、少し投薬したから起きるのは昼頃になるつてな」

「あ、そ^うだつたんですね」

よかつた、寿命が縮まる思いで急いで準備したのがちょっと恥ずかしいけど本当に良かつた。

「他の皆は任務ですか？」

「ああ、俺も少し前に帰ってきたばかりがあいつらももう来るだろう」

あれ、ということはリンドウさんは一人で任務に行っていたのかな？等と考えつつリンゴジューsを口にしたりしながらリンドウさんと談笑した。

「あれ、起きたんだエレナ」

「あ、お帰りー」

数分後、第1部隊の4人が帰投した。

4人の様子からすると随分余裕だつたのだろう。

「おうお帰り、どうだつた?」

「フツ、華麗な僕の活躍など言うまでも無いね」

「ああ、俺達4人の素晴らしい連携プレーを2人にも見せてあげたかつたよ!」

「お前ら、そんなに役立つてたか?」

男3人は喜悲交々、サクヤさんも笑いながらリンドウさんに言った。

「第1部隊4名、無事生還したわ」

「そうか、この調子なら俺もデートの回数を増やしても良いかもされないな」

瞬間、サクヤさんとソーマ、エリック達の顔つきが変わった。デート……? アレかな、リンドウさんには許嫁が居てサクヤさんはリンドウさんが好きだからこんな険しい表情を……

いやそれだとソーマとエリックが表情を変えるのはおかしい、つまり……

……つまり、ソーマとエリックもリンドウさんが好きで……嘘……

そんな事つて……

顔が熱くなる、つまりソーマとエリックつてそういう――

「何て顔してやがる」

「あ——い、いや、何でも無いですはい」

いかんいかん、いくら何でもそれは無い無い。

でもそれならあの2人の表情は……と考えているとエントランスに放送が鳴り響いた。

『業務連絡、本日第7部隊がウロヴォロスのコアの剥離に成功、技術部員は第5開発室に集合して下さい。繰り返す、ウロヴォロスのコア剥離に成功、技術部員は第5開発室に集合して下さい』

そんな放送が鳴り響いた、そして同時に慌ただしくなつてくるエントランス。

「ウロヴォロス!? 何処のチームが仕留めたんだ!?

「しかもコア剥離に成功かよ……ボーナス凄えんだろうな……」

「おい、奢つて貰おうぜ」

「やめときなさいよ、みつともない」

そんな声も聞こえてくる、コーダはキヨロキヨロしながら

「ウロヴォロス? 強いの?」

と言つた。

ターミナルにも情報があつた、確か――

「めっちゃ大きなアラガミやよ、複眼で触手を振り回したり大口径のビームを撃つたりする……〈平原の霸者〉って呼ばれてる――」

「まさか、交戦経験があるの!」

サクヤさんの声と同時に第1部隊全員があたしの方を向いて驚きの表情を浮かべる。

あたしは両手をぶんぶんと振りながら

「いやいやいや、ターミナルの情報ですよ!」

と答えた。

流石にあたしみたいな新人に割り振られる様な討伐対象では無いだろう……

(いや、いくら新人でも……)
(エレナならやりかねんな……)

サクヤさんとリンドウさんがなんだか疑いの目でこつちを見てくる。

気にしない気にしない、ソーマに言われたことを思い出して気持ちを落ち着かせる。

「感心だね、しつかりと勉強しているようだ」

「ああ、俺達も鼻が高いよ!」

「テメエらも少しば見習え」

そんなやり取りを見届けてリンドウさんは立ち上がった。

「さ、俺は次のデートに備えて精の付く物でも食つてくるかなあ」

そしてエントランスを出て行くリンドウさん。

それを見届けるサクヤさん、ソーマ、エリック達の表情は硬い……しかしコレで何となく察した、リンドウさんが他の第1部隊を別の任務に行かせて1人だけ別行動だつたのは……

「前、良いですか？」

「おう、また会つたな」

食堂で分厚い肉に醤り付クリンドウさん。あたしはその向かい側に着席する、ちなみにあたしの昼食はスペムと野菜のサンドイッチだ。

「突然ですが質問です」

「ん?なんだ?」

サンドイッチは未だ手を付けず、他の人には聞こえない声に絞つてリンドウさんに問う。

「ウロヴォロスは一人で討伐を?」「……んーまあ、そうだな」

成る程、やはりか。

「何故皆には隠すんです?」

「んー……いやまあ隠す必要は無いんだが、あまりチヤホヤされるのは性に合わないつづーか……まあその、小つ恥ずかしいんだ、分かつてくれ」

ああ成る程、別に後ろめたい事がある訳では無いのか……それならいいんだ。

「それなら大丈夫です、迷惑をお掛けしました」

「コウタの奴は誤魔化せたようだが……エレナみたいな幼いのに見抜かれるようじやあ、俺もまだまだだな」

「いやまあ、コータですし……」

あたしは苦笑いしてサンディッシュを一口、spamのほんのりとした塩気が効いて中々美味しい。

と、今度はリンドウさんが口を開く。

「そうだ、お前だけには言つておこう」「はい？」

あたしにだけ？何だろう？

「まだリーダークラスまでしか知らない情報だが、新型がまた1人東支部に配属される事になつたらしい……が、少しばかりメンタル面に少々難あり、ということらしい」

「ほうほう」

「同じ新型のよしみだ、恐らく第1部隊に配属されるだろうから気に掛けてやつてくれるか？」

どうとうあたし以外の新型か、第1部隊は生存率が高いという事らしいからきっと貴重な新型を守るためにここに配属されるのだろう。

「勿論、出来る限りサポートしますよ」

「お、頼もしいな……もう俺ナシでもやつていけるんじゃないか？」

「ウロヴォロス単独討伐する豪傑が何を言いますかね」

「あー止めてくれ、むず痒い」

「ウフフフ」

今日の食事はとても楽しい物だつた。

数日後、極東支部は配属される新型神機使いの話題で持ちきりになつた。

その内容と言えば……

「オイ聞いたかよ、また新型が来るつてよ」

「聞いた聞いた、エレナみたいなのがまた来るつて事になる訳よね?」「そうなつた場合……俺達下手すりや仕事を全部奪われちまうんじや……」

「マジかよ!? 考えた事も無かつたが……」

「そうね……エレナが2人に増えたらこの辺り一帯のアラガミの根絶は免れないわね……」

「しかも新型つて下着を着けないらしいぜ」

「なにそれ初耳」

大体こんな感じである。

ご免なさい新しい新型さん、あたしのせいであらぬ嫌疑が掛けられています。

そして安心して下さいアナグラの皆さん、あたしみたいなのはもう

出て来ません。

口に出して言えないのが非常にどかしい。

後最後の噂を流したのは誰だ、前に出なさい。

「お、噂をすれば……」

そんな声が……え、もう来たの？

第1部隊はエントランスに集合と聞いて来たのだが、まさかの顔合わせの為だったのか。

「紹介するぞ、今日からお前達の仲間になる新型の適合者だ」

「初めまして、アリサ・イリーニチナ・アミエーラと申します。本日一〇〇付けで、ロシア支部からこちらの支部に配属になりました、よろしくお願ひします」

ツバキさんに紹介されたのはとても綺麗な銀髪の女性、スタイルも素晴らしいが少々ツンツンとした人だ。
いやはや、凄い服だ……

「女の子ならいつでも大歓迎だよ！」

「……よくそんな浮ついた考えでここまで生き長らえてこられましたね」

え?と間の抜けた声を出すコーダ。

そりや仕方ない、今のはコーダが悪い。

「彼女は実戦経験こそ少ないが、演習では抜群の成績を残している。追い抜かれないよう、精進するんだな」

「……りょ、了解です」

しずしずと引き下がるコーダ。

「アリサは以後、リンドウについて行動するように」

「了解しました」

「リンドウ、資料等の引継ぎをするので私と来るよう。その他の者は持ち場に戻れ、以上だ」

そう言い残し、ツバキさんとリンドウさんはエレベーターに乗り込んでいった。

それを見送り、コーダがまた口を開く。

「ね、ねえ君ロシアから来たの？あそこつてすげえ寒いんでしょ？あ、でもさいぎい!?」

スペアンとコーダの頭を叩いて黙らせる。

流石にここで止めておかないとしゃべり続けてしまう、あたしの行動は間違つてない。

「第1部隊へようこそ、橘サクヤよ……今頭を叩かれたのがコウタで叩いたのがエレナ、その後ろに居るのがソーマとエリック、そしてさつきツバキさんに連れて行かれたのがリンドウ、第1部隊のリーダーよ」

「随分と多いですね……まあ、旧型は柔軟性がありませんからね」

結構刺々しい言い方だった。

ソーマは不機嫌そうに舌打ちし、ミッションカウンターの方へと歩いて行つた。

「でもね、エレナは新型よ？」

「え？」

あたしの方を見るアリサさん。
初対面の印象から、少し話し掛け辛い。

「ど、どうも……新型です」

「……年齢といい性格といい少し頼りないですね、ちゃんと戦えるん
ですか？」

その瞬間、エントランスに居た全員がアリサさんの方を一気に注視
したのを感じた。

憐れむような、否定するかの様な視線で。

「……何ですか？ 私間違つた事を言いましたか？」

「い、いやそんな事は——」

今もまだアリサさんは注視され続けている。

流石に居心地が悪いのだろう、髪を弄りながら少し俯いてしまつ
た。

「ま、まあまあ……アリサは長旅で疲れてるでしょうから少し自室で
休んでいらっしゃい」

「そう……させて頂きます」

軽く一礼し、その場を去つて行くアリサさん。
先行きが不安だが、どうにかこうにかやつていくしか無いだろう。

新型とは戦い方に非ず

「お話があります」

「え？」

アリサさんの自己紹介から3日後、あたしは一人で任務を終わらせて帰ってきた所だった。

そしてエントランスに入った直後、アリサさんは待っていたかの様に話し掛けて来たのだった。

「率直に聞きます、貴女は今まで極東支部で何をしていましたのですか？」

「え……あ……え？」

イマイチ質問の意図を読み取れない。

実はアリサさんとは未だ一緒に任務には行つておらず、防衛班の任務を手伝つてばかりだった。

「皆おかしいんです……任務に誘われたかと思えば遠巻きに戦つてゐる所を見られたり、いきなり腕相撲を挑まれたり、下着を着けているのか確認されたり……」

「あつ、あつ、あーそういう……」

恐れている事が起こつてしまつた。

皆の新型神機使いのイメージがあたしで固まつてしまつた為、アリサさんも同じ風に見られてしまい皆から確認されてしまつてゐるのだ。

「これ、全部貴女のせいですか？何をどうしたら『空は飛ばないんだな』とか『力は普通なんだな』とか、果ては『ちゃんと着けているのね』とか言われなきやならないんですか！」

「え、まさか見せたんです？」

「見られたんです！戦闘中に中を確認されてしまいました!!ドン引きです!!」

ううむ、あたしが悪いのかそうなのか。

変に言い争いをしていても仕方が無い、謝つて収まるならそれに越したことは無い。

「うん……前者2つはあたしのせいです、ごめんなさい。後者は噂の独り歩きです、気にしないで」

「謝罪が欲しいんじやありません！納得できる答えが欲しいんです！」

「おおつと」

これは困り果てた、答えが欲しいとな。

難しい顔をしながらこの凄い剣幕のアリサさんをどう奢めようかと考えて居たところ――

「その辺で勘弁してやつてくれ、お前の方がお姉さんだらう？」

頼れるヒーロー、リン Dowさんのご登場だ。

ジー・ザス、神つてやつぱり居るんだね……最近毎日叩きつぶしてい

るけど。

「あつ……そうですね、我を忘れて熱くなつてしましました……」免

なさいエレナさん

「ああ、いいんですね」

ありがとうリン Dowさん、非常に助かりました。

アリサさんも冷静さが戻ったようで何よりだ。

「そうだな……まあ見せても良いだろう。よーしアリサ、エレナ、一緒に任務に行こうか」

「いいですよー」

「ええ! エレナさん、今単独で任務に行つて来たばかりですよね! ?」

「え? ……あ、神機の整備が終わつてないか」

「いえいえそういうことでは無く、流石に連續で任務に行くのは疲れが……」

ああ、そつちのことか。

「体は全然大丈夫ですよ、連續任務の1つや2つや3つや4つ、ドーンと来いです」

「ハハッ、やっぱエレナは頼りになるな」

「いや、まあ大丈夫ならいいんですけど……」

という事で、任務にトンボ返りする事になった。

後、リツカが滅茶苦茶頑張ってくれた御陰でメンテナンスは疎か、強化まで終わつてた。凄いよね彼女の技術力。

「今日はシユウ2体かい、頑張るでー」

「リンドウさん、エレナさんの喋り方少し変じやありませんか?」

「ん? ああありや関西弁つづつてな、極東の一部の地方で使われてた喋り方だ、別に変じやないぞ」

「そうなんですね……不思議です」

今回の任務は贖罪の街、結構この地での任務は多く、地形も大体把握している。

「そういえばエレナさん、リンクバーストは知っていますか？」

「なにそれ、聞いたことは無いなあ。

「これは私達新型にしか出来ない事なのですが、活動状態のアラガミを捕食し、奪つた力を他人に受け渡す事が出来るんです」

「へえーそんな事が出来たんですね」

「まあ、極東支部には新型について教えられる人も居なかつたでしようから、仕方ありませんね」

リンドウさんは後ろでボリボリと頭を搔いてバツが悪そうな顔をしていた。

「いやーすまんすまん、足を引っ張らない様に気をつけるんで、よろしく頼むわ」

「旧型は、旧型なりの仕事をして頂ければいいと思います」

相も変わらずアリサさんの言葉は厳しい。

「はつは、ま、精々期待に沿えるように頑張つてみるさ」

そこでこんな返しが出来るリンドウさんもやはり凄い、大ベテランの風格だ。

そうしてリンドウさんはアリサさんの肩に手をポンッと置いたー

「キャア！」

突如、アリサさんが悲鳴を上げて飛び退いた。

「あーあ……随分と嫌われたもんだなあ……」

流石に驚いたリンドウさんがそうこぼす。

いや、今のは嫌われたからという物では無く……多分、恐怖に近い悲鳴だつた。

「あ……す、すみません！なんでもありません、大丈夫です！」

そう返したアリサさんだが、まだ少しパニックになつていてる様だ。

「フツ、冗談だ。んーそうだなあ……よしアリサ」

リンドウさんは空を見上げた。

つられてアリサさんとあたしも空を見上げる。

「混乱しちまつた時はな、空を見るんだ。そこで動物に似た雲を見つけてみろ……落ち着くぞ」

成る程、気持ちを落ち着かせる為の方法か。
何処でも出来て手軽に出来る良い方法だ。

「それまでここを動くな、これは命令だ。その後でこっちに合流して
くれ……いいな？」

「な、何で私がそんな事……」

リンドウさんは微笑みを見せた。

「いいから探せ、な？」

いやあ、格好良すぎますリンドウさん。

サクヤさんが最強のゴッディーターだと言っていたけど、しつかりとフォローまで出来ている辺り、懐の広さも相当の物だ。

「よし、先に行くぞ」

「はい、アリサさんまた後で」

リンドウさんとあたしは崖を飛び下り、作戦エリアへと侵入した。後ろをちらりとみると、ちゃんとアリサさんは空を見上げて雲を探していた。

「やつぱり事前情報は合っていたんですね」

「まあこんなご時世、皆いろんな悲劇を背負ってるつちゃあ背負つてるんだが……」

ズキン、と心が痛む。

……父さん……母さん……

「同じ新型のお前が居るし、他人への親切を心掛けているお前を俺は知っている」

顔を上げると、リンドウさんが微笑みながらあたしを見ていた。

「エレナが居るならアリサも大丈夫だろう。お前には特別期待しているんだ、分かるな？」

視界が滲む、だが泣いてはいけない。
嬉しいんだ、こんな時には笑わなきやね。

「うつし、じゃあ行くか！」

「……はい！」

ビツ、と前を見据える。

あたしは幸せだった、こんなにも良い人の下について働くことは
そうそう無いだろう。

「お待た……せ……!?

「おう、待つてたぜ」

「おかえりなさいー」

アリサさんが帰ってきた。
すつごい驚愕の顔をしている。

「あの……討伐対象……」

「シユウ2体ですね」

「あの……その足元……」

「シユウだな」

「まだ1分位しか掛かってませんよ!?

「まあもう1体居ますし」

「そういう事じやなくてですね……」

頭を押さえるアリサさん。

「やっぱエレナが居ると楽だなあ」

「えへへ、シユウも形が残つてて良かつたです」

「よーし、じゃあもう1体探しに向かうか」

「了解ですー」

アリサは呆然としながら思つた。

「私は……とんでもない人達にこれ以上無い暴言を吐いてしまつたのでは……」

「よし、見つけた

「居ました？」

「…………」

黙り込んでしまつたアリサさんは気になるが、遠くの建物の中で何かを捕食中のシユウが見つかつた。

リンドウさんが振り返つてあたし達を見る。

「よーし、んじや今度はアリサとエレナの2人で行つてこい。何かあつたら助けてやる」

「え!？」

「だつて見てみたいんだろ? エレナの戦い」

「いや……まあ……はい」

とうとうアリサさんに戦うところを見られてしまうのか……初戦の時とまでは行かないが緊張する。

後で何を言われるのだろうか。

「んじゃ、行つて来い」

「ここからやつちや駄目ですか？」

「え？」

アリサさんが目を丸くしてこっちを見る。

「建物の中だぞ？ 行けるのか？」

「確実性はありませんが、建物ごと潰せば1発で行けるかと思います」

「はい！」

アリサさんのリアクションが凄い。

「いやそれは駄目だ、作戦エリアを崩すとこれから先の任務に支障が
出るからな」

「うーんじやあ仕方ないですね……行きましょうアリサさん」

「わ、わわわ分かりました……」

慣れて貰うしか無い、これから毎日極東支部を離れない限りこうい
う会話が続くのだ。

「あたしが後ろから一撃入れたら戦闘開始ね、最初は銃撃での援護を
お願い」

「わ、分かりました」

コソコソと話しながら建物の中に侵入、そろりそろりとシユウに近く付く。

あたしはハンマーを無言で振りかぶり——

「はあああああ!!!」

掛け声と共に全力で振り下ろした。

ちよつと中心からズレたが手応えアリ。

「え……あ……」

ゴトン、とアリサさんの目の前に転がる物体。
それは、まぎれもなくシユウの翼だった。

「アリサさんは右に回つて！」

「あ、は、はい！」

呆けるアリサさんに指示を出しながらハンマーのブーストを噴かす。

シユウは右の翼をもがれ、尚も上半身に降り注ぐ銃弾の雨から身を守るように怯んでいる。

「もういっちょおおおおお!!!」

地面を削り取りながら無防備な股間をアッパーでフルスイングするだ。その衝撃で天井にビターン！と張り付くようにして吹き飛んだ。

「アリサさんお願ひ！」

「はつ、はい！」

今の攻撃で浮き上がりがつてしまい体勢が立て直せず、あたしはべちゃつと尻餅をついてしまう。

アリサさんはロングブレードを構え、落ちてくるシユウに飛び掛かつた。

「てやあああ!!」

ズバツ、と落ちてきたシユウにカウンターを決めるように薙ぎ払いを決める。

シユウは地面に落下すると、ピクピクと痙攣する以外には動かなくなっていた。

「し、シユウがこんなにもあつさりと……」

「いやー、最後の攻撃は綺麗に入りましたねえ」

「あ、あれは……いやそんな事よりも!!」

アリサさんは捕食もせずにあたしの所へズカズカと歩み寄ってきた。

「おかしいですよね!? 刀物でもない武器で翼を切つてしまつたりとか!?」

「いやまあ……切つたんじやなくて引き千切つたんですけどね……」

「普通はアラガミをあんな吹き飛ばし方しませんよね!? オウガティルの様な小型じや無いんですよ!?」

「シユウはまあ……軽い方ですし……」

何だかこの展開前にもあつたな……確かシュンさんだ、彼も結構こんな感じだった。

と、リンドウさんが歩きながらあたし達の元へやってきた。

「な？ エレナは凄いだろ？」

「あの、そんな一言で片付けられるような物では無いと思います……ドン引きです」

「いやいや、リンドウさんには負けますって」「負けるの!? 嘘ですよね!?」

はつはつはつと2人して大笑いしながらランデブー・ポイントに向かって歩いていく。

しかし、神機が何かに引つかかっている様な……

「エレナさん後ろ！ 後ろ！」
「え？」

アリサさんに咎められ目をやると、あたしの神機が捕食形態になつており、シユウの亡骸をズルズルと引き摺つていた。
あ、そういうえばまだ捕食していなかつた。

「あれ、いつの間に……気が付かんかった」
「おかしいですよ!? シユウを引き摺つて重いと感じなかつたんですか！」

「うん」

「」

アリサさんが思考を放り投げた顔を見せる。
これは中々にリアかもしけない。

「まあいいや、食べちゃえ食べちゃえ」
「アリサの分も残しておいてやれよ？」
「はーい」

こうして、アリサさんとの合同初任務は終わったのだつた。
……ついでに、突如雷雨に見舞われヘリが到着するのが1時間遅れ
てしまつたのは内緒である。

ミツシヨン名『蒼穹の月』

「フツフンフーン♪」

今日も今日とて任務のお時間。

愚者の空母でコンゴウ3体の討伐任務……だつた。

「頑張れー、神機君頑張れー」

ズルズルと、コンゴウを1口で食べられない神機にそう激励しながら引き摺り回して素材回収。

と、無線に通信に入る。

「はいはいー、任務完了したよー」

『緊急連絡です!!』

「……何かあつたの?」

通信から聞こえたヒバリさんの声は非常に切羽詰まつた物だつた。遠くに帰投用のヘリが近付いているのが見える。

『贖罪の街でソーマさん、エリックさん、コウタさんが討伐対象外のヴァジュラに遭遇、至急救援に向かつて下さい!』

「近いね……分かつた、すぐに向かうよ!』

通信を切り替え、ヘリパイロットに声を掛ける。

「その位置でホバリングして!』

『え? あ、ああ分かつた』

その場で止まるヘリ。

あたしは神機がコンゴウを捕食し終えたのを確認し、ヘリに向かって飛び、ドゴォン！と搭乗。

「うお!?なんだなんだ!？」

「連絡いつてたよね!?贖罪の街へお願ひ！」

「うわ!? いつの間に!?」

今日のヘリパイロットは敦だった。

そんなやりとりが交わされつつも、ヘリは贖罪の街へ急ピッチで飛行を開始した。

「見えた！ あそこだ！」

「急いで！」

「とっくにフルスロットルだ！」

雷鳴と同時に咆哮する獣が遠くに見える。

アレがヴァジユラ……未だ交戦経験は無かつたが、四の五の言つている場合では無い。

「10。右に、そこから直進して！」

「マジか！作戦エリアを突つ切れって事か!?」

「そうや！」

猛スピードで作戦エリアを飛ぶヘリコプター。

『何をしている！作戦エリア内だぞ！』

「そう言うなソーマ君！援軍を連れて来たぞ！」

『ホーネット、テメエ何のつもりだ！』

唐突にソーマから無線が入る。

しかしあたしはそれを無視して下を見据え、敦に話し掛けた。

「あたしがヘリから降りたらランデブーコードポイントへ向かつて待機してて」

「えつ……何する気だ？」

「衝撃に備えて……3……2……1……」

あたしはヘリを蹴つて飛び降りた。

頭から無回転状態で落ちる、手にした神機に入れ、ブーストを解放する。

「……エレナ!?」

「何っ!?」

エリックがあたしに気が付く、ソーマもエリックの声で驚いてあたしを見上げる。

良い位置だ、狙うはヴァジュラの背中ド真ん中。

「チエエエエストオオオオオオオオ!!!」

渾身の一撃がヴァジュラの背中にめり込む。

そのままメキメキメキと音をたててヴァジュラの胴体は地面にめり込んでいき、遂にはヴァジュラの頭とお尻がくつつく形で二つ折りになっていく。

ズンツ、と着地する頃にはヴァジュラは口をパクパクさせるだけの亡骸と化していた。

「……間に合つた？」

「相変わらずテメエは……」

「……た、助かつたよ」

呆れたように目をそらすソーマと引き攣つた笑顔でお札を言うエリック……あれ……？

「コーダは!? コーダはどないした!?!」

「コウタ君はヴァジュラの奇襲を受けた際に雷撃を食らつてしまつてね、ダメージはあまり受けなかつたようだけど麻痺してしまつたので華麗な僕が安全な場所へ運んでおいたのさ」

「……俺を囚にしてな」

「し、仕方ないだろう!?」

ホツと一息、大事は無かつた様で本当に良かつた。

エリックのコウタ君を迎えて行こう、という提案に賛成し、3人で歩いて別の広場へと移動した。

「あててて……あれ？ エレナ？」

「コーダ、大丈夫？」

物陰に隠れて座り込んでいたコーダを見つけて声を掛ける。

「何でエレナがここに……」

「救援依頼が来て駆けつけたんよ……まあ本当に外傷は無いみたいで良かつた」

「あははは……まだ少し痺れが残つてるけどな」「どいつも」いつも、油断するからだ

「本当だよ、死んだら元も子もないんだよ?」「テメエにも言つてるんだエリック」

オウ、と肩をすくめるエリック。

コータも歩けるようになつたみたいだし、待たせてある敦のヘリに

帰ろ――

「――何?」

「え?」

ソーマが何かに気付き驚愕している。
その顔が向いている方を見てみると――

「――お前ら?」

「あれ? リンドウさん達まで何でここに!?」

リンドウさん、サクヤさん、アリサさんがこっちに向かって歩いてきた。

「救援依頼で来たんですか?」

「救援依頼だと? こっちには届いてないぞ? 任務の為にここに来ただけだが……」

「え?」

おかしい、戦場の混乱を避けるために緊急時以外は任務は作戦エリ

ア1つにつき1チームだけの筈。

「同一区画に2つのチームが……どういう事?」

「考えるのは後にしよう、さつさと仕事を終わらせて帰るぞ。俺たちは中を確認、お前達は外を警戒、いいな?」

あたし達4人は領き、建物の入り口を守るように警戒態勢を取る。それを見て、リンドウさん達3人は建物の中へ入つていった。

「君達、この状況をどう思う?」

「……キナ臭えな」

「唐突なアラガミの乱入に救援依頼の通達ミス、そんでもつてこの作戦エリア内の複数チーム投入やね……」

「……絶対に何かあるつて事だよね」

互いに顔を見合わせて頷く。

と――

「……ん?」

「どうしたんだい、エレナ?」

微かに、しかし徐々に大きくなつてくる震え。
地面の砂が動く、何かが、何かが起こつている。

「――構えろ! 何か来るぞ!」

4人は神機を構え、襲撃に備える。
強くなる地鳴り、唸る咆哮。

「な――」

ソイツが、姿を見せた——

「何……コイツ……？」

「……マズいな、囮まれてやがる」

動きはヴァジュラに似ている。

しかし違う、圧倒的に違う……

白い棘、白い顔、漂う冷気……こんなアラガミ、ターミナルにも載つていなかつた。

その数、実に6体——

エリックが無線を取り出す。

「リンクドウ！未確認のアラガミ6体！救援を！」

『こつちでも交戦中だ！サクヤを向かわせるから持ち堪えてくれ！』

「嘘だろ……こんなの相手出来る訳が……」

「ボサツとするな！やるぞ！」

瞬間、あたしは駆けた。

目の前のアラガミの前足を潰す、次に目に入ったアラガミの顔を潰す、迫り来る鉤爪を払い退けて顎目掛けてアッパー、すかさずブーストを解放し顔部分を削り取る——

「はああああああ！！」

顔が無くなつたアラガミを踏み台に余所見している個体の横つ腹をハンマーで抉り取る——

「ス……スゲエ……」

「余所見している場合じやないよコウタ君!!」

エリックは寄つてくるアラガミに対し顎目掛けて放射弾を放ち怯

ませる。

どうにか、防衛線を築くことは出来ている——

「——」

エリックの顔が凍りつく。

それは目の前のアラガミに対してでは無い。

「更に……増えるだと……!?」

同個体のアラガミが3体現れる、しかもまだ遠くから別の同個体の咆哮も聞こえた。

エリックは撤退しようと提案し、リンンドウさんを呼ぶために再び通信機を取り出し——

「——何の音だ!?」

「わ、分からない！建物の中からだ!!」

まるで洞窟の崩落音、それが建物の中から突如響きだした。

4体目のアラガミを神機に食い千切らせたあたしはその音を聞き、不穏な胸騒ぎを覚えた。

「——ゴメン、あたしが見てくる！」
「おい！勝手に——」

迫るアラガミ、余所見する暇は無い。

しかしそれでも、今の音は何か途方も無いことが起こっているとあたしの勘が言っていた。

「あなた……!! いつたい何を!!」

「違う……違うの……パパ……ママ……私、そんなつもりじゃ……！」

そこに居たのはへたり込むアリサさんと、何かを問い合わせただそうとしているサクヤさん。

そしてその前には……通路を完全に封鎖する程の瓦礫の山があった。

「ぐうっ!!」

吹っ飛ばされたコーダがアラガミと共に建物の中へ侵入した。
マズい、このままでは持たない。

「早くしろ！逃げられなくなるぞ！」

ソーマの声が聞こえる、しかしあたしはそれどころでは無かつた。
この瓦礫の向こう側は出口が無い広間、そしてここに居ないのは只
1人――

「命令だ！アリサを連れてアナグラに戻れ！」
「リンドウ……さん……!?」

今のは間違いない、瓦礫の向こう側にはリンドウさんが居る。

「聞こえないのか！アリサを連れてとつととアナグラに戻れ！！」

リンドウさんの指示が聞こえてくる。

「サクヤ！全員を統率！ソーマとエレナで退路を開け！」
「リンドウも早く……！」

「わりいが、俺はちよつといつらの相手をして帰るわ……配給ビー
ル、とつといてくれよ！」

その指示は即ち――

「ダメよ！私も残つて戦うわ！」

「サクヤ！これは命令だ！全員必ず生きて帰れ！」

――リンドウさんを、見捨てろという事――

ガラガラと、完全に瓦礫で通路は塞がれた――

「コータ!!アリサさんを連れて離れて!!!」
「え!?」

「いいから!!サクヤさん、どいて!!」

サクヤさんを掴み、建物の入り口へ投げ飛ばす。

コーダもアリサさんを連れて走って行く。

神機のオラクルリザーブのレバーを引き、Oアンプルを2個取り出す。

「リンドウさん!!瓦礫から早く離れて!!!」

「……エレナ!?何をするつもりだ!?」

時間が無い、離れてくれるのを祈るしか無い。

1本目のOアンプルを飲みながら後ろを見る……石造りの壁だ。すぐに2本目を飲む、覚悟は出来た。

出し切る、あたしの本気——

「ハアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

ブーストを限界まで解放し、声の限りを叫び、力の限りを尽くした一撃を爆音と共に瓦礫に叩きつける。

瓦礫はビキビキッと大きなヒビを入れて音を立て崩れ始めるが、まだ道を塞いだままだ。

「あたしが、皆を——」

今の一撃で身体が宙を舞っているが構わず、神機を銃形態に変形させ空中で瓦礫に銃口を当てる。

あたしの目からは涙が溢れていた。

「救うんだアアアアアアア!!!」

『口ツソ』

「…………」

ぼんやりと、辺りを見回す。

白い景色、白い床、地平の彼方も何処にあるのか分からぬ程何も無い空間。

「よオ」

「え？」

声を掛けられて振り返る。

赤い、全身が赤い何かがそこに居る。

3mはあるかという巨躯に長い鉤爪のある手、頭には角が生えており黒塗りの顔には吸い込まれそうな白く光る目とギザギザの歯が生えた大きな口。

まるで、というよりも様々な文献にある悪魔、というイメージがピッタリな生物だ。

しかし、不思議と恐怖は微塵も感じない。

「……あなたは、誰？」

「いや待テ、備え口」

その悪魔はあたしの右腕を掴む。

その瞬間——

「ぎやああああああああアアアアアアアつ!!」

激痛——

バランスを崩し倒れるもそのままのたうち回る。

「待つて口、一時的だが痛覚を切つてやル」

ぐつ、と右腕を握られる感触が伝わり、ウソのように痛みが引いていく。

「はあつ、はあつ、はあつ……」

「あーア、あんな無茶をするからダ」

呼吸を整えて立ち上がるうと手を床につく。
が——

「あ……れ……？」

あたしの、左腕が無い。
それどころか、左脚も無い。
引き千切られたようにズタズタになつてている。
目の前の光景に気を失いそうになる——

「おい寝るナ！寝たら死ぬゾ！まじ、テ！」

「あああああ……」

「大丈夫ダ、気をしつかり持てば助かる」

「う……うん……」

痛みを感じず、多量の血が流れ出す傷口からは目を背け、深呼吸する。

そして再び、目の前の悪魔に声を掛ける。

「で、あんたは誰なんや?」

「俺力?俺はナーラー……あれダ、お前達が〈神機〉つつつてるあれダ」

「……神機?」

よく見てみると、悪魔には無数の傷があつた。

切傷、擦傷、焦げ、角も先の方が折れている。

「お前に色々と話したい事があつてナ、ようやく話せる事が出来て嬉しいゾ」

「え、あつ……」

これまでの神機の扱い方を鑑みる。

力任せに殴りつけ、アラガミの攻撃も全て受け止めさせ、擧げ句には零距離の爆発バレット使用……

これはキレる、間違いなくキレる。

「ゞ、ごめんなさい……」

「ン?何故謝ル?」

「……え? ぞんざいな扱いをしたから怒ってるんじゃないの?」

キヨトンとした顔で悪魔に見つめられる。

案外、可愛いかもしない。

「クツ、グゲツ、グハハハハハ! なんだ、俺に怒られると思ったの力!

「ちやうの? あたしのせいで傷だらけやし……」

そう問うと、悪魔は踏ん反り返った。

「確かに痛かつタ、でもナ、お前の飯を狩るときの爽快感に比べりや屁でもネエ! 潰シ、殴り飛ばシ、抉り取ル……お前の狩りは実に爽快

だつタ！」

「まさかの好評」

「しかしナ……」

悪魔はわたしを見た。

「そのザマではナ……もうアレは味わえないのかと思うト、残念でならン」

「…………」

あたしは左腕に目をやる。

まだ滴り落ちる血……もう、ゴッドイーターとして働く事は出来ないだろう。

「……もつと、皆を助けたかつたな……」

「出来るゾ」

「……え!?」

「お前の手脚なら直す事も出来なくはない。が、おまえの精神が痛みに耐えられるか分からんシ、俺もやつた事が無いから失敗するかもしれン」

あたしは右手を悪魔に差し出し、叫んだ。

「やつて！」

「おまエ、ちよつとは考エ……」

「いいから、やつて!!」

「はいヨ、まあ思い切りの良いのは好きだぜ」

また悪魔はわたしの腕を掴み、ニヤリと笑う。

「実はナ、お前の適合試験とかいうのに使われていた神機は俺だつた

「んダ」

「え？ そうなの？」

「あア、俺はナ、お前を一日見てつまらなそうな奴だと思つて食つてやろうかと思つてたんだ」

「ヒエツ」

悪魔は目を閉じて続ける。

「だがナ、逆だつタ……俺はお前に食われかかつたんだヨ、エレナ」「……わ、私が！」

「あア、俺の体の一部を持つてかれタ。あまりのイレギュラーに恐怖して大人しくお前に従つタ。情けなくて笑つちまうゼ、ゲハハハハ！」

「どうなつとるんやあたしの体」

「マ、その時持つてかれた俺の一部に働きかけて体を修復しようつて訳ダ。成功しても元通りとはいかないだろうガ……そこは勘弁してくれ」

ケケケと笑いながらあたしの右腕を握り締める悪魔は、酷い目に遭つた筈なのに楽しそうだ。

「何であたしを助けるの？」

「あア？ んなもん俺を満足させられるのはお前しか居ないからダ。それ以外何が——」

突如、右腕を掴んでいた悪魔の手が千切れる。

「おつと時間切れダ、まあこれで上手くいけばお前もまた俺を使う事が出切るかもナ」

「今千切れた貴方の腕、大丈夫なの？」

「アア、どうせまた修理して貰えるだ口」

あたしはふわりと浮き、悪魔から離れ始める。

「あ、貴方！名前教えて！」

「そんなもんねーヨ！好きに呼べばいい！」

どんどんと悪魔から離れていくあたし。
必死に、大きな声で叫んだ。

「あたしは戻つてくるからね『ロツソ』！絶対に、絶対に戻つてくるからね!!」

「あア！楽しみにしているゾ！また一緒に暴れまわろうぜ！ゲハハハハ
ハハハハツ!!」

白い地平に赤い悪魔、あたしの相棒『ロツソ』の姿が融けて消えていく。

意識がクリアになつていく、世界が崩れしていく。
戻らなければならない、地獄へと――

ブローケン・アロー

「なつ……!?」

鼓膜を裂く爆音と共に建物の壁が吹き飛ぶ。

その破片は周辺にいたアラガミに飛来し、その全てを仰け反らせるに足る威力だった。

そして、その破片から一際大きい物体が見える。

「エレナ!?」

石壁を突き破つて出てきたのはエレナだつた。

吹つ飛んできたエレナはアラガミに直撃して弾き飛ばし、地面に転がる。

起き上がる気配が無い、意識を失っている。

「クソツッ！」

「エレナッ！」

エリックと共に駆け寄る、しかし――

「邪魔だ！」

横から突つ込んでくるアラガミを切り払い、前を見ると倒れたエレナに近付くアラガミが2体。

間に合わない――

「クソツタレがつ！」

「エレナあああ!!」

エレナに噛みついたアラガミからぐちやり、と嫌な音が聞こえた――

「どけ！バケモノどもが！」

アラガミの下半身から頭に向かつて切り払う。

もう1体はエリックの放射弾を無防備な脇腹に受けて活動を停止する。

その瞬間、空気が凍り付く――

――エレナの左腕と左脚が食い千切られていた。

「……クソツ、クソツ……クソがつ！」

「間に合わ……なかつた……」

俺は怒りを露わにし、エリックは絶望する。

その直後、後ろから叫び声が聞こえた。

「退け！アナグラまで退却するぞ!!」

「リンドウ……！」

「説明は後だ！コウタ！そのままアリサを連れて行け！俺とソーマ、エレナが道を開く！」

リンドウが建物から飛び出ると、即刻アラガミを斬り伏せる。しかし咆哮が近づく、更なるアラガミの予兆だ。

「リンドウ……エレナがやられた……！」

「何つ!?」

リンドウは俺の足元で倒れたエレナを見て驚愕。そして歯を食いしばって言い放つ。

「ソーマ！エレナを担げ！エリックとサクヤは近いアラガミを追い払え！全員で帰るんだ!!」

「……了解、私に任せて！」

「分かった、ソーマ……エレナを頼む！」

俺は担ぎ上げようとし、エレナの腕輪に神機から触手が伸びて繋がっている事に気が付く。

即刻引き千切り、神機を放させエレナを担ぎ——

「ぐつ……何……!?」

「急げ！増援が来るぞ!!」

重い、この体格からは有り得ない重さだ。

神機は既に手放させた、いつたい何が……という所まで考えて思考を捨てる。

自分の神機も投げ捨て、エレナを担ぎ上げる。

「ホーネット！こちらエリック！アナグラと連絡が繋がらない！そち

らからは繫がらないか!?」

『駄目だ繫がらない!・こちらも救難信号を出しているが何も反応は無い!』

「何故だ……!? こんなにも狙い澄ました様に危険な状況が……兎に角、すぐに飛び立てるよう準備をしておいてくれたまえ!」

『了解!・』武運を!』

通信を切ると同時にエリックは近くへ来たアラガミの頭に銃撃をお見舞いする。

コウタに遅れて駆ける、振り返らずただひたすらに前を向いて走る。

「リンクドウ! 左前方の崖上に新手よ!!」

「……何だと、アイツはロシアの……!?」

足は止めずに首だけを向ける。

今度のアラガミは黒い、ヴァジユラに似ている様で全く似つかない。

「ディアウス・ピターだ! サクヤ! 牽制だけでも頼む! 絶対に近付けさせんな!!」

『了解よ!』

放たれる狙撃弾——しかし大柄にも関わらず全てを躲しながら寄つてくる。

狙いは、俺か。

「ハア、ハア、クソッ、クソッタレがあ!!」

眼前に迫る巨大な爪、エレナを抱えたままでは避けることが出来ない

い——

「そこかつ！」

目前で結合崩壊するディアウス・ピターの前足。

「走れソーマ！コイツはこの僕が引き受ける！」

割つて入つてきたのはエリック。

後ろを向き下がりながら1発、2発、3発と連撃をピターに叩き込む。

「サクヤさんは他のアラガミを頼む！もうすぐ合流地点だ！スパートを掛けるよ！」

「分かった、任せたわよエリック！」

エリックはポーチからOアンプルを3つ取り出し、全てを一気に飲み込む。

「……グツ……もうすぐ……もうすぐなんだ……！」

『駄目だ！このヘリではどう頑張つても5人乗せるのが精一杯だ！』
「何だと!?」

「兎に角アリサとエレナを先に乗せろ！」

合流地点を目前に俺達は更なる問題に直面する。
今の人數は7人、ヘリに乗り切らない。

こうしている間にもアラガミの群れはヘリの方へと近付いてくる。

「俺が残る！全員神機を捨ててヘリに乗れ！」

「ダメよ！いくらリンードウでもあの数は対処しきれないわ！私も残る！」

「駄目だ、これは命令だ！」

『いえ、誰も残る必要は無いわ』

突如、上空から弾丸の雨が撃ち下ろされる。
不意を受けたアラガミの群れは足を止める。

「今の声……ジーナか！」

『ええ、丁度任務の帰りで救難信号を拾つたわ』

『俺達のヘリに2人乗せる、5人選んで先に行け』

ジーナとカレルの声が聞こえる、第3部隊だ。
尚も援護射撃をしながら近付いてくるヘリ。

「た……助かつた……」
「エリック!?」

突如エリックが倒れる。

リンドウが駆け寄りエリックを担ぎ上げた。

「コウタ！アリサを乗せたら射撃に回れ！サクヤも残って2人で第3部隊のヘリに乗れ!!」

「了解！」

「了解よ！」

アリサをヘリに乗せたコウタの後にエレナをヘリに乗せ、リンドウが乗った瞬間に叫ぶ。

「ホーネット、出せ！」

「了解！」

すぐにヘリは浮き上がり、作戦エリアを離れた。

「ハアツ、ハアツ、ハアツ……」

「リンドウさん！通信が回復しました！」

「通信機を貸せ！」

「私なんて……放つておいてよ……！」

「ソーマ！アリサに鎮静剤を打て！」

ヘリの中は未だ落ち着いていない。

リンドウはアナグラに通信を取り、俺は呼吸を整えながらエレナの手足を縛つて止血していた。

「こちら第1部隊！重体1名、体内オラクルの枯渇による意識不明が1名、錯乱して意識混濁状態の1名！ヘリポートから搬送する準備をしろ！」

『了解しました！すぐに手配します！』

通信が切れ、リンドウは椅子に座り込んだ。
俺はアリサに鎮静剤を打ち、注射器を捨てる。

「エレナの容態は?」

「顔色が悪い……ハアツ、出血し過ぎだ……」

「大丈夫か?」

「俺の事は良い……エリックは?」

「1日安静にしていれば回復するだろう……」

出来る事は全てやつた、後はアナグラに到着するまで待つだけだ。
しかし、俺は浅はかだった。

「ぐう、うううウウウウウウ……」

「エレナ……!?

意識が無かつたはずのエレナが突然唸り声を上げ始め、不規則な呼吸を繰り返す。

目も開いているが、明らかに正気じやない。

「まさか……アラガミ化か!?

「いや腕輪は無事だ……もしや出血によるショック症状か……!? エレナ！俺が分かるか!?

リンドウはエレナの肩を掴み呼びかける。

しかし見開いた目は虚空を見つめ、呼びかけに対する返答はおろか
反応も無い。

「駄目か、エレナにも鎮静剤を！」

「……いや駄目だ」

「何!?

「サカキのおっさんが言っていた……エレナはもう、通常の薬品が効かない体だと」

懐に仕舞い込んだケースを取り出す。

開けてみると、黒ずんだ液体が入った変わった形の注射器が1本だけ入っている。

「おっさんから預かつたこれを使う、エレナの頭を押さえろ」「……分かつた、頼む！」

リンドウは頭を押さえ、俺は肩を押さえてエレナの首に針を刺す。すると勝手に中の薬品が入っていき、エレナの目は徐々に閉じていった。

「よし……」

「それも一種の鎮静剤か？」

「いや、特製の麻酔らしい……失血には意味が無いだろうが無いよりはマシだ」

安らかな表情で眠るエレナを見て一息つく。

「エレナ……！」

リンドウや俺の物では無い声に気が付き、足元を見てみると倒れているエリックがエレナの右手を握り締めている事に気がついた。

「死ぬなエレナ……僕はまだあの時の恩を返し終わっていない……！絶対に死ぬな……！」

「エリック……」

リンドウはそんなエリックを見て口を開く。

「俺はエレナを高い戦闘力を持つてゐる事しか知らなかつた……だがコイツには何か秘密がある」

「……そうだな」

リンドウは通信機を取り出す。

「サカキのおつさんを問い合わせす、エレナは一体何者なのか……俺達は知る必要がある」

「……ああ」

エレナの出血はほぼ止まつてゐる、それは止血の効果か血液の不足による物か分からない。

対処の為にも、おつさんへの連絡は必要だろう。

「到着だ！ 急げソーマ！」
「分かっている！」

既にヘリポートには医療班が待機していた。

準備してあつたストレッチャーにエレナを慎重に乗せ、運ばれてい
くあいつを見届ける。

隣を見るとエリックとアリサも続いて運ばれていく準備をしてい
る所だった。

「既に輸血の準備は完了している、後は彼女の体力との勝負だろう」

いつの間にか隣にはサカキのおっさんが居た。

「連絡してくれて助かった、丁度研究の為にストックしてある彼女自身の血液があつた……それがまさか、こんな形で役に立つとはね……」

「……アイツは、助かるか？」

「あれだけの外傷を負つて出血も酷い有様だ……通常あの年齢では身体が持つたとしても心が耐えきれないだろう」

ズキリ、と心臓が痛む音がした。

また、俺のせいで仲間を――

「だが僕はそこまで心配していない、彼女の生命力と精神力は同年代と比べて並外れた物だ。きっと何も無かつたかの様に笑顔を見せてくれるよ」

「……そ、うか」

少しだけ、痛みが和らいだ様に感じた。

「サカキのおっさん、話がある」

リンドウが近付いてきた。

第3部隊のヘリが近付いてきていたのも見えた。

「エレナについてだ、あいつは……いや、あいつの体はどうなつている？」

「？」

「……手足を失っている、酷い大怪我だ」

「そうじやない、おっさん、俺達にあいつの体について隠している事があるだろう」

リンドウの目は真剣だ、それに対しておつさんの顔は酷く困惑している様に見える。

「…………」

「その沈黙が答えた、話して貰うぜ。俺は部隊の隊員を全員護る義務がある……それと同時に、隊員の事も知る必要がある」
「……ふむ……」

おつさんは俺を見て、表情を和らげる。

「分かった……リンドウ君ソーマ君、私についてきたまえ」

そう言い残しておつさんはアナグラの中へと踵を返して歩いていく。

「リンドウ！あの子達は!?」

後ろから声が掛かる、サクヤだ。

「医療班に任せた、後はあいつら次第だ……俺は報告に行かなきやな
らんから第1部隊は一旦解散、部屋で待機していくれ」
「……分かったわ、コウタにも伝えておく」

リンドウは手を上げてヘリポートを後にする。
俺もそれに続き、アナグラに戻った。

巡り巡る奸策

それから俺達はサカキのおつさんの後を追つてラボラトリへ足を運んだ。

おつさんはおびただしい数のコードが繋がれたモニターを弄りながら、俺達に問い合わせた。

「さて……エレナ君の事を話す前に、君達から見て彼女はどう見えるか教えてくれるかい？」

リンドウと顔を見合わせる。

「まあざつくりと言つなら『強い』な、性格は礼儀正しく真面目な方だが……年齢相応だろう」

おつさんは大きく頷く。

「報告を受ける限りでは足の速さもそこそこながら腕力やジヤンプ力、瞬発的な動きに異常な程の強さを見せていいようだね」

「ああ、あんな動きをしようとすれば間違いなくとんでもない筋肉量がある筈だ……だが、アイツを見る限りそんなに筋肉質ではない」

「……そうだね、どちらかと言えば見た目は同年代と比べても華奢な方だ」

資料を数枚、俺達に差し出しながら続ける。

「その資料の1枚目は彼女の此処へ来たばかりの時のデータだ、身長148・2cm 体重44・2kg……栄養不足だった為か成長は悪い方だ」

「……まあ、この辺時世では珍しくは無いな」

「そうだね、では2枚目を見てくれるかな？」

リンドウはパラリと資料を捲る。

そこには有り得ない数字が書き込まれていた。

「138・4kg……!?」

データを採取された日付は1枚目から1ヶ月と少し経過した後だつた。

エレナを抱えた時、有り得ない程の重量を感じたのはその為だつた。

「……ソーマ君、あまり驚いていない所を見ると……知っていたのかい？」

「俺はさつき退却する時にあいつを担いだ、それで知つただけだ

「ふむ……もう1枚捲りたまえ」

リンドウが資料を捲ると、それは色々な精密検査の結果だつた。

「神機の適合試験後、異常な体重気がついた私は精密検査を行つた。脳に異常なし、内臓に異常なし……異常が出ていたのは骨と筋肉だつた」

「骨と筋肉……」

「彼女は適合試験の際、他の候補生と比べて痛みをほほ感じなかつた。しかし、身体中の構造を全て作り替えられてしまつたんだ」

資料には後に実施した体力テストの結果も書かれている。

握力計測不能、立ち幅跳び計測不能、走り幅跳び測定せず、反復横跳び20秒で45回、腹筋30秒で56回、20mシャトルラン200回目で計測中止、50m走6・24秒……

「彼女に行つて貰つた体力テストの結果、握力とジャンプ力と腹筋、そしてスタミナが異常だという事が分かつた……しかし、それ以外は他の神機使いと変わらないかそれ以下だった」

「……小回りが利かない？」

「（）明察だ」

最後の資料は考察が書いてある。

「そうして様々な検査を終えた結果、エレナ君は全てアラガミ細胞からなる骨と筋肉に置き換えられたという結論に辿り着いた」

「アラガミ……!?」

「そう、アラガミだ……彼女の体は私達とは根本的に違う物になつているという事だ」

リンドウは資料を握り締める。

「何故だ、何故エレナだけがこんな事に……」

「……答えは明白だ、彼女がゴッティーチルドレンだったからなんだよ」

おっさんはモニターを弄りながら続けた。

「彼女の体内には親から受け継いだ偏食因子が存在し、しかもそれが変異してまるで別物になつていた……それが異常な程の神機適合率を誇り、体内の偏食因子が作用して身体を作り替えた」

「ゴッティーチルドレン……ゴッティーチーの子供って訳か」

「そう、人類史上初のゴッティーチーの子供なんだ……故に、イレギュラーが起こつた」

神妙な面持ちで顔を上げるおっさん。

「高い神機適合率は神機と身体が融合してしまい……結果、アラガミ化する可能性が高い。しかし、彼女にはそれが起らなかつた」「……何故だ?」

「それは検査をしても分からなかつた、しかし仮定は出来るね……恐らく彼女は……」

「エレナは……?」

手元の資料には既に目もくれず、リンドウはおっさんの言葉を待つ。

俺も釘付けになり、手を握り締める。

「彼女は神機を逆に取り込んだと想定できるね。そして取り込んだアラガミはエレナ君に害を為さず、有益になる様に身体を作り替えさせた」

「取り込んだ……!?」

「そうだね、言つてしまえば彼女は精神が人間。体はアラガミのハイブリットドだ……後天的なソーマ君と言つた方が近いのかかもしれないね」

俺は壁を殴りつけ、おっさんを睨み付ける。

「ふざけるな! 何故あいつを俺と同じにした!? 俺の様な人間は存在するべきじやねえ!!」

「……彼女自身の望みだつたんだ……ゴッドイーター・チルドレンの研究は途中の段階のまま、一刻も早くゴッドイーターになりたいと願い、十分な臨床試験を行わないまま適合試験を受けたんだ」

顔を下に向けるを見せるサカキのおっさん。少しづつ、怒りが収まつていくのを感じる。

「……止めなかつたのは何故だ?」

「止めたさ、研究が中途半端なまでの実地試験なんて愚の骨頂だよ……しかし、皆を助けたいという抽象的な願いにも関わらずに異常に強い意志があつた。僕には、止められなかつた」

上を向いて溜息を吐く。

仕方が無いとは言えないが、エレナは自分で決めたら梃子でも動かない事を知つてゐる。

ここでおつさんを責める事は出来ない、俺も出会つたばかりの時にあいつを止められなかつた。

「あいつは、これからどうなる？」

「……手足が使えなくなつてしまつた以上、ゴッドイーターを続ける事は出来ないだろうね……身体の事もある、目を覚ましたら僕が責任を持つて彼女に不自由が無いよう面倒を見よう」

リンドウは目を閉じて数秒間考えた。

そして、おつさんに言つた。

「分かつた、エレナには酷だが……そうしよう」

「それじゃあ最後にもう一つ、この事は2人の心の中へ仕舞つておいて欲しい。君達なら大丈夫だと思うけど、ほぼ全身がアラガミ化してしまつているとバレてしまえば彼女はこのままの生活を維持する事は出来ない……分かるね？」

「……ああ」

言われるまでも無い、俺は孤独には慣れたが先日の落ち込んだエレナを考えればあいつを孤独にするにはまだ若すぎる。

俺達は互いに見合つて頷き、研究室を後にする為ドアを開けた——

『アアアアアアアアアアアアツ!!』

「!?」

突如、廊下の隣の病室から人間の物とは思えない叫び声が聞こえた。

「エレナ君!?」

おっさんは俺達を押し退けて病室に飛び込んだ。

「どうしたんだい!?」

「分かりません! 輸血中に突然覚醒して負傷した腕と脚を押さえています!」

「幻肢痛……いや、それにしては痛がり方が異常だ、身体を押さえておいてくれないか!」

病室はかなりの混乱状態にある様だ、容態が気になるが俺達が入る事は出来ないだろう。

「……ソーマ、あの時の状況を説明する。サクヤの部屋へ一緒に来てくれ」

リンドウはエレベーターへと歩き出した。

今の俺には神機も無い、エレナの容態も確認できないのなら何もある事が無い。

黙つてリンドウについていった。

「サクヤ、居るか？」

リンンドウはノックもせず、部屋に入った。

続いて俺も部屋に入ると、ベッドに腰掛けるサクヤとソファに座つているコウタを確認した。

「リンンドウ……怪我は無かつた？」

「……ああ、お陰様でな」

リンンドウは冷蔵庫から勝手にビールを取り出して飲み始める。俺は部屋の入り口近くの壁にもたれ掛かる。

「ソーマも……どういう事？」

「まあ今回の件でパニックになつてていると思つたから、説明が必要だと思つてな」

そう言いつつリンンドウはポケットに手を入れる。

その時、俺はポケットに入れた手にディスクが握られていた事に気が付くが言及はしなかつた。

「リンンドウさん……俺何が何だか分からなくて、サクヤさんと話をしようと思つたんだけど……」

「よくやつたさコウタ、あんな状況でちやーんとアリサを連れて帰れたのはお前のお陰だ。胸を張つてもいいぞ？」

「……はい……」

リンンドウはコウタの隣に座り、話を始めた。

「まづづくりと説明をしよう、俺はあの建物の中でアラガミと戦闘中に閉じ込められた。入り口を塞ぐように通路が完全に瓦礫で埋

まつてな」

「ええ、それと同時にアリサが錯乱していたのを確認したわ」

リンドウはビールをテーブルに置く。

「そこで俺は逃げ道も無くなり——お前達に撤退命令を出した」

「……ええ」

「しかし俺は助かつた、通路を塞いでいた瓦礫は跡形も無く吹っ飛び、相手していたアラガミまで余波で粉々になつちました」

リンドウは目を細める。

「恐らくエレナが助けてくれたんだろう……あの状況で瓦礫を除去出来るのは思わなかつたが、それをやつてのけて俺を救い出したんだ」「……そうだ、エレナはどうなつたの？あの子には御礼を言わないと……」

リンドウは口をつぐむ。

自分を助ける為に犠牲になつた等とは、中々切り出せないのだろう。

代わりに俺が口を開く。

「あいつは手足を失つた、ゴッドマイターに戻ることはもう無いだろう」

「そんな……！」

「俺に関わつた奴は全員不幸になる運命だ。遅かれ早かれ、な」

俺はコートに付いたエレナの血を見ながら呟く。

「エレナ……」

「……落ち込むなコウタ、あいつにもう会えない訳じやないんだ、な

？」

「でも……」んなのって酷すぎるよ……まだあいつは14歳なのに
……」

これにはリンドウも何も言えなかつた。

少しの間沈黙が流れ、リンドウは立ち上がつた。

「今日遭遇したディアウス・ピター……奴は1度だけロシアで対面したことがある第2種接触禁忌種のアラガミだ、これからは奴もこの支部で活動する事になるだろう。俺の言いつけを守り、生き抜くことを考えて行動してくれ」

「……了解」

「……了解つす」

それだけを言い、リンドウは部屋を出て行く。
それに続いて俺も部屋を出る。

「……ソーマ」

「何だ」

リンドウはエレベーター前で振り返り俺を呼ぶ。

「確かお前は神機を置いていったな」

「……ああ」

「神機が回収される迄の間……いや、今夜はエレナを見守つてやつてくれ」

「どういう事だ……？」

リンドウはいつになく真剣な表情を見せる。

「今回の任務は、恐らく俺を暗殺する為に仕組まれた罠だろう」

「何……!?」

「嫌な予感がするんだが、俺はマーキングされている筈だからな……」

リンドウは到着したエレベーターに乗り込み——

「エレナを頼む」

それだけを言い残していった。

然ればこそ、懷疑は去らぬ

「いだいいだいいだいいいい!!!」

「……………」

病室に入るとすぐにエレナの叫び声が耳に入る。

俺はサカキのおっさんの隣で、恐らく同じ様なアホ面を晒してエレナを見ていた。

「なあ」

「ああ、うん」

エレナは意識が戻っている、多分。

しかし左腕と左脚があつた場所をおさえてわめき散らしているので此方には気付いていない。

「左腕と左脚……」

「……………」

俺は一息ついた後、おっさんに言つた。

「生えてきてないか……？」

「うん、僕もそう思うね」

明らかに担いでいた時の状態から手足が修復しつつある……肌の色は真っ赤だが。

「何故痛がつてる?」

「成長痛に類似する物だね、重度の」

つづくこいつは……と目を閉じて頭を搔く。

あいつらに何て説明すりやあいいんだ……

「輸血が終わつた事により回復して、体内のアラガミが元に戻ろうとしているのだろうね……しかし、このまま症状が進めばアラガミ化という可能性はゼロではない、僕は観察を続けるよ」

「ああ……エリックは？」

「アリサ君と一緒に反対側の病室だ、流石に同じ部屋には出来ないからね」

まあ、そうだろうなと部屋を後にする。

今居ても仕方が無い、エリックの容態を見よう。

「いやあ！こないでえ！」

と思つていたらこつちはこつちで喧しい。
アリサが錯乱状態で暴れている。

「丁度良かつた！押さええて下さい！」

「何で俺が……」

「いいから、お願ひします！」

渋々とアリサの身体を押さえつける。

女医は注射器でアリサに鎮静剤を投与する。

「ふう……有難う御座います」

女医には目もくれず反対側のベッドに顔を向けると、エリックが妹を抱えていた。

「いやはや、参ったね」

「調子はどうだ?」

エリックは既に身体を起こし、頬をポリポリと搔きながら困惑した表情を見せる。

「ああ、僕なら問題は無いんだが……」

「お……お兄ちゃん、だ、大丈夫?」

「この通り、エリナがアリサの声で怯えてしまってね……少し困つて
いる」

フツ、と鼻を鳴らす。

エリックはもう問題は無さそうだ。

「それよりも、エレナの容態は……?」
「…………」

つい、黙り込んでしまった。

さつきのエレナの状態から考えると、お世辞にも問題ないとは言い難い状態だ。

「お兄ちゃん……お姉ちゃん、どうかしたの?」

「……ああ、ちょっと怪我をしてしまってね」

ちよつと、等と生易しい物ではないが、エリナに本当の事は言えな
いだろう。

エリナはエリックの膝に頭を預けて続けた。

「私、お兄ちゃんを助けてくれた時のお礼を言つてないよ。元氣になつたら言わなきや」

「…………ああ、そうだね……」

沈痛な面持ちのエリックを見て思わず上を向く。

そんな表情を見ながらエレナが手足まで生えて戻つてきたらと考えると、流石の俺でも同情する。

「少し待つてろ」

「え？……あ、ああ」

病室を出て自動販売機でジュースを3本買ってすぐに戻つてくる。そしてエリックに2本投げ渡して言い放つ。

「今日はテメエに助けられた、俺の奢りだ」

「ああ、成る程ね」

「あ……ソーマさん、有難う御座います……」

エリナは遠慮がちにお礼を言い、俺はそれを見ながらジュースのフルタブを開ける。

「こうして、君とコンビを組んでから2年も経つたんだね……いやはや、早い物だ」

「……そうだな」

「あの頃に比べれば君もかなり口数が増えたね、やはり華麗な僕のお陰という訳だ」

「テメエに付き合わされれば嫌でもこうなる」

望んだ物ではないが久々の休暇だつた、エリックとの雑談は軽く弾んだ。

「……ん？」

30分程話した後にエリックに別れを告げ、エレナの居る病室に戻らうとした。

しかしカギが掛かっている、普段病室は開放されている筈だが……

「おや、どうしたんだい？」

研究室に入つてみるとおっさんが普段通りにモニターを前で座つていた。

「エレナはどうなつた？」

「取り敢えず容態は落ち着いたから医療スタッフに任せたよ、見なかつたのかい？」

「いや、カギが掛かっていて入れない」

「……なんだつて？」

おっさんはすぐに手元のモニターを操作し、あれでもないこれでもないと呟く。

俺もモニターを覗き込んでみると、どうやら病室のカメラ映像をハックしている最中の様だ。

「何をするつもりだ？」

「急患が入つてくる可能性を考慮すると病室をロックするなんて有り得ない。もしかすると……」

病室の映像が映し出されると、寝ているエレナと1人の医師の姿があつた。

確かに、オオグルマだつたか……？

「……マズい！ソーマ君！病室の前で待機しておいてくれるかい！？」

「何故だ？」

「彼はエレナ君をアラガミ化させるつもりだ！扉をオーバーライドさせるから彼を止めてくれ！」

瞬間、俺は走り出した。

頭に血が上る、研究室を出て扉の前に立つと時間を置かずに扉が開いた。

「な——」

オオグルマの手には注射器があつた。
驚愕するオオグルマの腕を掴み、そのまま投げ飛ばして床に叩き付ける。

「何をしようとした？」

「何故だ!? カギを掛けておいた筈——」

馬乗りになり、腹を殴り付ける。

「何をしようとしたか聞いている

「グハツ！ ガハツ！」

大分頭にきていた様で力加減を間違ったか、オオグルマは咳き込んで腹をおさえている。

「待つんだソーマ君」

「…………」

襟首を掴み、顔にも1発お見舞いしてやろうかという所でおっさん

に止められる。

溜息を1つつき、振り上げた腕を降ろした。

「間に合った様だね……」

「……それは、偏食因子か？」

おつさんは落ちた注射器を拾い上げるとふう、と一呼吸置いてから話し始める。

「そうだね、これは今となつては何処にでもあるような偏食因子だ……但し、それは適切な量を適切な時間で利用した場合に限るけどね」

「過剰に投与しようとしてたって訳か」

「ああ、一度の投与には多すぎるしエレナ君の偏食因子の補充は済んだばかりだ……それに、彼女の偏食因子は特別製だから通常のP53偏食因子を投与してはいけないと通達してある」

倒れたままのオオグルマを睨み付けると、腰が抜けている様でへたり込みながら言つた。

「すまん！ 知らなかつたんだ！ 許してくれ！」

「では何故病室をロツクしたのかね？ それに、貴方はアリサの専属医ではなかつたかな？」

「そ、それは……」

余りに見苦しい姿で余計に腹が立つ。が、おつさんは妙な事を言い出した。

「ソーマ君が監視していたから接触できなかつた、と言つておくと良い」

「……は？」

おっさんの方を見てみると、普段のにやけている表情では無く、完全に無表情だつた。

「その方が、君には好都合だろう？私達に気付かれた等と余計な事を言つて切り捨てられたくはないだろうからね」

「どういう事だ……？」

おっさんに問い合わせるが、あくまでもオオグルマを見続けて俺を無視する。

オオグルマは跳ねるように立ち上がり、病室から逃げていった。

「おいおっさん、どういう事だ？」

「私も全容は掴みかねていてるから説明は出来ないんだけど……何か、極秘裏に計画が動き出していると睨んでいるんだ」

「なら奴に吐かせた方が良かつただろうが！」

「リンドウ君やエレナ君を邪魔者として消そうとするほどの計画だ、もし察知されれば強行策に出る可能性が非常に高い」

おっさんは眼鏡を直し、呟く。

「まずは観察が必要だよ」

納得はいかない、いかないが……眠るエレナを見て気持ちを落ち着ける。

置いてあつたパイプ椅子を持つてきてエレナの隣に座り、口を開く。

「俺はアンタの様に観察者になるつもりはねえ、これがそんなご大層な計画つてんなら、そんなフザけたモンはぶつ潰すだけだ」

「ソーマ君……」

「今日は俺がコイツを見張る、何かあつたら呼びに行くから部屋に戻つてろ」

「……分かつた、宜しく頼むよ」

おっさんは病室を出て行つた。

俺はそれを見て、エレナの様子を見る。

「…………」

腕が恐ろしい速度で治つてきている、意識は無いようだが少し震えている。

「ハア…………」

パイプ椅子に腰掛け、溜息をつく。

思えばコイツはある時エリックを救い、更に今日はリンドウまで救いやがつた。

しかし今日リンドウを救つた時の事を考えると明らかに捨て身の行動だ。

「…………」

会つたばかりの頃を思い出す。

『死ぬのは恐いが、他人が死ぬのはもつと恐い』

その発言の意味を、エレナの姿を見て思い知る。

これは『親切』^{「ルチーズ」}等という物では決して無い、明らかに『自己犠牲』だ。

「…………フツ」

落ち着いた状況で他人の事を気に掛けるなどいつ振りだろうか。

それをさせるだけの人間が居たとは、それもこんなに小さな体のガキだというのにだ。

自嘲気味に笑い、寝息しか聞こえない病室で寝顔を見ながら長い時間過ごす。

再誕せよ　再起せよ　再臨せよ

「…………」

ゆつくりと瞼を開ける。

随分と、長い夢を見ていた気がする。

「んー…………」

部屋を見渡してみる。

確かここは病室だ、あたしは一体何故こんな所で寝ているんだろう

「目が覚めたか
「…………ん？」

声が聞こえた方に頭を向けると、ソーマが座つてあたしを見ていた。

その瞬間断片的な記憶を取り戻したあたしは、頭が一気に覚醒して飛び起きた。

「ソーマ！ リンドウさんは何処におるん!? 皆は怪我していない!?
「うおっ!!」

あたしはソーマに飛び掛かり、地面に押し倒して質問を浴びせた。

「あ…………めん……」

めまいがして、そのままソーマに覆い被さるように倒れ込んでしまう。

「……どけ、重い」

「あう」

辛辣な言葉が心に突き刺さる。

しかしみまいが収まらず、体に力が入らない。

「……朝っぱらから熱いなお前ら」

「……へ？」

いつの間にやら病室の扉が開いており、リンドウさんが疲れ果てた様子で立っていた。

状況が飲み込めない、混乱したまま固まる。

「いやつくのは勝手だが、ちゃんと回復してからにしないと駄目だぞ」

「……いやついてるよう見えるか？」

「冗談だ、冗談」

リンドウさんはあたしを持ち上げ、さつきまで寝ていたベッドに座らせた。

「体調はどうだ？」

「え、えつと……リンドウさんは大丈夫？」

いまだに状況が飲み込めないでいるし、リンドウさんは何ともなさそうに見えるが一応確認する。

リンドウさんは頭を搔きながら言つた。

「心配してるつもりが逆にされるとはなあ、俺はお前の手足の方が心配なんだが」

「……あつ」

咄嗟に左腕を見てみると、包帯でぐるぐる巻きにされたあたしの左腕があつた。

少し違和感があるけど……やっぱり、『ロツソ』と話していた時の事は夢では無かつたのか。

「ええと……ちょっと違和感はあるけど大丈夫っぽい、多分、フォルセ」

「うーん、まあ起きたばかりみたいだから混乱しているだろ、今サカキのおっさんを連れてくる」

そう言つてリンドウさんは出て行つた。

それを見送り、身体を確認してみると手術衣を着せられており、左脚にも包帯が巻いてあつた。

つまり、神機と話した時と同じで腕と脚を失っていたのだろう……

「ねえソーマ、あたしどんくらい寝てた？」

「12時間位だ、少しばかり寝過ぎた程度だろ」

「え？ 12時間で手脚生えたのあたし？」

恐ろしすぎる、余りにも現実味が無い。

「最初に会つた時からそうだ、テメエは無茶苦茶な事をやらかしてきた」

「あー、うん……」

ソーマはパイプ椅子から立ち上がり、あたしの前まで近付いて来る。

咄嗟に怒られるかと身構え、目を瞑つた。

「もう少し、自分を労れ」

頭に手が置かれ、ワシャワシャと撫でられる。

数秒間フリーズする……そして目をまん丸にして顔を上げると、ソーマは後ろを向いていた。

「……慣れない事はするもんじやねえな」

ボソリと咳き声が聞こえてくるが、ソーマは後ろを向いたまま突っ立っている。

正直凄くどんな顔をしているのか見てみたかったが、流石に止めておこう……後が怖い。

「やあ、起きたんだね」

「あ、博士」

博士とリンクドウさんが病室にやつてきた。

博士はそのままソーマが座っていた椅子に座り、こつちを向いた。

「さてと……まずは包帯を取つてみようか」

「……うん」

左腕を博士に差し出すと、巻き付いていた包帯をクルクルと手際良く外していく。

少しづつ、中の状態が見えてくる。

「……大丈夫かい？」

「……うん、平気」

やはり強い子だね、と言いつつ博士は包帯を全て取り去った。

続いて脚に巻き付いた包帯も外しに掛かる。

「…………」

その間、あたしは左腕を観察した。

赤い肌、黒い筋がまるで浮き上がる血管のようにびつしりと貼り付いていてとてもグロッタ……グロテスクな見た目をしている。右手で触れてみると、岩のように見えるが固いわけでは無いし触れられている感触もある。

指先も元のサイズに近いが爪が無くなっている。

そうこうしている間に脚の包帯も外れた。

「うーん……」

左脚も似たような感じか、赤黒くゴツゴツしていて指先は爪が無い。

靴が履けない、等と言った不便は無さそうだ。

「……あまり驚かないね、こうなつた理由にも気付いていたのかい？」
「うーん、無くなつた理由は覚えてないけど無くなつた事は神機と話した時に気付いてたよ」

博士が不思議そうな顔を見せる。

「神機と話した……？」

「うん、確かにリンドウさんを閉じ込めてた瓦礫を吹き飛ばした後やつたかな……自分の事を神機って言つてた生物と話したで」
「だからあの時繋がつてやがつたのか……」

ソーマは呟いた、心当たりがあるようだ。

それを見て、博士は非常に楽しそうに笑みを浮かべながら思案して

いる。

「実際に面白い現象だね、今から検証する——」「やめろ」

ソーマはピシャリと言い放つて博士を止めた。

「まあそれもそうだね、エレナ君が本調子に戻してから検証をするとしよう」

「あー、はい」

「所で、体に不調はあるかい？」

見た目の割に何事も無かつたかの様に動く手脚、体は大丈夫だけどやはりめまいがまだ収まらない事だけ伝えてみた。

「多量に出血した後だからね……脳にまだ十分な血液が回っていないんだろう」「手脚は問題なく動くんやけどねー」

「それが不思議でしようがないよ、一体どんな構造をしているのか見てみたい物だね」

そこまで言つて、ソーマに睨まれてやらないと手を振る博士。

まあ、あたし自身も知りたいけど……

「しかし、見た目の問題をどうしようか……」「……うーん……」

このまま衆目に晒せば不必要に恐れさせるけど隠したままとはいかない。

長い手袋も考えたけど、肌の表面がデコボコしているせいですぐに

バレるだろう。

「取り敢えず案が浮かぶまで包帯で隠すことにして、怪我をしていた事には違いないからね」

「うん、しゃーないよね」

「再び手脚に巻かれていく包帯、ちょっと窮屈だけど……まあ我慢しよう。」

博士は器用に手早く指先にまで包帯を巻き、ふうと汗を拭つた。

「兎に角安静にしていれば大丈夫さ、ご飯もしつかり食べて英気を養つておこうね」

「はーい」

先程のこともある、無理して倒れて迷惑を掛けないように大人しくしていよう。

博士は研究室に戻つていった。

「……あーなんだ、そのー……」

「?」

リンンドウさんが3枚の紙きれを差し出す。

これは……高額嗜好品チケット?

「こんな物で礼だとは口が裂けても言えないが、今俺に出来る感謝の気持ちだ、受け取ってくれ」

「い、いや悪いですよ……」

「いいからいいから、な?」

そうしてベッドに置かれる嗜好品チケット。
無くしちゃいけない、仕舞つておかないと。

「んじゃ、俺は仕事に向かうかねーっと」

「あ、気を付けて下さいね」

「おう、また終わつたら顔を見せるさ」

そうしてリンドウさんは病室の扉を開ける――

「なんだ、居たのか」

「うおつ、姉上殿……」

「上官と言え、上官と」

ペシツ、と書類でリンドウさんの頭を叩いて入ってきたのはツバキさんだつた。

リンドウさんはそのまま出て行つた。

「ソーマ、回収された神機の整備が終わつたからお前も任務に行つてこい」

「……ああ」

そうしてソーマも病室を出て行く。

扉を開けたところで振り返つたので、手を振つて見送ると少し笑顔を見せてから出て行つた。

ソーマ、ちゃんと笑えたんだね。

「さて……」

「少しまだ体調が悪いので、ベッドに座つたままで宜しいですか？」

「ああ、構わない」

ツバキさんは置いてあつたパイプ椅子に座つて資料を何度も捲る。

「本部の方から辞令が届いた」

「へ？」

「読み上げるぞ、よく聞いておけ」

「辞令？ 辞令って確かに役職が変わるときに出るものではなかつたか？」

「『エレナ・コルテーゼ』上官の命に背き身勝手な行動を行つた事による命令違反につき、懲罰が必要と判断する」

「え？」

「懲罰……懲罰！」

「打ち首とか牛裂きとか……？」

「いつの時代の人間だお前は……まだ途中だ」

呆れたようにツバキさんは資料を捲る。

「但し、その行動は上官『雨宮リンドウ』を救うに至り部隊全員の帰還を完了した為免除、その上での曹長への昇進を言い渡すものとする。追伸、命令違反に関しては上官から厳しく指導しておく事。以上」「……??」

あれ？ 何かおかしな言葉を聞いた気がする。

「つまり、懲罰は無しで曹長への昇進だ」

「えつ、えーつ、ええ？」

頭が、思考が追い付かない。

「但し上官として命令違反は看過できない、勝手な行動は部隊全員の命を危険にさらす事になる。十分に反省するようにな」

「うつ…………すいません……」

がつくりと頭を下げて項垂れる。

確かにあれでリンドウさんを助けられなかつたらと思うと……部隊の壊滅もあり得ただろう。

「…………こまでは上官としての指導だ」

「…………え？」

突如、ツバキさんがわたしを抱き締める。

何が起こっているのか理解出来ず、目をパチクリさせて硬直する。「ありがとう…………本当にありがとうございます…………！」「リンドウを助けてくれて…………！」

じわりと手術衣を通して肩が濡れるのを感じる。

「…………すまない…………リンドウを助けるためにこんな大怪我をさせてしまつた…………！」

「…………」

包帯が巻かれた腕に触れるツバキさん。

あたしは、右手をツバキさんの背中に置き——

「大丈夫ですツバキさん、あたしは後悔していません…………もしまだ危険に陥つても、何度も、何度でも、何十回でも同じ選択をしてみせますよ」

ツバキさんは何も言わなかつた。

決して声を出さず、肩を振るわせるツバキさんの背中を撫でながら時間が過ぎていく。

「……すまないな」

「いえ、いいんです」

数分後、何も無かつた様にツバキさんはあたしの前に立っていた。あたしは微笑みながらツバキさんを見る。

「約束してくれ、お前は大事な恩人だ。決して無茶だけはしないで欲しい」

「え？ それではさつきあたしの言つた事が矛盾してしまいますが……」

「……そうだな、これは私の我が儘だ」

ツバキさんは病室の扉へと歩いていく。

「だが忘れないで欲しい、お前に何かがあれば悲しむ人が居ることを……お前は1人じや無い」

「……分かりました」

ツバキさんは微笑みを見せ、病室を出て行つた。

それを見届けてベッドに寝転がる……少しばかり仮眠を取つておこうかな。

馬車馬なんてもんじゃない

その後も病室にはたくさん的人が訪れた。

「嘘だよね……僕はあの時確かに見たのに……」

「あは、あははは……内緒にしといて？」

まずは家族と一緒に来たエリック、あたしの包帯が巻かれた手脚を見て驚愕している。

エリナが前に出てきてお辞儀をした。

「お姉ちゃんありがとう、お兄ちゃんを助けてくれた時のお礼を忘れていてごめんなさい」

「ああ、どうもご丁寧に」

「その包帯は……相当な大怪我をされた様だ」

エリックの父は包帯を見て言つた。

「はい……傷はもう大丈夫ですが、ちょっと傷跡が残つてしまふみたいで……」

「……成程、息子やお世話になつてているリンドウ君を救つてくれたと
いうお礼も兼ねて、どうにか出来ないか考えてみましょう」

「そうだね、僕達で何か考えておこう」

そうしてエリックの家族は去つていった。

貴族らしく、やっぱり礼儀正しい人達だなあ。

「はい、お昼ご飯だよ」

「げ」

「げ、とは何よ」

続いて入ってきたのはリツカだ。

正直、ちょっと会うのが恐かつた人だ。

「だつて、神機ボロボロだつたでしょ？」
「え？」

リツカは少し思案し、ポンッと手を叩いた。

「成る程、怒られると思つたんだね」

「……え？ 怒らないの？」

「怒つてほしいの？」

ニコニコと笑顔を見せて言つている……正直、その顔で言われると逆に恐いですリツカ様。

「怒るわけないでしょ、ちゃんとリンドウさんを助ける為に壊したんだから」
「……よかつたあああ……」

「えつと……そんなに私に怒られるの恐い？」

「なんかね、いつか解剖されるんじやあないかと本能が訴え掛けてく
んのよ」

「あつはははは、そんなこと多分しないよ
「多分!? 今多分つて言いよつたな!」

相変わらずというか、リツカは少し恐かつた。

「あら、もうお目覚めかしら」

「あつ、ジーナさん」

「無事だつたか」

「ブレンダンさんまで……」

次はとても珍しい2人組の組み合わせだつた。

「キヤンディよ、口に合えばいいのだけど」

「カットフルーツだ、缶詰の物を持ってきたけだが勘弁してくれるか？」

「そんなに気を遣わなくともええのに……」

持つててくれたお見舞いの品はどれも色取り取りで、とつても美味しそうだ。

「お前には助けられっぱなしだからな、せめてこれくらいはさせて欲しい」

「ええ、しかも昇進したつて聞いたわ。ささやかなお祝いと思つておいたらいいのよ」

「あらら、聞いてたんや」

「お前の活躍を見れば妥当だ、兎に角今は怪我を治すことに専念しておくといい」

これからまだ任務があるので、2人のお見舞いはすぐに終わつてしまつた。

カットフルーツを1つ食べてみると、シロップ漬けでとっても甘かつた。

「具合はどうかな？」

「あ、博士」

夕方頃、博士がやつてきた。
更に後ろには他の人も居る。

「……本当になんともない……」

「エレナ……大丈夫か？」

入ってきたのはサクヤさんとコータだつた。

「大丈夫やよ、もうめまいもだいぶ収まつたし、怪我も治つたからね
「そつか……もう動けるのか？」

「うん、明日には任務に行けるんやないかな？」

「僕はもう少し休養を取つて貰いたいんだけど……まあ本人が大丈夫
なら構わないよ」

よかつた、博士から許可も貰つたし、明日からまた任務に戻ろう。

「……あまり無茶はしないでね？神機使いは凄い人程早死するの、特
に貴女みたいな人はね……」

「……はい、分かりました」

悲しそうな表情で語り掛けるサクヤさん。

「でも……どういう事？ソーマが言つていた事と貴女の状態は矛盾し

ているわ……」

「あ、それは——」

サクヤさんの後ろで博士が凄い勢いで首を振る。
成る程、つまり……

「——只の見間違いやないですか？ 実際怪我をしていましたみたいですし、輸血するほど出血も酷かつたようなので」「うーん、そうかしら……？」

博士がほつと一息ついている……やはり、知らない人には隠してお
く方針で行くんだね。
と、また扉が開いた。

「おう……」

「失礼します……」

冷や汗をかいたりンドウさんとヒバリさんが書類を持つて入つて
きた。

なんだか、焦っている様子だけど……

「なあエレナ」

「は……え？」

リンドウさんに両肩を掴まれる。

少し焦った様子だけど、あたしの目をしっかりと見つめて口を開いた。

「なあ、体は本当に大丈夫か？ 辛いと思った事は無いか？ 僕で良けれ
ば相談に乗るぞ？」

「ちょっとリンドウ、どうしたのよ！」

「話は後で聞く、エレナと話させてくれ」「えつと……どういう事です？」

ヒバリさんがサクヤさんに書類を渡し、コーダは後ろから書類を覗き込む。

そしてヒバリさんが喋り出した。

「エレナさんですが……リンドウさんと話していくとんでもない事に気が付いたんです」

「…………」

サクヤさんが書類に目を通していく度にすっごく険しい表情になっていく。

あたし、何かやらかした……？

「エレナさんは配属3日目から任務を1日に最低5回、最高16回こなしています……疲れた様子も見せず、全ての任務受注は私が担当していた訳ではありませんでしたのでこの時までこの異常に気が付きませんでした」

「16回!? 1日掛けても終わらないじやん!」

「しかも半分は単独での任務で行っています……討伐したアラガミは既に1,500体を突破し、ヘリの燃料が勿体ないからと作戦エリア内で新たに任務を受注することも珍しくありませんでした」

「どんな数だよ……想像も出来ねえよ……」

コーダがめっちゃ驚いてる、1日の任務数なんて気にしていた事は無かつたけど……

今度はサクヤさんがこっちを向いた。

「ねえエレナ、極東支部に配属されてからどれくらい経ったのかしら?」

「えつと……3ヶ月位ですかね？」

「……じゃあもうひとつ……最後に休暇を取ったのはいつかしら？」

「え？ 休暇？ 取つてないですよ？」

瞬間、部屋の温度が急激に下がった様に感じた。

……あれ、もしかしてマズかつた……？

「そうなんです、1番の異常はエレナさんが配属された日から1日も休暇を取らず、毎日朝から夜まで任務をこなし続けていた事なんです……」

「…………」

「えつと……アカンかつた？」

なんとも微妙な空気が漂う。

別に毎日充実していたし、疲れも無かつたから任務やり続けたけど

……

「流石の俺もビビつたぞ……なあエレナ、何故何も俺に言わなかつた？ そんなハードワークで今の今まで体を壊さなかつたのは奇跡だぞ」「その……別に疲れてなかつたですし、取り敢えずやれるだけやつておこうかと思つて……」

そう言い終えた途端、リンドウさんは踵を返してあたし以外を集めて病室を出た。

置いてけぼりを食らい、ポカンと口を開けたまま数分経過後、リンドウさん達は戻ってきた。

「休暇を取ろうぜエレナ、1週間位ぱーっと遊んで過ごしてみたくなあか？」

「え、いや別に任務行きたいですし……」

「くそつ、教育係は何をしていたんだ！」

「リンドウ、貴方でしょう」

サクヤさんが目を細めてリンドウさんを見る。
リンドウさんはリンドウさんでパニックになつていてるようで、言つ
ている事がちょっとおかしい。

「なあエレナ、俺だつて最低でも週に1度は休暇取つてるんだぜ？別
に休んでもいいじやん」
「コウタ君の言う通りだ、働き過ぎ等という次元を遙かに超えている
よ」

博士やコーネタまでそんなことを言う。

うーん……アラガミの危機がある限り休みたくないんだけどなあ
……

「不服そだね……よしヒバリ君、エレナ君は任務を1週間は受けら
れない様にしてくれるかい？」
「ちよつと！」

あたしは叫んで異議を申し立てるが、ヒバリさんは逃げるようにして
病室から去る。

やられた、こんな強硬手段を取るとは……

「しかし、3ヶ月もの間本当に誰も気付かなかつたのかい？」

「ああ、一緒に任務をしたりしているが流石にいつでも監視している
訳じやないからな」
「私も……」

「同じく」

まあ防衛班のお手伝いもやつてたし、そもそも単独出撃もいっぱい
やつていたからね。

「兎も角命令だ、休め」

「任務行きたい……駄目ですか……？」

「上目遣いしても駄目だ、休め」

むーっと顔を膨らませてリンドウさんに顔で抗議するが決定は覆らない。

ここまでされてはどうしようも無い、部屋にでも引き籠もるかな……

「どうかエレナ、それだけ任務に行つてるなら報酬金が凄いことになつてないか？」

「うーん数えた事は無いなあ、財布に入りきらんくて部屋に置きっぱなしやけど」

「そういうやエレナの部屋に行つたことないな……行つてみてもいいか？」

「ええよ、着替えるから外で待つとつてー」

「ふむ、それなら僕は帰つて研究の続きを進めておくよ」

ゾロゾロと出て行く男三人。

何故かサクヤさんは残っている。

「あの……流石にサクヤさんでも恥ずかしいんですけど……」

「1人で着替えられる？ 大丈夫？」

「大丈夫ですよ、もう痛みはありませんし」

そう言うとサクヤさんも出て行つた。

ベッドの隣には綺麗に折り畳まれたフエンリルの赤い制服が置いてある、恐らく新品だ。

手早く着替えて包帯の上にソックスを被せ、体調は大丈夫な事を確認し病室を後にする。

「いらっしゃい、なんも無いけど入つて入つて」

「お邪魔しま……!?」

「何……この部屋……!?」

サクヤさんとコータが凍りつく。

あたしの部屋は本当に何も置いて無く、折り畳まれたフエンリル制服が数着に鞄が1つ、そして机に置かれたフエンリルクレジットの紙幣で出来た山があるだけだ。

「今までこそ何も思わなくなつたが、あの討伐数の事を考えるとこの部屋も納得出来るな」

「まあシャワー浴びて寝ているだけですし」「いくらになるんだ、コレ……!?」

「ほしい？」

「い、いや遠慮しとく……」

コータはおつかなびつくり机の紙幣を眺める。

サクヤさんは部屋の中をキヨロキヨロと見渡しながら他に何か無いのか探している様だ。

「探してもなーんにも出てこないですよー」「本当にこんな部屋で生活しているの……!?」

「ほぼ1日の任務が終わってシャワー浴びて寝るだけですからね、他は何も要りませんし」「…………」

サクヤさんの開いた口が塞がらない。
と、何かに気がついた様だ。

「この匂い……貴女、まさか煙草吸ってる?」

「ああ、リンドウさんが来た時に吸っているのでその匂いが残つて
るんでしようね」

「そういう夜の任務を一緒にやつてた時はいつも来てたからな、結構
吸つて……」

突如、サクヤさんから殺氣が吹き出す。

……え? なんで?

「『夜の任務』?」

「どうした?」

「『一緒にやつた』?」

「……は?」

「『いつも來てた』?」

「……オイまさか、とんでもない勘違いを——」

何かを言い終わる前に、サクヤさんはリンドウさんの耳を引っ掴んだ。

「言い訳は部屋で聞きます、じっくりとね……」

「止めろサクヤッ! いで、いでででつ! エレナ! コウタ! 助けてくー

ー

ガシャン、と部屋の扉は閉じた。

コーダと真顔になりながら閉じた扉を見る。

「なあ、なんでサクヤさん怒つてんだ?」

「分かんない」

「……取り敢えず、今日は帰るわ」

「うん……またね」

コーダも扉の向こうにサクヤさん達が居なくなつた事を確認して
出て行つた。

うーん……よく分かんなかつたけどシャワーを浴びて寝よう、それ
が1番良い気がする。

やる気の無い休息

「ヒバ」

「駄目です」

「まだなんも言つてないやん！」

次の日、あたしはミツショーンカウンターをバンツと叩いて怒つていた。

横暴だ、働く権利を返せ！

「休みたいと言う人は山ほど居ましたが、流石に働きたいという人は初めて見ました……」

「いやいや大げさな……」

「本氣で言つてますか？」

本氣も本氣、大マジである。

部屋に居たつて何にも無いし、どうやつて過ごせば良いのか……

「逆に、任務以外で何か仕事とか無いん？」

「何処までも働く気ですか……やるべき事ならいくつかあると思いますよ」

「やるべき事？」

首を傾げてみるが、イマイチ浮かばない。

「外部居住区を見て回つたり、神機整備の進捗確認とか、それとアリサさんの様子を見たりとか」

「……え？ アリサさんどうかしたの？」

「病室に居るはずですが……誰にも聞いていなかつたんですか？」

その声を聞いて、エレベーターに滑り込んだ。

聞いていない、アリサさんが病室に運ばれていたなんて知らなかつた。

「いやあ、いやあ！離してよ！」

「…………」

アリサさんの声は廊下にまで響いていた。

中はとてもドタバタしている様で、入室するのを躊躇つてしまう。

「なんだ、お前か

「え？」

振り返るとツバキさんが立っていた。

「一昨日の任務後からこの調子でな、薬が切れては暴れて、また投与されて眠るの繰り返しだ……暫くは入らない方がいいぞ」

「怪我は……大丈夫なんですか？」

「ああ、擦り傷すら負ってはいない。お前以外に負傷者は居なかつたよ」「よかつたあ……」

大きく息を吐き出して安堵する。

でも、この状態では話すことは出来ないな……

「それよりもお前の怪我は大丈夫なのか？ある程度はペイラー博士から聞いてはいるが」

「ええ、もう任務にも……任務行きたいな……」

「ど、どうした？」

昨日と今日の出来事をツバキさんに説明すると、これまた難しそうな顔をする。

「上官としては喜ばしい事だが……」

「ですよね、そうですよね？」

「いや駄目だ、他の奴等の言う通り休むべきだ」

がつくりと肩を落とす。

ツバキさんに許可が貰えれば行けるかもと思つたが、現実は中々どうして厳しい。

「……神機見てきます……」

「そう気を落とすな、お前は何も悪い事をしている訳じやあ無いんだから」

はい、と小さく呟いてエレベーターに乗る。

1週間……長いなあ……

「あれ？ いらっしゃい！」
「やつほー」

そのままの足で神機の整備室に来てみると、リツカが出迎えてくれた。

手招きするリツカの所に向かつてみると、なんとも残念な姿になつたあたしの神機があつた。

「いやー最高記録だね、ハンマー自体に亀裂が入るわ銃口は高熱で融解してゐるわ……おまけに装甲も半分無くなつてゐるし」

「我ながらやり過ぎやよなあ……」

「ホント、逆にどうやつたらこここまでなるのか教えて欲しい位だよ」

「すんまへん」

おでこをペツタリと床に擦り付けて土下座。しかしリツカは大笑いする。

「言つたでしょ怒つてないつて、幸い集めてきてくれた素材も山ほどあるから思い切つて大幅な改修しちゃうからね」

「お願ひ……あ、ちょっと神機持つても良い?」

「え? 別に良いけど……」

ボロボロになつた神機を持ち上げる。

結局、神機がこんな状態では出撃は無理だつただろう……整備の為の休みとでも思つておこう。

試しに目を閉じて集中し頭の中を真っ白にしてみるが、何も起ららない。

「やつぱ駄目かあ……」

「何してるの?」

「神機と会話が出来たからまたやつてみたかったんやけど……出来ん

なあ」

「神機と会話……?」

不思議そうに神機を見つめるリツカ。

「神機は言つてしまえば人工のアラガミだから、意志を持つていても不思議では無いよ。流石に私も会話なんてしたことは無いけどね」「へえ……珍しい体験やつたんやな」「で、で、どんな感じだつたの？」

リツカは目を輝かせていた。

取り敢えず覚えている事を話そう。

「まず人の形をしてて」

「うんうん」

「全身真っ赤つかで」

「うん……？」

「身長は3m位で」

「うん??」

「悪魔っぽかつた」

「正真正銘の悪魔だよね？」

実際に会つたのがあたししか居ない為、証明出来る物が何も無い。
それはおいで
閑話休題――

「それじゃ、神機を改修する上で何かやつて欲しい事とかあるかな？
ここを重点的にやつて欲しいとか、ある程度の要望なら受けられる
よ」

「ふーむ」

正直リツカの整備には満足しているので要望らしい物は何も無い、
口元に手を持つてきて考える。

「……色を赤くするとか？」

「おつけー、要望は無いって事ね?」

「無視かいな」

冗談冗談とクスクス笑うリツカ。

「カラーリングだけ変更して後は予定通りの改修をしておくよ、暫く掛かるからねー」

「お願ひなー」

リツカは隣の部屋に入つてガサゴソし始めた、恐らく素材を取りに行つたのだろう。

あたしは部屋を出る前に、神機に手を置いた。

「ありがとね、『ロツソ』」

今度は外出してみた。

うーん、ヘリからは何度も見ていたけど実際に立つてみると全然違うものだと実感する。

少なくとも、イタリア支部の居住区よりも人が明らかに多く活気がある。

「よおゴツドイーターの嬢ちゃん、新入りか?」

「んー、3ヶ月位前に入つたから新入りかな?」

「それなりに居たんだな、頑張つてくれよ!」

知らない人にも気さくに声を掛けられる。

フェンリルに良いイメージを持っている人は少ないだろうと思つていたけど、杞憂だつたかな。

「いらっしゃい！新鮮な野菜入つてるよ！」

「クロワッサンが焼き上がりました！どうぞ見ていつて下さいね！」

凄い、食料品のマーケットまである……イタリアでは支給品の缶詰のみでしか食料品は手に入らなかつたのに、進歩しているんだなあ。

「おい、あれエレナじやね？」

「ほんとだ、珍しいね」

ゴッディーテーの人も居る、休暇を使ってこういう所で休息を取つてゐるのか。

何もしないのも不自然なので会釈しておく。

「あら？ ゴッディーテーの方ね？」

「あ、はい。見ていつても良いですか？」

「どうぞどうぞ、ゴッディーテーの人は結構お金を使ってくれるから助かるのよお」

成程、イタリア支部に比べると極東支部は圧倒的にゴッディーテーの数が多いからこういうお店が栄えるのか……

パン屋さんに入つてみると、出来たてのパンが良い香りをさせて食欲を刺激する。そういうえば、今日は朝食を摂つていなかつたな。

「クロワッサン2つ下さいなー」

「はーい、すぐ食べる？」

「うん、朝ごはんにします」

紙に包まれたクロワッサンが2つ、食べやすい様に工夫されて渡された。

代金を払い、店を出る。

「有難う御座いました！また来てね！」

「ありがとー」

パン屋のお姉さんは屈んで手を振っている。
あたし、そんなにちっちゃいかな……？

出来たてのクロワッサンを囁りながらトコトコと歩く」と数分、今度は居住区に入った。

流石に人通りは少ないが、それでも話し声は結構聞こえてくる。

「あれ？お姉ちゃんだあれ？」
「ん？」

後ろから声を掛けられて振り向いてみると、小さな男の子が居た。

「やあ、お姉さんはゴツドイーターやよー」「ゴツどいーたー？」

まだまだ小さな子供だ、ゴツドイーターの事も知らないのだろう。

「うーん、なんて説明すれば……」

「お姉ちゃん何持つてるの?」

「ああこれ? クロワッサンやけど……」

元々あまり大きくないクロワッサンだ、この子にあげてもいいだろう。

「食べてみる?」

「え? それ食べられるの?」

「うん、パリパリして美味しいで」

男の子はクロワッサンに齧りつく、そして咀嚼した後目を輝かせた。

「おいしー!?

「でしょ?」

中々気持ちの良い食べっぷりだ、あげた甲斐があつたというものである。

「親は居るのかな?」

「うん! お母さんは家に居るしお父さんはあつちで新しい家を建ててるよ!」

「そつか」

親が居るというのはいい事だ、男の子の頭を撫でながら言う。

「お父さんもお母さんも、大事にしてね」

「うん!」

男の子の笑顔に釣られてこちらも微笑む。と、女性が走ってきた。

「ケンジ！また人に迷惑を掛け……」

「ああ大丈夫ですよ、元気な子ですね」

恐らくこの子の母親だ、少し髪が乱れているがうつすらと化粧をしている。

「あら？ 貴女はゴッドイーター？」

「はい、とはいっても今は任務が受けられないでの休暇中ですが」

「そうだったの……若いのに頑張っているのね」

「ウフフ、皆を守るのが夢でしたから」

「おかーさん！ くろわっさんっていう食べ物貰ったよ！ とっても美味しかった！」

「もう、この子つたら……」

困ったように、だけど幸せそうに苦笑いする。

ああ、あたしは素晴らしい物を守ってきたんだ。

「それでは、あたしはこれで」

「この子の相手をしてくれて有難うね」

「またね！ ごつどいーたーのお姉ちゃん！」

ブンブンと手を振る男の子に手を振つて返す。

幸せな気持ちと誇りを胸いっぱいに、あたしは居住区を離れていった。

「おーい、釘を追加で持つてきてくれー！」

「トタンが足りないな……誰か補充してきてくれないかー！」

数分間歩くと、今度は建設現場にやつてきた。

男の人達が忙しそうに家を建てている。

と……

「あた、あたたた……」

男性の1人が材木の近くでうずくまっているのを見つけ、思わず駆け寄った。

「大丈夫ですか!?」

「こ、腰が……」

「ん?!どうしたおやつさん!!」

他の男性が何人も駆け寄ってくる。

「多分、急性腰痛症かど……」

「あーあ、材木運びなんて若い衆にやらせれば良かつたのに無茶するから……」

「うるさいわい！あた、あたたた……」

「おーい、誰か担架を持ってきてくれ！」

おじさんは担架で運ばれていった。

人数が減り、更に忙しくなつていく建設現場。

「次の材木持つてきてくれー！」

「無理だ、手が離せん！」

「こつちもだ！」

これは相当逼迫している様だ……ならば――

「これでいいですかー!?

「うお!」

目の前に材木を持つてくる。

流石に、困っている人を見過ごす事は出来ない。

「よく持てたな嬢ちゃん、助かつたぜ!」

「力仕事があつたらあたしに言つてください、手伝いますのでー!」

そこから数時間、あたしは建設を手伝い続けた。

木材運びや鉄筋運び、セメント混ぜやらコールタールの詰まつたドラム缶運び等を手伝い続け、驚異的な速度で簡易的な家屋が完成した。

後に建設業者達の間で、『怪力ロリ天使』というとつても微妙な呼称で呼ばれる事となつた……

無手、されど淀みなく

「るんるんるんるーん♪」

「40kgの材木を6つ纏めて運ぶ……だと……!?」

数日後、あたしはまだ建設現場で働いていた。
居住区は未だに家屋の数が足りていないうらしく、まだまだ人手不足
だった。

「これ、鉋掛け終わってる材木ですー」

「助かるよ、いつそこのままずつと働いてくれればいいのになあ」

「嬉しいけど、本業はゴッディーターですので」

あれから家屋は10軒近く完成し、現場の人達の顔にも余裕が生ま
れてきている。

あたしも土木作業に慣れてきて、このノウハウがあれば簡素な野営
地の設営も出来るかも……とか思つていたりした。

その矢先――

「アラガミだ！アラガミが侵入したぞ！」

「何い!?」

そう遠くない所から叫び声が聞こえた。
それを聞いて、あたしは駆けだした。

「おい口リ！武器無しでどうする!?」

「どうにかする!!」

そう、今のあたしには神機が無い。

だからといって、指を咥えて見ているワケにはいかないと必死に足を動かした。

あとその呼称は恥ずかしいのでやめて欲しい。

「やめろ！やめろおおおお!!」

程なくして、白いコンゴウを見つける。

局地型の墮天種、この辺りでは中々珍しい個体の為にアラガミ防壁を突破出来たのだろう。

大口を開け、男性を捕食しようとしている――

「こっちを見ろおおおっ!!」

大声を張り上げて飛び掛かる。

こっちを向いたコンゴウの左の頬に思いきり蹴りをお見舞いする
と、少し浮き上がった後転がつてうつ伏せに倒れ込んだ。

通信機を取り出して叫ぶ。

「ヒバリさん！居住区でコンゴウ墮天種と遭遇！誰でもええから応援に寄越して！」

『エレナさん!? 神機を持つてない筈では!?』

「時間くらいは稼げる！急いで！」

通信を切り、後ろを振り返ると男性がへたり込んでいるのが見える。

だが立ち上がらない、腰が抜けている。

「早く逃げて！」

起き上がりそうなコンゴウの顔を蹴り上げ、浮かせた所で腹に拳をめり込ませる。

怯ませる事は出来るが、やはり神機でないとアラガミにダメージはない様だ。

「うつ、マズい！」

コンゴウが真空波を溜めている。

簡単に避けることは出来るが、後ろに居る男性に当たってしまう。

咄嗟に前にダツシユし、腕を前でクロスさせる。

「うあああああ!!!」

飛んでくる真空波に正面から突っ込む。

発射された高圧の空気は肌を打ち、音圧で鼓膜がおかしくなりそうだ。

しかし走る勢いは止めず、腰に付けたポーチからスタングレネードを取り出す。

「くらえつ！」

ピンを抜き、地面を蹴つてスタングレネードを直接コンゴウの顔面に投げつける。

眩い閃光にコンゴウが怯み、背後に着地して尻尾を掴んで力を込む。

「どおりあああああ!!!」

何も無い広場に向かつてコンゴウを放り投げる。
数回バウンドし、ゴロゴロと転がっていく。

「だ、大丈夫か嬢ちゃん!?」

「あたしの事は良いから逃げて！早く!!」

男性は立てるようになつたらしく、よろよろと建物の中へと入つていつた。

あたしの服は裂けており、少し赤くなつたお腹が見える……真空波で擦り傷を負つたか。

盾にしていた左腕の包帯も擦り切れており、赤黒い肌が見えてしまつている。

「いくでええええっ！」

構わず、一直線に突撃する。

対するコンゴウも体制を立て直し、拳を高く上げて振りかぶつている。

「上等——！」

速度は緩めない、向こうの助走をつけたパンチに右手の拳を思い切りぶつける。

右腕に衝撃——舐めるな、怯むもんか。

メキメキつと音を立ててコンゴウの腕にヒビが入り始める。

「オラアッ!!」

右腕を振り抜き、コンゴウの右腕が粉々になる。

勢い余つて躊躇、コケてしまつた。

これはマズい、反撃を貰う——

直後、向けて光線が飛んだのが見えてコンゴウが顔を抑えて呻きだした。

『おまたせ』
「……ジーナさん!?」

3発、4発と次々に撃ち込まれる狙撃弾。

『後は任せて下がつて!』
「サクヤさんまで!』

前につんのめりながらもなんとか離れる。
更に誰かが走つてくる足音も聞こえてきた。

「はああっ!!」

高速で踏み込んできて、コンゴウを切り刻んだのはタツミさんだつた。

後は任せて、邪魔にならない様に路地へ隠れた。

「ふう……」

現場近くに居てよかつた、何度か突破されているらしいが今回は被害も出ずに済んだ筈だ。

右手がジンジンする、流石にあのパンチは無茶が過ぎただろうか

左腕の包帯を片手でなんとか巻き直していると、左足の包帯の足裏

部分も切れている事に気付く。

包帯で隠すには耐久力が足りない、このままでは戦闘中に見られてしまう可能性が高すぎる……

「よお、大丈夫か？」

「あ、終わつた？」

包帯を巻き直し終わつて回復錠を噛み砕いていた所でタツミさんから声を掛けられた。

顔を壁から出してみると、広場にコンゴウの死体が横たわっている。

「速かつたね、あたしほぼダメージを与えてなかつたのに」「いやいや、片腕が無かつたからタコ殴り状態だつたぞ……一体何をやつたんだ」

サクヤさんとジーナさんも歩いてきた。

「もう！凄く心配したのよ!?」

「神機無しで戦うなんて、無茶し過ぎよ」

「ゞ、ごめんなさい……」

服はボロボロ、包帯も継ぎ接ぎ状態のあたしは大人しく叱責を受けた。

「待て、その子を叱らないでやつてくれ！」

「……貴方は？」

男性が走り寄ってきた。

さつきあたしが逃がした男性だ。

「この子が居なけりや俺だけじやなくもつと沢山の人間が死んでいた！頼む、この通り俺に免じて許してやってくれ！」

「ちよ、ちよつと顔を上げて下さい！あたしが無茶をしたせいですか
ら……」

膝をついて頭を下げる男性をなだめる、どうやら怪我はなさそ
うだ。

そのやりとりを見て、サクヤさんは溜息を吐く。

「そうね……よくやつたわ、エレナ」

「今回は被害も無かつたものね」

「ああ、ありがとうな」

わっしわっしと頭を撫でられる。

元々撥ねまくつてる髪がさらに滅茶苦茶になる。

「うおおお！よくやつたぞ口リ！」

「お前は俺達の天使だ！怪力天使だ!!」

「うわっ、うわわわわ」

突如現れた建設現場の男性達に囲まれもみくちゃにされる、猛烈に
汗臭い。

まあいいや、嬉しそうだし。

「……って誰や、お尻触った奴!!」

「やべ、逃げろ！」

「あいつ抜け駆けしやがった！」

「取り押さえろ！フクロだ！」

逃げた男を取り押さえると、他の男達がボコスカ殴り始めた。

当然の報いだが、こういう馬鹿みたいな騒ぎは嫌いではないので内心は全然怒つていなかつた。

「で、何か言う事はあるかな？」

「…………」

数分後、あたしは博士に呼ばれて正座していた。

あんな無茶をしたのだ、凄く心配させたし怒つてもいるかもしねない。

「その……助けたくて……」

「それで君が死んだら元も子も無いんだよ？ちゃんと分かっているのかい？」

珍しく怒つてる、めっちゃ怒つてる。

「お、お願ひじまざ……任務禁止だけは……任務禁止の延長だけはゆるじでござい……」

涙をポロポロ流しながら、思わず博士の足にしがみついて懇願した。

嫌だ、もう5日も我慢したのにこれ以上任務禁止が長引いたら耐え

られない。

「……まあ反省はしているし、今回の件は外部居住区の感謝状まで届いているみたいだから大目に見てあげよう。気を付けるようにね?」「ありがとうございます……」

ハンカチを渡され、涙を拭く。

良かつた、罰は受けずに済んだ……

「……今回は僕も考えを改めたよ、君は神機を持っている方がずっと安全だとね」

「…………？」

博士は椅子に座り、あたしに向き直った。

「エレナ君の任務禁止を明日から解除するよ」

「…………え? ええの!?」

「ああ、その方が君は安全だと思うからね」

嬉しきの余り飛び上がり、天井に頭をぶつける。

博士は眼鏡を取つて目頭を押さえ、引き出しの中から粉薬を取つて飲み込んだ。

「この胃痛から早く解放されたい所だつたんだけど、まあ仕方が無いね」

「あたた……ごめんね、博士」

「しようがないよ、君も悪氣があつてやつている訳では無いこと位は分かっているからね」

苦笑いする博士に頭を下げる。

「それともう1つ、重要な話がある」

「え？ まだあるの？」

と話し始めた途端、研究室の扉が開く。

振り向いてみると、第1部隊の面々が皆居た。

「おう、来たぜおっさん」

「やあ、丁度話をしようと思つていた所だつた。適当に座つてくれるかな？」

「あれ、エレナも居るじゃん」

「皆……どうして？」

第1部隊の面々はソファに座る。
博士は咳払いをしてから話し始めた。

「集まつて貰つたのは他でもない、エレナ君の事についてなんだ」

「あたし？」

「そう、先日エレナ君が怪我をしていた時に彼女の体組織を調べて研究をしていたんだ」

あたしも近くのソファに座り込む。

「余りに怪我の治りが早かつた事を不思議に思つて、細胞の自己治癒力を確認していたんだ」

「ふーむ？」

まあ確かに、あたしの手脚が生えてくるのはかなり早かつた。

「培養したり、刺激したりすると色々な事が分かつただけど……」

「君達に言つておかなければならぬ問題が出たんだ」

「…………」

まだ……あたしの体、何があるの？

「確かに細胞の自己治癒力は異常だ……但し、元の状態以上には細胞分裂を起こさないんだ」

「なん……ですって……!?」

サクヤさんが驚く声を出した。

他の人も……コーダ以外は驚いた顔をしている。

「すんませーん、よく分からなかつたんでもう少し分かり易く説明して下さーい」

「そうだね……单刀直入に言おうか」

あたしは全て察してしまつた。

細胞分裂が行われない、それは新しい細胞が生まれないという事

……つまり――

「彼女はもう成長しない、という事なんだ」

少女が纏うもの

あれから数分後、あたしは放心状態のまま自室のベッドに座つていた。

あの後も博士は話を続けていたけど、全く頭に入つてこなかつた

……

「…………」

包帯を外した左手をじつと見つめる。

もう成長せず、アラガミになつてしまつた体——あたしはもはや、人間ではない。

ロツソに治して貰つた体の代償は、決して小さな物ではなかつた。

「おい

「…………え？」

目の前にはいつの間にかソーマが居た。

いつ入つてきたのか、全然気が付かなかつた。

「アカンよソーマ近付いちゃ……あたしの体、気持ち悪いでしょ……？」

「…………ハア……」

ソーマは溜息をつき、近付いてきた。

「知らんな、お前はお前だ」

「…………」

あたしは俯き、両手を握り締める。

体を震わせ、喉から絞り出す様に声を出す。

「なんで……？ソーマはなんであたしなんかの為に優しくしてくれるのは……？」

出てきたのは殆ど涙声だつた。

弱音を吐かないよう歯を食いしばり、顔を上げてソーマの目を見つめる。

「……お前は、俺と同じだからだ」

「……おなじ？」

ソーマはあたしの隣に座つた。

「俺は生まれついての化け物だ……それも実験によつて生まれた、な」「実験……？」

「そのフザけた実験でP73……特殊な偏食因子を埋め込まれた俺が生まれ、母は死んでしまつた」

これには流石に驚いた、あたしと違つてソーマは産まれた時から体が普通ではなかつた。

そしてそれ以上に、ソーマが自分の事を語るとは思つてもいなかつたのだ。

「俺は偏食因子を生成しているから腕輪も本当は必要が無い、正真正銘の化け物だ」

「そんな事、ない……ソーマは優しい人やよ！」

「……優しい、か」

ソーマは鼻を鳴らして笑つた。

「そう思うならお前の方が人らしい。見た目がなんだ、成長しないからどうした、他の奴等の為に身を粉にして助け回っているお前は人間じやないと本当に言えるのか？」

「あ——」

左手を握られる。

暖かい……ソーマの体温が伝わつてくる。

「俺が保証してやる、お前は立派な人間だ」

「——」

涙が頬を伝う、右手で拭うが後から後から止まらずに流れ出てくる。

「ごめん——止まらない、止まんないよお……

「……手の掛かる奴だ」

そつと胸元に頭を抱き寄せられる。
もう、限界だつた。

「うわあああああああああああああんっ!!!」

「……落ち着いたか?」

「……うん……」

ひとしきり大泣きした後、大分落ち着いたあたしはまだソーマに抱き寄せられていた。

とても落ち着く、ソーマには申し訳ないが。

「ねえソーマ、お願ひがあるんやけど……」

「……何だ」

泣き腫らした目をソーマに向ける。

「今日……一緒に寝て欲しい……」

「……」

凄く困った顔をしている……視線を泳がせ、髪を搔きながら思案している。

「ダメ……かな……?」

上目遣いで聞いてみると、ソーマは溜息をついて観念した様に言った。

「寝てる間に押し潰すんじゃねえぞ」

「……ありがと……」

ソーマに抱き寄せられたままベッドに横になる。

「……さつき言つた事、言いふらすなよ」

「うん……」

凄く恥ずかしくてソーマの顔を見れない、大きく包容力のある胸に顔を埋める。

しかし久し振りの人肌はとても心地良く、泣き疲れた事もあり直ぐに意識が落ちていった……

「君達、そこまで行つていたのかい？」

「黙れ」

次の日、早朝から小包を持ったエリックが現れた……勿論、一緒に寝ていた事もバレた。

あたしは顔を真っ赤にしながら、おふとんの中にくるまつっていた。
「エレナの包帯に関して良い案が出たんだ、いやはや苦労したよ……
僕の幅広い人脈をフル活用してようやく完成した至高の逸品だ」

小包を開封するエリックを、おふとんから頭だけを出して見る。中には青くフリフリした洋服が入っている。

「コバルトゴシック、という服だよ」

「……お、お洒落だけど恥ずかしいよ……」

「いいや、この服である必要があるんだ」

小包の中から長い布を取り出すエリック。

服と同じ様に青く、どこかで見た事があるような既視感がある物だ。

「傷を隠す包帯が必要ならそれをファッシュョンとして使えば良い、包帯にはゴシックと相場が決まっているからね……華麗な僕ならではの素晴らしい発想だとは思わないかい？」

「でも、普通の布だと耐久性が……」

「そこは安心して欲しい。この布は伸縮性耐久性通気性どれも高水準でクリアした、博士との共同開発で生まれた完璧な布だ。さあこれを着て共にまた任務へ赴こうじゃないか！」

意気揚々とエリックが部屋から出て行つた。

おふとんから出て凄くフリフリな服と数秒間にらめっこした後、ソーマに話し掛ける。

「取り敢えずシャワー浴びて着替えるから、準備してエントランスで待つとつて」

「ああ」

「……あ、待つて！」

部屋から出て行こうとするソーマを呼び止める。

「……何だ？」

「あ、あの、その……」

「…………？」

思わず呼び止めてしまつたけど言葉が出ない。

なんとか言葉を紡ごうとするが、パニックになつた頭では何ひとつ浮かばない。

「……行くぞ」

「あつ……うん……」

ソーマは出て行つてしまつた。

何でパニックになつてしまつたんだろうと思ひながら顔に手を当てる

てると、とても熱かつた。

そこで、ようやく気がついた。

「そ、うか……あたし……ソーマの事を……」

好きになつちゃつたんだ――

「お、お待たせしました……変じやないかな?」

エントランスにはアリサさんを除いた第1部隊の皆が集合してい

た。

雑談を交わしていた様だが、声を掛けた途端全員の視線があたしに

集中する。

初めて着たレースのいっぱい付いた青いお洋服、左右非対称のスカートに加え、左腕と左脚には青い布を根元から指先まで巻いてある。

「おおー似合つてるよエレナ！可愛いよ！」

「ええ、とても可愛らしいわ」

「当然だ、この僕自ら見繕つた服だからね」

「お前は選んだだけだろうが」

三者三様の反応が返つてくるが、概ね高評価なのでホツと胸を撫で下ろす。

ついソーマから視線を逸らしてしまって、あんな事を考えていた後ではまともに直視が出来ない。

リンクドウさんが近付いてきて右手を差し出す。

「おかえり、エレナ」

「……ただいま！」

強く握手を交わし、とびきりの笑顔を見せる。

皆の為に、これからも頑張らないと！

「可愛いお洋服だね、似合つてるよ！」

「そ、そうかな……？」

任務を受け、リツカのもとへ神機を取りに来た。

ボロボロだつた神機は新品同様に赤と黒でカラーリングされ、鈍く輝いていた。

「お陰で耐久性データも十分、ブーストハンマーの正式採用が決まりよ！」

「おー、やつたね！」

「壊したお陰、なんて言いたくは無いんだけど怪我の功名つて奴だね」

しかし、この時あたし達は知る由もなかつた。

あたしから取れたデータを元にした事で、3年後とある能力に目覚めたブーストハンマー使い達が戦闘不能に陥る事例が発生する事を――

(詳細はB A、奥義・竜巻殺法を参照されだし)

「さあいいっぱいやつけておいで、何度でも私が修理してあげるからさ」

「うん、あんがとな」

神機が更に軽くなつた様に感じる、恐らく総重量は変わつていないのでだろうが、重心のバランスが改善したのであろう。

ロツソが居る限り負けはしない。

全てのアラガミを潰し、人類に平穏と笑顔をもたらすのがあたしの使命。

「さあ、行くでロツソ！」

「…………」

「…………愁傷様」

「早く風呂入らないと風邪を引くぞ、こりやあ」

今日は鉄塔の森でのサリエル討伐任務だつた。

足を結合崩壊させてブーストで一気に距離を詰め頭部を吹つ飛ばした後、勢い余つてフィールド内の水路に着水、大きな水柱が上がつた。

どうにかこうにか這い上がつたが、こここの水は工業廃水も流れ込んでいた様で、全身ずぶ濡れどころか凄くヌルヌルしている。折角の新しいお洋服だったのに……

「あーなんだ、お疲れさん」

「ほら、落ち込む気持ちは分かるけど帰りましょう、お姉さんがお昼作つてあげるからね」

「ありがとうございます」

とぼとぼとリンドウさんとサクヤさんの後ろを付いて歩く。
と、リンドウさんが振り向いた。

「そうだエレナ、スペツツを着用した方がいい。あれだけ飛び回つたらパンツ丸見ぶべらつ!!」

サクヤさんの渾身の平手打ちがクリーンヒット、リンドウさんは地面に転がる。

「もうー追い打ちを掛けてどうするの!?」

「…………あー、わりいわりい」

「…………もうやだああああああつ!!!」

あたしのやり場の無い叫びは、ただつぴろい曇天の空の何処かへ溶けるように消えていった。

1本！

あのリンドウさんが閉じ込められた任務から丁度今日で1週間、ようやくアリサさんの運ばれた病室への入室許可が下りた。

早朝から病室に入ると、寝苦しそうに眠るアリサさん以外には誰も居なかつた。

「アリサさん……」

ベッドの脇にある椅子に腰掛ける。

あたしはあの任務で起こつたことを詳しくは知らない、当事者だったリンドウさんやサクヤさんに聞いても首を横に振るばかりだつた。ふと目をやるとベッドからはみ出した腕が目に止まつたので、戻してあげようと手を伸ばした。

「!？」

その手に触れた瞬間、あたしの視界が一瞬の間だけ真っ白になつた。

それだけではなく黒いヴァジュラやここではない病室、リンドウさんが映し出されたモニターといった光景が脳裏に浮かんでは消えていつた。

「今のは……!？」

咄嗟に離してしまつた自分の手を確認するが、特に変わつた所は見当たらない。

が、アリサさんが動いた事に気が付く。

「アリサさん!？」

「……今の、エレナさんの……?」

アリサさんはそれだけ咳き、再び眠りについた。

今の言葉はもしゃ、あたしに起こつた現象がアリサさんにも起こつたという事だろうか。

「…………」

もう一度触れようかと思い伸ばした手を止める。

アリサさんの負担になつてはいけない、また日を改めてからにしよう。

と、病室を出ようとした所で扉が開いた。

「ここに居たか」

「あ、どうもです」

入ってきたのはリンドウさんだつた。

手招きされて廊下に出ると、端末を取り出して口を開いた。

「ちよいと訳ありの任務があつてな、お前を連れて行こうと思つてい るんだ」

「訳あり……?」

珍しく真剣な顔つきのリンドウさんを見つとも首を捻つて言葉を返す。

「ああ、支部長からの勅令任務だ。勿論許可は取つてあるから心配しなくてもいいぞ」

「支部長から……?まあ行きますけども」

「よし、決まりだ」

そのままの足でエレベーターに乗り込む。

支部長から直接の任務……これはまた、凄い任務を受けさせられるのではなかろうか。

「成る程なあ」

「流石にちつとはビビるかと思つてたが、やっぱお前さんは大物だな」

嘆きの平原、その遠くに今までには無かつた動く山が見える。
初めて見たが間違いない。

「ウロヴォロス……支部長からの任務だというのも領けます。で、何故あたしを?」

「お前さんにテストを受けさせようと思つてな、今までに無い敵だ
……お前ならどうする?」

「ふーむ……」

遠巻きにウロヴォロスを観察する。

不思議な光を発しているのは恐らく頭だ、しかしあのサイズともなれば少し動いただけでもきっと避けられてしまうだろう。

そうなれば触手が本体もろとも潰すか、対峙した事の無い敵ではイマイチ掴み所がない。

「難しいですね……頭を潰せられれば行けると思いますが、何分初めてですのです……」

「初めての規格外のアラガミだ、基本は観察して慎重にやればいいさ」「え？あたしが倒すんです？」

「ああそうだ、別にアラガミ観光きせる為に連れてきた訳じゃあないぞ」

まあそれもそうか、とウロヴォロスを見つめる。

戦いながら弱点を見つけるのが目的という所か。

「勿論ケツ持ちはするが……まあお前ならなんとかなるだろ、見ているからやつてみな」

「はーい、行ってきます！」

崖を蹴つて作戦エリアに飛び込む。

近付けば近付くほど大きい、こんなアラガミが支部を襲つたりした
らひとたまりもないだろう。

オラクルリザーブを行い、ハンマーを構える。

『取り敢えずある程度の距離は取つておけ』

「はーい」

通信でリンドウさんからアドバイスを受ける。

ウロヴォロスはこちらに気が付き、大地を揺るがす咆哮を上げた。
……あれ？キミ、口が無いのに咆哮出来るのはおかしくない？

『レーザーだ！防げ！』

「！」

咄嗟に装甲を構えると、ウロヴォロスから発射された光線が直撃する。

光線は直ぐに収まつたが、辺りの地面が高温で溶けかかっていた
……耐える神機すごい。

『ウロヴォロスの体が光つたら光線の合図だ、覚えておいてくれ』
「成る程なあ」

流石に規格外のアラガミだ、少し様子を見よう。

「ほつ、よつ」

振り回される触手を回避しながら観察はある程度済んだことを確
認する。

本体は結構固いが触手は柔らかい、といつても触手を1本2本千
切つた所で意味は無い。

しかし、1つ案が浮かんだ。

「そろそろ仕掛けまーす」

『おう、いいぞ』

その返答を聞くなりあたしを叩き潰そうとする触手を神機で受け
止める。

装甲でもなくハンマーでもなく、捕食形態になつた大きい口で受け
止めた。

「せえいやつ！」

ブチブチブチツと音を立てて食い千切る。

神機を通して体に力が雪崩れ込む、全身の細胞が恐るべき早さで活性していく。

普段はめつきり使わないが、今回はバーストを利用する事にした。

「そ、一。」

飛び上がつて銃形態の神機で、ウロヴォロスに向けて弾を発射する。

狙うはその巨躯に似合わぬ細い足、ブラストから発射されたお手製の高威力弾は大爆発を起こしてウロヴォロスをコケさせる事に成功した。

『足か、それに銃撃ならリスクも負わなくて良い……満点レベルの選択だな』

「いやいや、まだまだこれから……」

ウロヴォロスがダウンしたのを確認し、神機をおもいつきり遙か上空へと放り投げる。

あたしの行動にリンドウさんも思わず『は？』という声を上げた。

「まーまー、見ていて下さいって」

手を滑らせてはいけないと左腕の包帯をある程度外し、ホコリを払うように手を打つ。

そしてウロヴォロスの触手の根元を掴み、目を閉じて精神統一……

よし——

「どおりやあああああああああああああああっ!!」

任務報告書（特務） 第1部隊 雨宮リンドウ

2071年 ○月 ×日 一〇〇〇

対象：ウロヴオロス 作戦エリア：嘆きの平原

恐ろしい、余りに恐ろしい光景だつた。

新型のエレナ・コルテーゼを初めてウロヴオロスの討伐任務へと連れて行き、これから処遇を考える為に1人で戦わせた。

しかしあいはダウンしたウロヴオロスを見て何をしたかというと……まず神機を放り投げた、これはまだ……良くはないが、良いとしておこう。

次に何をしたか、ウロヴオロスを掴んだ……流石に何をするつもりか分からなかつた。

その時、目を覆いたくなるような光景が見えた。

あいつが気合いの雄叫びを上げた瞬間ウロヴオロスが浮いたのだ、あの巨体がだ。

それがどうなつたかといえば……まあその、ひっくり返つた。あいつはウロヴオロスを背負い投げする暴挙を成し遂げやがつた。

その光景を目にした俺はどうしたかつて？勿論叫んださ、「一本！」つてな……ハハハ。

雨宮リンドウ著 任務報告書より抜粋。

「さあつてと……」

ひっくり返ったウロヴォロスは触手と足をジタバタさせてもがくが、あの巨体はちょっとやそつとで反転する事は出来やしない。

どうにか復帰しようともがき続けるウロヴォロスの眼前に先程投げた神機が落ちてきた。

あたしはそれをゆっくりと拾い上げる……

「ボツコボコターアム——」

いっぱいあるウロヴォロスの目は、きっとあたしの事を死神のように捉えていただろう。

アラガミとして生まれた自分を呪い、皆の平穏の為の礎となつて朽ちるのが君の運命だ。

「コア剥離出来たー！しかも無傷やよ無傷！」

「あ、ああ……よくやつたな」

大喜びしながらリングウさんに駆け寄ると、顔を引き攣らせながら出迎えてくれた。

ウロヴオロスは顔が無くなる程滅多打ちにされ、足を天高く伸ばし

ながら絶命していた。

「因みにテスト結果はどうですか？」

「まあ、勿論合格だ。見ていた所危険な行動はそれ程見受けられなかつたし、初見のアラガミの弱点をしつかり見抜いたからな……あの倒し方はこの際置いておくとしてな」

よし、とガツツポーズを決めてまた喜ぶ。

何の為のテストかは全然分からなかつたが、合格という物は何であれ嬉しい物だ。

「んじやあ帰るか……あ、この任務の事は皆には話すなよ？ 秘密レベルの高い物だからな」

「秘密レベル？」

「まあ内緒の任務つて事さ」

ランデブーポイントに向かつて歩きながら話す。

しかしリンドウさんは旧型だ、ウロヴォロスを近接攻撃のみで倒すなんて、やはり凄いんだなあとしみじみ考える。

「報告書どうすつかなあ、めんどくせえなあ」

「なんならまたあたしの部屋で書きますか？」

「いや、この前サクヤに散々絞られたから正直な所ご遠慮願いたいんだが……」

「この前頂いた嗜好品チケットで、喜ぶかと思つて大量のビールと交換したのに……」

「行く、行かせてくれ」

「現金ですね」

はつはつはつとお互いに笑い合いながら作戦工リアを後にする。

と――

『あノ、ちよつと良いかナ?』

「? !」

神機が喋った。

間違いない、ロツソの声だ。

「なんで喋れるん? 口無いのに! ?」

『突つ込む所そこかヨ』

「へえ……生きてりやこんな事もあるんだなあ」

『まあ珍しいだろうヨ、俺だつてなんで喋れてるか分かんねえシ』

嬉しいような驚くような、唐突なので何をすれば良いのやらちんぶんかんぶんだ。

『あのデカブツを食い千切つた時になんとなーく喋れる様になつた様ダ。んデ、もう少しで何か喋れなくなりそうだから言つとこうと思つてナ』

『うーん……バースト状態やからかな?』

『多分それダ、力が漲つて表面に出て来られた感覚があつたからナ』

確かにそれが原因ならそろそろ喋れなくなる、何故かあたしのバースト状態は長持ちするのでまだ持ち堪えてはいるが。

『とにかく、帰つてくれて嬉しいゼ』

『待て、お前がエレナの体を作り替えたのか?』

リンドウさんがロツソに食つて掛かる。

少し複雑な表情を見せるが、気になるのだろう。

『いいや、むしろ俺はコイツに持つて行かれた側だからどつちかつてーと被害者だヨ。腕を生やさせたのは俺だがナ、ケケケケ』

「……そうか、無理強いはしていないんだな?」

『ナイナイ、そもそも選択権は無かつたシ』

『分かつた、あんがとよ』

神機に対して礼を言うリンドウさん、少し絵面がシユールだが仕方ないだろう。

『んじゃマ、最後に言いたかつた事だケ……俺の口で攻撃止めるのはやめてくれ、顎が外れル』

「あー……ごめんね?」

『オッケー、そんじゃあまたナー』

バースト状態が終了し、声が出なくなる神機。

リンドウさんはまじまじとあたしの神機を観察するが、ゴツイ事以外に変な所は無い。

「……俺の神機もこんな感じなのかねえ?」

「それは流石に分かりかねます……」

ヘリを待ちながら、2人して今起こつた事に驚きながら呆然と立ち尽くした。

あの子とあたし
みんなにひみつのわるだくみ

次の日、あたしは1人で任務に出ていた。

贖罪の街でのクアドリガ討伐、飛来するミサイルをハンマーで爆発ごと薙ぎ、装甲で防いだりしながらミサイルポッドを執拗に狙つていた。

「うーん……ミスつたなあ」

しかしハンマーを振つても銃撃しても、ミサイルポッドに当たらず狙いを間違えたと後悔する。

気を取り直してハンマーを点火する。

「ええいやあああっ!!」

クアドリガの左前足目掛けてフルスイング。
機械のような部品と肉片を撒き散らしてクアドリガが横向きに倒れ込んだ。

「さあて、ご飯やよー」

大きく口を開いた神機がクアドリガの胴体深くまで噛み付き、そのまま食い千切る。

コアごと体の半分を持って行かれたクアドリガは体が崩れていく。
『うーん、固いのにぬるぬるしてて変な食感』
「食べながら話せるんかいな」

『お前らと違つて口で喋つてないからナ』

さもありなん。

討伐対象を倒すと同時にバーストしてしまつた為にロツソが話せる様になつていた。

『……ン?』

「どしたの?」

神機が明後日の方向を向く。
つられてそつちを向いてみると……

「…………」

女の子と目が合つた。

突然の遭遇に瞬きを繰り返す。

『……マジかヨ……』

「……知り合い?」

『知つてるつちやあ知つてル……』

女の子はボロボロの服……ですらない布きれを纏い、こちらに向かつて歩を進める。

何故かあたしもこの子を知つてゐる気がするが、何故かは全く分からぬ。

「…………」

女の子は崩れかけているクアドリガの亡骸を指でつついていたかと思えばこちらを向き、口に手を当てて体を揺らしている。

神機が口を出し、何やらモゴモゴしている。

『コイツにコアをやるゾ、いいナ?』

「え?」

あたしが聞き返すよりも早く、神機からクアドリガのコアが吐き出される。

少し歪な形をしたコアは地面を転がり、女の子は目を輝かせてコアを拾い上げた。

「あ……そつか、なんでか他人のような気がしないと思つたらそういう事なんや」

『あア……こりやあ忙しくなるゾ』

コアを1口でパクリと食べ、女の子は満足そうに笑顔を見せる。

親近感を覚えたのはこのせいだ、この子は人の形をしたアラガミなんだ。

「でもなんでコアを食べるん? 別に残つてたクアドリガの体を食べれば良かつたのに」

『コイツは特別ダ、人類……いや、この星を滅ぼす存在だからだヨ』

星を滅ぼすアラガミ——

確か博士から聞かされた事がある、アラガミ同士で捕食を重ねていつた先に地球を飲み込む程の大きさになつた《ノヴァ》が起こす《終末捕食》。

しかしそれにしては……随分と小柄だ。

「この子が終末捕食を……?」

『ンー、ちと俺では説明し辛いナ……そういう点に詳しい奴は居ないのか?』

ふむ、そういう事なら連絡を取つた方が良いか。
無線を取り出して博士に通信を入れる。

『どうしたんだい？約束の時間にはまだ10、800秒程早いはずだよ？』

「ああごめんな博士、なんか今珍しいアラガミを見つけちゃって……」「珍しいアラガミ……？」

午後から会う予定だつた博士に繋がる。

少し困惑した様な声を出したので、特徴を説明しようとした——が。

『まあまた後で会うだろ？その時に教えてあげるから取り敢えず帰つてくるといい』

「あ、うん」

そう遮られて通信は途切れた……かと思えば無線のコール音が間髪入れずに鳴り響く。

「はーい？」

『よし、話してくれるかい？こつちの回線なら傍受される危険性は無いからね』

「傍受？」

そうしている間にも神機からコクーンメイデンやザイゴートのコアが吐き出される。

さつきついでに狩つた小型アラガミのコアだが、女の子はどれもこれもおいしそうに口に運ぶ。

「まあええか、取り敢えず真っ白い人の形をしたアラガミで、コアばつ

か食べてる……後、神機が言うには星を滅ぼすとかなんとか」

『……特異点……!!』

「とくいてん?』

目の前の女の子を見て首を傾げる。

手足や髪まで真っ白く、コアを頬張り爛漫な笑みを浮かべるその姿はまるで天使の様だ。

食べてるのはアラガミだけど。

『兎も角連絡してくれたのが僕で良かつた、手持ちのコアを全部あげて餉付けしておいて欲しい。コミュニケーションは取れそうかい?』
「んー」

足元に転がっているコアを左手で掴んで差し出すと、おつかなびつくりそれを掴む。

「それ、ごはんやよ」

「……ソレ……ゴハン……ヤヨ?」

「う・は・ん」

どうやら言葉は発する事が出来る様なので、コアを指さして言葉を教える。

女の子は頭を揺らしながらコアを見つめ、一呼吸置いてコアを空に掲げた。

「ゴハン!!」

「うんうん、ごはんやね」

『誰とも喋ったことないんだろうナア、俺みたいに人間の多い所に居た奴とは違うしナ』

ロツソの一言で不意に同情心が芽生える。

こんな荒野に常に1人、それも周りが敵だらけでは非常に心細かつただろう。

「なんか、可哀想やね……」

『それでもないサ、そもそも生まれた時からこの調子なら辛いとも思わんヨ』

『成程、今喋っているのがエレナ君の神機だね……兎に角、留めておいてくれたお陰で特有の反応がキヤツチ出来たからを追跡が可能になつた。帰つてきたら話すとしようか』

『ゴハンン！ゴハンン！』

女の子は嬉しそうにコアをねだるが、流石にもう手持ちのコアが無い。

身振り手振りで伝えると、少し残念そうな顔をしながらあたしの左手を掴む。

「……おわあああつ待つた待つた!!!」

女の子があたしの左手を包帯ごと噛み付こうとしたので驚いて振り払う。

女の子はキヨトンとしてこつちを見る。

『どうしたんだい!?』

『左腕を食べられそうになつた!』

『……ああ、エレナ君の左腕にコアがあるからなのか……それともプリティイヴィ・マータの素材を使つた包帯だからかな……?』

『なにそれ、この包帯つてアラガミの素材で出来とるんかいな!』

『耐久性の確保に必要だつたからね……まあそれは置いておいて早めに戻つてくると良いよ』

まだまだ女の子はお腹を空かしている様だが現状ではどうしよう

もない、博士の言う通り早々に帰投するとしよう。
女の子に手を振りじりじりと後ずさる。

「帰るよ、またね」

「マタネ……？」

「うん、またね」

そう言いながら距離を取つていくと女の子は自分の手を閉じたり開いたりしながら見つめる。

そして、あたしに向かつて手をブンブンと勢い良く振りながら叫んだ。

「マタネ！」

「……覚えるの早いなあ」

背中を見せると襲われる気がしたので後ずさりしながらヘリの合流地点へ向かう。

女の子はこちらが見えなくなるまで、ずっと笑顔で手を振り続けていた。

「さて——」

アナグラに帰投したあたしは博士の研究室で座つていた。
目の前の金属のコップにはコーヒーが注がれており、向かい側には

博士が立っていた。

「まずはその包帯の話からしようか……左腕に巻いてある包帯はプリティヴィ・マータ、リンドウ君が閉じ込められたあの任務で大量に出現したアラガミのマント部分を使用したんだ」

「ふ、ぶりていぢい？」

「あの時までは極東周りには出現報告も上がつてすらいなかつたから知らないのも無理はないね……回収されたエレナ君の神機からそのアラガミの素材を頂戴して、包帯に仕立て上げたんだよ」

「そりやあ布よりも硬い訳やね」

うんうんと博士は嬉しそうに頷く。
うんうんと納得、素材を勝手に使われたみたいだけどまあいいか。
そして次の話が本題だ。

「さて……まず約束して欲しいんだけど——」

「今からの話は内密に、という事やんな?」

「うん、分かつてているなら大丈夫だね」

内緒話というのは心が躍るのだろう……内容が物騒でなければあたしも笑顔で聞けたのに。

「風説とされている『終末捕食』は実は空想の話じゃないんだ、噂とされている話とは少し違っているという点を除いて結末は同じ……アラガミによる地球の捕食は起こり得る」

「…………」

「全てを食らい尽くして人類をも滅亡させた後、残るのはアラガミの居ない世界……それが生物の居ない地球になるのか、それとも地球そのものが消えて無くなるか……実際に興味深い観察対象だけどそれだけは避けなければならない」

色々と想像してはいたがスケールが大きすぎる、流石にあたしの手に負える様な話では無い。

が、1つ疑問があつた。

「あの女の子がノヴァって事なん？それにしてはあまりにも小さすぎるんやけど……？」

そう、聞いていた地球を包み込む程の大きさとはほど遠い、彼女はあたしより少し大きいくらいの身長しか無かつた。地球どころか支部を潰せるのかも怪しい。

「その子は、『特異点』はノヴァのコアなんだ。それが現れたという事はノヴァが完成、若しくは完成間近なんだろうね」

「……え、メッチャやばない？」

つまりあの女の子が現れた時点で地球がおしまいになるカウントダウンが始まつたという事。

今この時にも地球が終了する可能性がある。

「今は大丈夫みたいだね、一定のルートを行つたり来たりして食欲を満たしているよ」

「……やりたくはないんやけど、あの子を捕食したら地球は助かるんかいな？」

「いいや、すぐに新しい特異点が生まれるだけだ……あの子をそのままノヴァから遠ざけておくのがベストかつ現実的だね」

ノヴァから引き離す……そもそもあたしはノヴァの位置を知らない。

それに、あの子を誘導する方法があつたとしても上手く出来るか自信が無い。

悩みに悩み抜いた結果――

「博士、あたしは何をすればいい？何をしたら地球を……皆を助けられるんかな？」

素直に、博士に頼る事にした。

博士は顔を至近距離まで近付けて口角を上げる。

「嬉しいね、丁度『共犯者』が欲しかったんだ」